

フリアン・カロン

まなざしの輝き

わたしたちを無から
引き離すのは何か？

フリアン・カロン

まなざしの輝き

わたしたちを無から引き離すのは何か？

イタリア語から翻訳: Marcia Akemi Kaida/ Tomoko Sadahiro

Proprietà letteraria riservata

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

導入

《あなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは》¹全世界を窮地に追い込んだウィルスのために、わたしたちの無、わたしたちの脆弱^{ぜいじやくさ}さと無力さがより明確になった今日において、この詩篇の言葉は、いかに意味深いことでしょうか！ 恐れに苛まれ、意味の欠如に煽られた時、どれだけの人々が誰かに徹底的に氣遣って欲しい、脅迫的に迫ってくる無から引き離してもらいたいという望みを自分のうちに見出したでしょう！

《わたしたちを無から引き離すのは何か》この問いかけがコムニオーネ・エ・リベラツィオーネの毎年恒例のフラテルニタ（兄弟会）の黙想会、フラテルニタ（兄弟会）のもっとも大切な行為を導く予定でした。完全なロックダウンの真っ只中にあった4月に行われるはずだった黙想会を衛生上の緊急事態のために断念しなければならなくなりましたが、問いが取り消されることはありません。むしろ最近の出来事に照らされてさらに大きな意味を帯びました。黙想会参加予定者全員に、個人の経験への注意と個人的な貢献の円熟を促すために事前に送られたこの問いは、人生の経験に関連するものとして、すぐに感謝の念を引き起こすと同時に大きな友情のしるしとして感じられました。これは友情という言葉の意味にも光を当てます。つまり、傷つけ戸惑わせる質問、答えにくく不安にさせる質問にも恐れないように助け合うから友人なのです。もしこのことを柵に上げるようであれば、わたしたちが一緒にいることは友情とは言えません。

わたしたちがある種の《無》について話しているのは、現代人の存在、つまりわたしたちの個人的存在および社会的存在は、ニヒリズムによって特徴づけられているからです。特にセンセーショナルで明確な宣言がなされているわけではないのですが、より明らかに広く浸透しているのでその影響は目に見えないわけではありません。わたしたちは文化的な流れではなく、実存的な状態について話しているのです。分析や記述としての興味からではなく、わたしたちが直視したいのはこの状態の本質的と思われる部分だけです。それは、与えられた状況がどのようなものであろうと、その中で一人ひとりの人生が完遂に向かって歩むことを可能にする道を見出したいという情熱から生じる望みなのです。テキストは6章に分かれており、まさに経験と歴史に基づいているため、皆さんの探求と期待に貢献できるよう道のりを描くことを目的としています。

¹ 詩編 8,5

1 章

実在的な状態としてのニヒリズム

明白であってもなくても、意識的であってもなくても、わたしたちの考え方と生き方に忍び込んだニヒリズムにはどんな特徴があるのでしょうか。

1. 現実の実質と人生の肯定性に対する疑念

わたしたちが話しているニヒリズムは、一方で、現実の究極の実質についての疑いとして現れます。つまり、わたしたち自身も含めてすべては無に終わるのだというものです。《物事の外観のはかなさからくる目まぐるしさに端を発し、物事は幻想であり無であるという誘惑が、虚偽的な敗北と否定に発展する》²のです。

上記の特徴と関連して他方では、人生・いのちが肯定的であることと、わたしたちの存在の意味と意義の可能性に対する疑念として浮上します。通常はわたしたちが行うすべてを脅かす隙として感じられ、忙しく、成功している人、手帳に将来に向けたスケジュールや計画が詰まっている人にも気づかないほどの絶望をもたらすのです。

1980年代の有名な映画 *The never ending story* (ネバーエンディングストーリー) は、示唆的で効果的にこの状況をほのめかしています。《「無」の背後に隠れる「権力」のしもべ》グモルクと、「無」を止めるために呼ばれた若い英雄アトレユとの対話です。《人々は自分たちの希望を失い始め、夢を忘れていた。だから「無」が広がっている》とグモルクが言うと、《「無」とは何ですか》とアトレユが問います。《わたしたちを取り巻く隙だ。それは世界を破壊する絶望で、わたしは手助けをしている[...]なぜなら、何も信じない人の方が支配しやすいからだ。そして、これが権力を獲得するもっとも確実な方法だからだ》³というものです。

このような示唆に富んだ隠喩と映像には、今日わたしたちが《ニヒリズム》という言葉で示している態度が何となく表されています。わたしたちは皆、社会現象となっている人生・いのちに《広がっている無》、《破壊する絶望》、《取り巻く隙》を認めることができます。

おそらく、新型コロナウイルスのことが起こって、長い間起こらなかった立ち止まることを余儀なくされた事実が、自分が何であるのか、どのように生きているのか、何によって生きているのか、自分自身や物事についてどのような意識を持っているのかをわたしたちに考えさせたのでしょう。トルストイが《今日の間が一瞬だけ自分の行動を中断して、自分

² L. Giussani, *L'uomo e il suo destino*. Genova: Marietti 1820, 1999, p. 13. 逐語訳

³ *La storia infinita (Die unendliche Geschichte)*, RFT 1984, regia e sceneggiatura di Wolfgang Petersen 逐語訳

自身の理性と心の要求を存在の現状と比べて考えてみれば、自分の人生・いのちのすべてと自分の行動すべては、明らかに、自身の意識、理性と心とは常に矛盾していることが一目瞭然である》⁴と述べているように。

ある女子高校生が長々と考えた末、自分自身について気がついたのは《社会的距離を置く一週間目には他の人と同じようにとても落ち込みました。自由に外出できず、友人やボーイフレンドに会えないで家に閉じ込められることに恐れを感じました。その後何件か電話をかけて気分は持ち直しました。特に一人の友達に“わたしは大丈夫…、いやそうでもないかも”と答えたら、わたしの答えが何を意味するかを掘り下げようとしていました。彼と話しながら、わたしは長い間、自問しなかったことに気づきました。恐れも少しあったけれど、不快な答えに行き着くのを避けるためにスルーしていたのです。自分は幸せではないのに、自問しないことは愚かであることに気づきました。そして、わたしは本当に何を恐れているのかと自問し、一番不安なのは沈黙だとわかりました。なぜなら、わたしを考えさせ、問いの前に立たざるを得なくさせるからです。こうした問いに圧倒されないため、わたしは、しばしば眠りが訪れるまで考えたくないことにとらわれないようにそれ以外のありとあらゆることに考えを向けて、自分自身のことを考えないようにしています。ある問いに対する答えが気になり、知りたくない自分の部分と向き合うことや、骨の折れる道のりに向けられるのが心配なのです。友達に言われたように、極度に活力を奪い、鈍感にさせる落胆や悲しみの時をわたしは笑顔や笑いの気泡の中で生きることを好んでいます。わたしは感情のメリーゴーランドに乗っていて、ある日は高みに行き、別の日はもっとも不愉快な暗闇に陥るのです。良い感情で心は高ぶるけれど、その後は“美しい体験”の引き出しの中に収めるのです。けれども、それでは十分ではなく、わたしはもっと多くのことを望むことに気づきます。わたしは必然的に大きなものがほしいのです。なぜなら、キェルケゴールの言うように、“永遠の必要を感じる人間の魂を満たすことができるものは、限界のあるものでも、全世界でもない”からです》というものです。

少し前 *Tracce* (イタリア語版‘あしあと’)はこのニヒリズムについて《はっきりとした特徴を見せないことがあるため、気づきにくく読み取りにくい明敏な敵である[…]多くの場合は手ごたえのない、限りない空虚の姿をしている》⁵と述べていました。手ごたえがないにもかかわらずとても具体的なものだと付け加えておきます。ある大学生の友人は《無は想像以上に気づきにくくじわじわと忍び寄ってくるもので、多くの場合、わたしの日常を支配しそうな日々小さな無》だと認めています。

見えていない人も、頑なに見ないようにしている人もいるでしょうが、可能な限り問題に焦点を当てて言えることは、現実の実質に対する疑念と、人生の意味および完遂の可能性に対する不信感とが絡み合い、わたしたち皆に関わるこのニヒリズムを相互に支えあっている

⁴ L. Tolstói, 《Il non agire》 in: Id., *Il risveglio interior*, Incontri, Sassuolo, 2010. 逐語訳

⁵ C. Esposito, 《Il nichilismo della porta accanto》, *Tracce-Litterae communionis*, n.10/ 2019, pp. 12-18.

Tracce-Litterae communionis はコムニオーネ・エ・リベラツィオーネ運動の月刊誌。 逐語訳

るということです。

要するに現在のニヒリズムはわたしたちの外（わたしたちが置かれている状況で、時には《笑顔や笑い、落胆や悲しみの瞬間で作られたどれも活力のない不透明な気泡》と表現できるもの）と、内（高校生の手紙にあったように《それでは十分ではなく、わたしはもっと多くのことを望むことに気づきます》）とに感じられる隙として捉えられるということです。この隙の結果、わたしたちの現実と状況との関わりが弱くなり、最終的にどの関わりも愚かに映り、わたしたちから真の同意を得るに値しないと感じられるようになるのです。自己は麻痺状態に陥り、目まぐるしい活動の旋風に巻き込まれている時でさえ、起こることとの深い関わりは停止するのです。だから、様々な活動は新型コロナウイルスのために突如として一時的に中断され、多かれ少なかれ、わたしたちは皆、どこに向かっているのか、自分の人生をどう生きようとしているのか、それを実際に支え得るものは何かについて“強制的”に考えさせられたのです。

この目まぐるしさは恐らくロックダウンの間も沈下せず、多くの人にとっては単に形や方法が変わっただけです。こうしてルイスの言うように《「虚無」は強力だ。「虚無」は人間の最良の年を、甘美な罪のうちにではなく、何とも知らぬ対象にたいして、なぜとも知らず心がわびしく揺らぐうちにむなしく浪費させる。本人自身も気づかないほどかすかな好奇心を満足させるだけで、人生の年月がむなしく過ぎ去る》⁶ことをわたしたちは発見したのです。わたしは不安にさせる問いに足を止めないために無数の刺激の中で即時の満足を求めて、この時期に実行した様々な試みを思い浮かべています。

麻痺状態、心の揺らぎ、そして無関心についてオーウェルが予言的小説‘1984年’で《彼は、現代生活を真に特徴づけるのは残酷さや不安定さにあるのではなく、潤いのなさ、生気を欠いた無関心にあるのだとふと思い当たった》⁷と指摘しています。《無関心》が自己の奥底をむしばみ、わたしたちと起こることの間に隔たりを、溝を掘るのです。《ぼくの周囲には、尊敬できるもの、心を惹かれるものが何もなかったのだ》⁸とドストエフスキーは書いています。

従って自己を本気で夢中にさせるものは何もないようです。一時的に熱中するものであっても、わたしたちが関わる物事や行うことは退屈なのです。

これが今日におけるニヒリズムの姿です。つまり無気力、緊張感とエネルギーの欠如、人生の味わいの喪失です。《富は増大していることでしょう、しかし、力は減少している。人類を一つに結びつける思想などありません。何もかもが弛緩しきり、何もかもが、だれもかもが骨抜きにされてしまった！》⁹のです。

⁶ C.S. ルイス、*悪魔の手紙*、C.S. ルイス著作集 第一巻、中村妙子訳、すぐ書房、東京 1996年、p.366.

⁷ 参照. ジョージ・オーウェル、*1984年*、高橋和久訳、早川書房、東京 2020年、p.114.

⁸ F. ドストエフスキー、*地下室の手記*、江川卓訳、新潮社、東京 2005年、p. 75.

⁹ F. ドストエフスキー、*白痴3*、亀山郁夫訳、光文社、東京 2018年、p. 143.

2. 人生・いのちに見合った意味の喪失

わずか17歳のチェーザレ・パヴェーゼは人間の人生・いのちに見合った意味の喪失に対する思いを《孤独な道を行くこと/絶え間なく恐怖を覚えながら/目の前で消えていくのではないかと/ずっと憧れている被造物が。/魂の中で衰えていくと感じる/熱意、希望…すべて…すべて/そして愛なしで残される/[...] /日々の悲しみにのろわれて》¹⁰と悲痛な表現でつづっています。

数ヶ月前、若い大学生が《これまでにはなかったことですが、最近、無を生きる瞬間があること、人生の展望が望みの崩壊に特徴付けられる時に、自分が見えなくなること、半分しか生きていないことに気づきました。わたしの中で無は繊細に語りかけ、自分を守るように仕向けるのです。つまり、他の人の提案を考慮することなく、自分の頭の中にあることだけにやる価値があるのだから、余計なエネルギーを消耗しないようにするのです。さらに、自分の思い悩みを人と共有する価値はないので、人間関係は適当でいいとも考えます。要するに、無はわたしを最小限必要なものに誘導するので、わたしはますます心が乾き、不満に陥るのです。11月末のこの日々も物悲しい雰囲気の中で生きているような気がします。新入生との思いがけない関係や先輩の卒業など多くの美しい出来事があったのに、しばしば自分の考えや思い悩みに閉じ込めています。まさに、わたしは説明できない不快感と無に振り回されていると気づきます》と書いてきました。

同じ経験は、わたしが最近受け取った別の手紙の《〔衛生上の緊急事態による社会的距離のために〕仕事もせず家にいながら、あなたが言う無が何であるかを肌で感じ始めました。今この時間が永続するものによって満たされないなら、まったく空虚であり、わたしは無です》という一節にほのめかされています。

それだけではありません。実際に、これらの手紙に強調された特徴に加えて、自分たちが保っている姿(前に触れた《手ごたえのない、限りない空虚の姿》)を変え、立ち上がるには無力だと感じるのです。まるで努力や外からやってくる刺激では、自分自身と物事に対するまなざしを変え、現実の深さを感じさせ、わたしたちを立ち上がらせ、空虚から救い出すためには十分ではないかのように。

それはわたしたちの同時代人の多くを結びつける痛みを伴う経験です。《実際に、絶対的な孤独、普遍的な空虚感そして存在が痛ましい決定的な災害に近づいているという予感が一つとなって、具体的な苦痛の状態に陥らせる頻度がますます増えることを防ぐことができるものはない》¹¹とウェルベックが言っているように。このため教皇フランシスコは今日の《深刻な脅威は、生きる意味が失われていることです》¹²と主張しています。

¹⁰ C. Pavese, «A Mario Sturani», Monza - Torino, 13 gennaio 1926. 逐語訳

¹¹ M. Houellebecq, *Estensione del dominio della lotta*, Bompiani, Milano 2007, p. 15. 逐語訳

¹² 一般謁見、2019年11月27日 カトリック中央協議会

《たゆまず熱心に現実を生きる》¹³ ことができるためには、自分の全範囲を目覚めさせ、現実と様々な状況の挑発に再び開かせる何かが必要です。わたしたちは色々な事柄が次々と起こるだけでは十分ではないことに気づいています。わたしたちは傾斜地を上ろうとする人が、滑って再び出発点に戻る状態にいます。わたしたちは再び無に戻るのです。それに対して何が対抗できるのか、どこから出発すればいいのか見当もつきません。こうして、わたしたちは自分自身に深い不快感を覚えるのです。

それは、精神分析医ガリンベルティが、若者のうち一だが、誰にも当てはまる一に見出したどんよりとした気分のことであり、年度始めの日に引用した《若者は健全ではないのに、その理由を理解していない》¹⁴ という一節そのものです。

《年度始めの日にガリンベルティのこの引用文を聞いて心が引き裂かれる思いでした。なぜなら、今のこの時期のわたしの生き方を完璧に描写しているからです。数か月前から自分が成すすべてのことに不満と悲しみのようなものを感じるのです。この不満はすべてにあり、笑顔と多くのやるべき事柄の仮面の裏に無が支配しているかのように、真の意味、真の喜びが欠けているのです。意味が欠けていると義務だけで、役に立たない“なければならぬ”が残り、それはわたしをさらにどん底に引き寄せます。おそらく、これはまさにあなたがよくわたしたちに話すニヒリズムです。これはわたしの存在に関わる問題です。実際、今はあまり生きている心地がしません。その一番の証拠は、わたしの計画通りに進まないものはすべて、わたしを葬り去る非常に重たい石になるということです。何でもなく、自分の望むようにいかない些細なことでわたしは持ちこたえられず、屈して放ってしまうのです。現実を前に、わたしはあきらめて打ち沈んでいるかのようなのです。仮面を使い、問題はないふりをして前に進もうと努力しても、心の奥底では、起こるすべてのことや目の当たりにするすべてを前に、理由はわからないけれども悲しいのです。ただ数年前までは逆だったのです。困難は、足を引っ張る重たい石ではなく、跳躍台でした。今は心の中の要求は見えないように、そんなものは存在しないふりをして、自分は大丈夫なふりをするので、何にも驚きを感じません。わたしには自分が陥った無に打ち勝つ大きな何かが必要です。挑発的な質問を投げかけて、わたしに寄り添ってくれることをあなたに感謝します。そして、助けてほしいのです。わたしには再び驚くこと、日常の中で起こることを理解する必要があるのです。なぜなら、この無の状態にずっと止まっていたくないからです》と、若い友人が書いてきました。

わたしたちは、過ぎて行く時間を何とか埋めるために、特に主張しない些細な事柄に注意を向けて、自分自身を放ったらかしにするのです。《無というのは選び取るものではなく、無に自分を委ねるのである》¹⁵ 真に自分のすべてをかけるような《自分自身を犠牲にするほ

¹³ L. ジュッサーニ、*宗教心*、貝田マルシア/貞広伴子共訳、ドン・ボスコ社、東京 2007、p.185

¹⁴ U. Galimberti, «A 18 anni via da casa: ci vuole un servizio civile di 12 mesi», intervista di S. Lorenzetto, *Corriere della Sera*, 15 settembre 2019. 逐語訳

¹⁵ C. Fabro, *Libro dell'esistenza e della libertà vagabonda*, Piemme, Casale Monferrato (AL) 2000, p. 28 逐語訳

どの理想は存在しない。いったい何が真実であるかを知らない わたしたちは、皆の嘘を知っているから》¹⁶とマルローが言っているように。

見てわかるように、今日のニヒリズムは昔とは違うものです。勇ましく価値観に対抗した昔のニヒリズムとは異なり、野心的ではありません。“普通”の生き方に見えるけれど、やりがいがあるものは何もなく、惹きつけるものは何もなく、真に自分をとらえるものはないので心の中は蝕まれているのです。それは受動的に入り込むニヒリズムであり、肌の下に浸透し、スタートした次の瞬間に疲れ果てるマラソンランナーのように、望みを疲労させるのです。アウグスト・デル・ノーチェは《陽気なニヒリズム》、《不安の種のない》について、表面的な喜びの中で《アウグスティヌスの安らぎのないわたしの心》¹⁷を否定しようとするニヒリズムなのだと書いていました。

3. 一つの選択肢を前にする自由

こうした背景の中でわたしたちの自由は一つの選択肢を前にしています。自問してみましょう。ウェルベックの著書にある《わたしは空間と時間が交差する所で待ち伏せしながら、/ 冷めた目で無の前進を観察する》¹⁸のように、わたしたちの人生・いのちの中に無が押し寄せてくる光景を遠くから観察しているだけでいいのでしょうか。

自由は見ないことにして逃げるのだと決めることもできます。《OK、わたしたちは無のなすがままだ。だから？ どうでもいいじゃないか！》と言って、単に目をそらすことによって問題は解決すると錯覚することがあるのです。どんな場合にも取れる態度です。今も活躍中のもっとも有名なヨーロッパの思想家の一人であるエドガー・モリンは、《誤りや錯覚の原因は、わたしたちを不快にさせる事柄を隠匿したり、それらの事柄を麻痺させたり、わたしたちの頭から排除することだと理解した》¹⁹と鋭い指摘をしています。歯を抜けば痛みはなくなります。それは、目に見えなければ、心は感じないと言うようなものです。わたしたちは新型コロナウイルスのこの時世にありとあらゆる試みをしました。もしヨブがわたしたちの時代に生きていたら、友人ツォファルは、彼が被った不幸を慰めるために、《社会的距離を強いられる時には、気を紛らわすことが必要だ！楽しむことより優れた鎮痛剤はない！》と言ったかもしれません。

しかし、そうでしょうか。デル・ノーチェの言う自己の心から気がかりを除去する陽気なニヒリズムや、モリンの言う無が押し寄せることをわたしたちの頭から排除するという意図によって本当に成果をあげられるのでしょうか。各自自分の経験を注視して判断して下

¹⁶ A. Malraux, *La tentation de l'Occident*, Bernard Grasset, Paris 1926, p. 216; 逐語訳

¹⁷ A. Del Noce, *Lettera a Rodolfo Quadrelli*, Inedito, 1984 《現代のニヒリズムは陽気なニヒリズム、不安の種のないものである（おそらく、アウグスティヌスの安らぎのないわたしの心の撤廃とすることができるだろう）》逐語訳

¹⁸ M. Houellebecq, *Cahier*, La nave di Teseo, Milano 2019, p. 23 逐語訳

¹⁹ E. Morin, *Insegnare a vivere. Manifesto per cambiare l'educazione*, Raffaello Cortina, Milano 2015, p.14. 逐語訳

さい。わたしたちは本当に、目をそらすだけで問題を解決できるのでしょうか。

アンドレア・モモイーティオのように《あなたは大変な日常を過ごしているでしょう？大丈夫、わたしが WhatsApp (SNS) でずっと回しているジョークを送りますから。まったく面白いとも思わないし、他人を笑わせようとしながらも、自分はただセントラルホスピタル [テレビシリーズ] を見ていただけなので皮肉屋のように感じます。同僚のアンドレア・リーバと一緒にビデオを撮影し、インスタグラムに投稿するためにくだらない画像フォーマット (gif) を考え、その後は何も信じていないので持ちこたえられません。わたしの世界がここにあることを知る必要を感じるけれども、そうではないのです。[...] わたしは 絶望しているということと、多くの喜びと非常に楽観的な雰囲気、多くの Zoom の要求、多くのメッセージや拍手、多くのばかげたことを理解するのに苦労するという以外何も言うことはありません。この怒りと共生することを学ぶこと以外はないのです。誰のせいにするばいいのかわからないわたしを支配するこの怒り》²⁰と、この解決法の不適性を告白する誠実さを持っている人もいます。同じような素直さで、ソル・アギーレは《こんにちは、ばかげたことを話しているのは[...] もしかしたら、この中の一つでも不機嫌な人を笑わせるかなと思って。もう一度、笑いをあまりにも暗い現実に対する救済手段として。しばしば見下される爆笑は常にわたしの治療法です》²¹と、根拠がないと自分でも認めている療法を考え出したと告白しています。

実際は《誰も[...] 純粋に単に生きることで満足しません[...] わたしたちは何かのために生きたいのです》²²と、シモーネ・ヴェイユは述べています。わたしたちは全身全霊をかけて生きたいのです。再びドストエフスキーは《思考において間違えることはあるかもしれないが、心について間違えることや誤って自分の意識をそらすことはできない》²³と警告します。

心について間違えることができないのであれば、それは何を意味するのでしょうか。

わたしたちのどんよりとした気分一つまり、わたしたちの日々を腐食させるあの無の問題一を徹底的に解決できない無力さに対して、わたしたちはそれを撤去しながら、考慮しないと決めることができます。ところが、驚くことに痛みは残るのです。本当です！心の気がかりは覆い隠すことはできてもつぶすことはできません。不満を隠すことはできても排除はできません。わたしたちの中には、最終的には黙らせることができない何かがあるのです。仮面をかぶり、何でもないふりをして前に進もうと努力するにもかかわらず、わたしたちは悲しみに陥り、すべてが自分を押しつぶす重い石のようです。歯を抜けば痛みはなくなるというとはまったく違うのです！痛み続けるのです。わたしたちの中には抵抗をあらわにするものがあるからです。《ぼくの内部の心と良心の奥深いところに、何か死にきれずに残っているものがあつた。いや、それはどうしても死んでしまおうとはせず、しめつけるよう

²⁰ A. Momoitio, *Público*, 10 aprile 2020 逐語訳

²¹ S. Aguirre, *El Español*, 3 aprile 2020 逐語訳

²² S. Weil, *L'amore di Dio*, Borla, Roma 1979, p. 78 逐語訳

²³ F. Dostoevskij, *Lettere sulla creatività*, Feltrinelli, Milano 1991, p. 55 逐語訳

な憂愁となってその存在を知らせるのだった》²⁴と、ドストエフスキーは言っています。

何が抵抗するのでしょうか？昨年何度も言及したベルナル・アンリ・レヴィへ宛てた手紙の中でウェルベックが《愛されたいという望みが常に増すと感じているのを認めるのはつらいものだ。当然このような夢がつまらないものだという事は、少しばかり省察すれば毎回納得できる。なぜなら、人生・いのちには限りがあり、ゆるしは不可能なので。しかし、省察は何の役にも立たず望みは消えることなく、今も続いていると認めざるを得ない》²⁵と書いているものです。

人生・いのちの問題を“解決する”ためには目をそらせばいいだけだなどと言う誰かの言いなりにならず、自分をだまそうとしないようにしましょう。ニヒリズムは、まずわたしたち自身の内に抵抗の場を見出します。そのことに注意を払いましょう。

新型コロナウイルスの挑発に直面してイザベル・コイシェは《わたしたちが当然だと思っていたものはすべてなくなりました。そして、わたしたちの前に広がるのは光を奪う濃霧です。わたしは今この時を、永遠になりつつあるこの数分をどのように生きればいいのか分からないことを認めます》²⁶と、自分の無力さを認めざるを得ませんでした。スペインの映画監督は、わたしたちと同じように彼女に起こっていることをどう扱えばいいのか分からないと認めています。そして、そのことが終わりのない悪夢の中で過ぎ去る瞬間を変え、彼女をどんよりとした気分させるというのです。ソル・アギーレは自身の隔離の経験について《隔離された最初の一週間は怖い思いをしました。ウイルスのためだけでなく、悲しみがわたしを襲ってくるのではないかと思って。耐え難く、長引いて目も人生・いのちをも曇らせる悲しみについて言っているのです。このことを誰にも告白していないのは、誰かに言ったら、“幸せになるように、計画を立て解決策を見つけて”と言われるに違いないからです》²⁷と述べています。

4. 根絶不可能な望み

この人たちの反応、素直でむき出しの告白で明らかにされているのは何でしょう？完遂の願望、愛し愛され、自分自身と現実の意味を余すところなく知りたいという望みの、人間の本質的な構造の存続です。ウェルベックのような人にこれを見るのは驚くべきことです。わたしたちは、自分自身の望みが向かう究極の方向、わたしたちの存在の真底を貫く緊張に対して無力です。このことをアウグスティヌスは《*Fecisti nos ad Te, Domine, et irrequietum est cor nostrum donec requiescat in Te*/主よ、あなたはご自分のために我々をお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないの

²⁴ F. ドストエフスキー、*地下室の手記*、前出、p.170

²⁵ M. Houellebecq, B-H. Lévy, *Nemici pubblici*, Bompiani, Milano 2009, p.10. 逐語訳

²⁶ I. Coixet, *ABC*, 31 marzo 2020 逐語訳

²⁷ S. Aguirre, *El Español*, 10 aprile 2020 逐語訳

でず》²⁸という忘れがたい表現で表しています。異なる名称かもしれませんが、今日の文化的習慣および社会現象となっているまさにニヒリズムの奥底に、その矮小化できない本質的な心の素地が兆しを見せるのです。

それでは、解決できない問題から逃げて生きたくない者の最初の動きは何でしょう？まさにこの意味が欠けている状況で、ニヒリズムに、すべての合理主義的なシニズム（皮肉主義）に抵抗する、抑えきれず根絶できない何かがあることを認めることです。何が抵抗するのでしょうか？それは、矮小化できないわたしの自己です。

注意深く見るなら、ある時から“風潮”“文化”になってしまい、自分も浸っている意味の空虚を被っているにもかかわらず、消えることのない自己の、わたしの基本的な構造を認めざるを得ません。つまり、無が蔓延すればするほど、わたしたちの人間性の傷と期待は力強く浮かび上がるのです。それは、もはやわたしたちに対して影響力のない文化的な論理や集団の計画に覆われず、多くの理屈で身を守らない、もっとも本質的な姿で浮かび上がる期待と傷なのです。ドストエフスキーは《ぼくの内部の心と良心の奥深いところに、何か死にきれずに残っているものがあつた》と言っており、チェスタートンは《あなたは真に難破した時、真に必要なものを見つける》²⁹ものだと指摘しています。

わたしたちは新型コロナウイルスによる世界的流行で、その事実を驚くほど思い知らされました。麻痺状態から目覚めさせられ、多くの疑問が浮かび上がったのです。Tracce のインタビューでマウリツィオ・マッジャーニは《わたしたちは、すべてが非の打ちどころのない独自の論理を持ち、もう何も起こり得ない、そこが終点のような時代にいました。システムはどんなかすり傷も受けてはならなかったのです。[...]ところが地震がこの不動の広がりにはさざ波を立て、狼狽する光景に変えました》と語っています。この地震による最初の結果は何でしょう？問いです。《各自が問わなければならないのです。なぜなら、問うことによってそれほど狭くない場所に置かれ、自分自身を閉じ込めた獄舎の格子が外されるのです。[...]騒乱の中で、わたしたちの大混乱の中で、わたしたちは理性へと、大人の状態へと向かうことができます。どうやって？まさに問いながら。質問することによって》とも言っています。問いを前にすると、たびたびわたしたちに同行する《すべての傲岸、傲慢》³⁰は静まります。

目まぐるしい状況に挑発され、質問はわたしたちが避難していた快適ゾーンの壁に亀裂を入れたのです。気泡が崩壊しました。ヌリア・ラバリは《わたしたちはあまりにも長い間麻酔状態で生きていました》《その基礎においてあまりにも誤っているシステムの一部として》³¹と言っています。わたしたちはドン・ジュッサーニが宗教心の10章で《現実とあま

²⁸ アウグスティヌス、告白I,1 中央公論社、世界の名著、責任編集山田晶、東京、1968、p.59

²⁹ G.K. Chesterton, *Le avventure di un uomo vivo*, Mondadori, Milano 1981, p. 62 逐語訳

³⁰ M. Maggiani, «Il cambio della vita», intervista a cura di Alessandra Stoppa, *Tracce-Litterae communionis*, maggio 2020, pp. 15-16 逐語訳

³¹ N. Labari, *El paris* 18 marzo 2020 逐語訳

りぶつからず生きてきた人は努力する機会が少なかったであろうから、自己意識に乏しく、自分の理性の振動と力をあまり感知していないだろう》³²と主張していることの経験をしたのです。

現実が強くわたしたちにぶつかって来る時があります。その時には、衝撃を和らげたり、その挑発を避けたり無視したりすることは大変困難です。この出来事は一わたしたちの自由が同時に働くことによって一わたしたちの注意を目覚めさせ、理性を再び動かし、その本質の表れである意味の要求を解き放ったのです。わたしたちを成している意味の要求の切実さについて話しています。あからさまな現実との衝突—受け入れられた場合—がこれを力強く再びあらわにしたのです。こうした意味で《人間の目覚め》³³という言い方をしたのです。

5. 答えを含む叫び

ニヒリズムが押し寄せて来れば来るほど、意味がなく生きることは不可能だということがより明確になり、大切にされたい、愛されたいという不滅の望みをより感じさせるのです。

これは福音書に出てくる《放蕩息子》³⁴に起こることです。どん底に落ちていくにつれて、自分でも驚くほど父親が懐かしく感じられるのです。父親などいないと思う人、ウェルベックがベルナル・アンリ・レヴィへ宛てた手紙に描かれた態度に同意するような人でさえ、愛されたいという望みは消えずに続き、矮小化できないことに気付きます。《わたしたちの時代は言葉に対して疑い深く、絶対的原理を避ける。にもかかわらず、望みの意味を知っている》³⁵のです。このためチェーホフは、目の前にいる人がどんな人であるかをとらえるために注意すべき点はその人の望みだと言います。《過去に、誰かをまたは自分自身を理解しようとした時、わたしが観察したのは、すべてが複雑な行動ではなく、[特に自分自身に対しては、がむしゃらな道徳主義者のように自分の過ちに目を止め、その後自分を“打ちのめす”誘惑に大抵陥るように] 望みだった》³⁶と言うのです。それはイエスがすることです。実際イエスはサマリア人の女性に何を見たのでしょうか？彼女の望みです。彼は彼女の渇きに対して《わたしはあなたの渇きを満たす唯一の水、新しい、異なる水を持っている》³⁷と言いました。この意味でチェーホフは《あなたの望みを言ってください。そうすれば、あなたが誰であるかを教えよう》³⁸と結んでいるのです。

³² ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出 p.171

³³ Cfr. J. Carrón, *Il risveglio dell'umano*, Riflessioni da un tempo vertiginoso, Bur, Milano 2020, ebook 逐語訳

³⁴ ルカ 15,11-32

³⁵ E. Varden, *La solitudine spezzata. Sulla memoria cristiana*, Qiqajon - Comunità di Bose, Magnano (Bi), 2019, p. 143 逐語訳

³⁶ A. Čechov, «Una storia noiosa» in Id., *Racconti*, Einaudi, Torino 1974, p. 201 逐語訳

³⁷ ヨハネ 4,4-42 参照

³⁸ A. Čechov, «Una storia noiosa» in Id., *Racconti*, 前出, p. 201 逐語訳

わたしたちの望み、心の奥底から真に望むものは、わたしたちの自己の究極の顔を特定します。ジュッサーニは《わたしの人生の経験から来るこの継続的な望みに注意を向けることは[...]わたしの言うことを感じの良い[興味深い]ものにするのだと思う。なぜなら、明らかに人間的なものだからである。だが同時にもっとも受け入れられていないことである》³⁹と書いていました。実際に多くの人はいそれをもみ消して目をそらせ、踏みにじろうとします。

この状況でどのように生きればいいのか？失う危険にあるいのち・人生・生活を取り戻すためにどこから出発すればいいのか？この問いは具体的な切実さを表し、それは肉に刺さったとげのようなものです。「無」の蔓延にもかかわらず抵抗し、問いをさらに激しく燃え立たせ、いのち・人生・生活を劇的にする矮小化できない望みのため、わたしたちは二者択一を迫られているのです。諦めて目をそらせ、何でもないふりをして自分自身をばかにするか、あるいは、わたしたちのすべての望みを叫ばせ、誰にももみ消すことのできない心のすべての切実さに応じるかの分岐点に立たせられるのです。わたしたちは自分自身の不快感を皮切りにして、現実を認めて完全な意味、完全な満足への渴望を叫ぶことができるのです。

しかし…最終的に何もないなら、叫ぶことは理性的でしょうか。時には、わたしたちは落胆し、叫ぶことに疲れていることに気づきます。または、叫ぶ価値があるかという疑いが勝ることがあります。この落胆や疑いの理由は、わたしたちが心の叫びの存在を、どんなニヒリズムにも抵抗するあの望みを当たり前とみなすからです。けれども、叫び、問い、望みの存在は、もっとも当たり前ではないものです。ですから、それについてよく考えてみると、わたしたちはその存在に驚嘆し始めるのです。では、叫びの存在は何を意味するのでしょうか？

叫びがあるなら答えがあります。この種の主張は理解しにくく、受け入れがたいことがあります。その理由は、前にも言ったように、叫びを当たり前だと思っているからです。理性をフルに使い、経験の中に現れるものに対する誠実さから、ジュッサーニは普遍的な原則である《問いの存在自体が答えの存在を示唆する》⁴⁰を見出します。どんなに謎に包まれていても答えは存在するのです。問い自体に含まれています（この意味で以前引用したインタビューでマジジャーニは、答えは《すでに質問に含まれている》⁴¹と指摘しています）。事実、ジュッサーニは《答えの存在を認めない態度は問い自体を除去することになる》⁴²と強く迫ります。

わたしたち一人ひとりの自己は《最終的な目標—いつもいのちの水平線上にある—を渴

³⁹ Fraternità di Comunione e Liberazione (FCL), *Documentazione audiovisiva*, Giornata di meditazione per gli sposati, Milano, 23 gennaio 1977 逐語訳

⁴⁰ ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.101

⁴¹ M. Maggiani, «Il cambio della vita», 前出、p.15 逐語訳

⁴² ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.100

望するが、それに達することはない》⁴³のです。意味、愛、完遂の要求は、《具体的な経験を超越、その向こうにある究極的な答えの存在をほのめかす》主張ですが、存在するものです。なぜ存在するとわかるのでしょうか？繰り返しますが、その存在はわたしの人格の躍動に、わたしの人間性の要求の構造に含まれているからなのです。《もし、見える現実を「超えるもの」が存在するという仮説を排除してしまうなら、これらの要求は自然に反して抑圧されてしまうのである》⁴⁴とジュッサーニは続けます。

徹底的な意味、完全な説明を求めることは、わたしたちの理性を成すものであり、理性の最高の表現です。問うことによって、たとえ、それがわたしたちの測り得るものの範囲を越えていても、わたしたちは答えが存在すると認めることを“強いられ”ます。《人生の中で経験する事柄のうちその説明[理性や自己]は得られず[…]、もしわたしたちが理性に反しないなら、すなわちわたしたちを特徴づけるこのエネルギーに従い、これを否定しないなら、わたしたちの人生・いのちを超越るところに徹底的な答えがあることを理性の動き自体が認めざるを得ないのである》⁴⁵とジュッサーニは言います。わたしにとらえ得るどんなものとも一致せず、何であるかは分からないけれども、それが存在することを知っているのです。さもなければ、叫びは存在せず、問いの存在も説明できなくなります。

理性自体を織り成す可能性のカテゴリーを廃止すると、手の届く範囲に矮小化できないため答えの存在を肯定するのが難しいので《存在しない。存在することは不可能だ》と言ってしまい、理性をその本質から否定し、その重要な躍動を衰えさせるのです。もしわたしが森の中で道に迷ったなら、《助けて！》と叫ぶことがもっとも理性的な行動です。しかし、叫ぶことは、わたしの叫び声を聞く人がいる可能性を意味しています。その可能性が実際どんなに低くても、誰かが聞くかもしれないということを完全に排除することは絶対できません。それは他者の存在を示す可能性だからです。さもなければ、叫ぶことはばかげています。

今まで言ってきた意味で、答えの存在を認めないことは、問いがあるにもかかわらずそれを否定することになり、理性の躍動を否定し、望みの勢いを裏切ることになります。まさにこの《非理性的》な《絶望》⁴⁶が歩んでいく過程で遭遇する難しさのために現代人、つまりわたしたち一人ひとりを襲う強い誘惑です。

6. 叫びを受け止める《あなた》

叫びは、理性の意味への渴望と心の完遂への要求の表現として、人間の本質に属します

⁴³ ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.89

⁴⁴ 同上 p.195

⁴⁵ 同上 p.197 ジュッサーニは次のページで《理性の頂点は未知の、手の届かない存在を感知することである。人の動きはすべてその存在を求め、それに依存さえしているのである。それが神秘なのである》と続けている。

⁴⁶ ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.126～127 参照

。それは、過小評価されたり、弱められたり、反対されたりすることはできますが、自分自身にも他者によっても根絶されません。わたしたちの手には及ばないのです。それはレオパルディによると《人間の本质に見られる偉大さと高貴の最大のしるし》⁴⁷です。もちろん、わたしたちはそれを考慮に入れないよう様々な方法で誘惑されて、開かれ、忠実であり続けることがどれほど難しいかを見ることができます。ロックダウンの間に多くの人の証言にあったように、わたしたちはそれが顕著に、明確に表面化するのを感じました。またある時には、それを満たす食べ物を見つけるのが難しいために食欲が減少するというか、探しているものの気配が見られないため冷めていく探求のようなものです。

問いはどんな時に再び目覚めるのでしょうか？わたしたちの目の前に答える存在を見出す時、わたしたちの全面的な問いにふさわしい存在を見出す時です。だから、人間の人生・いのちの奥底にある問いに答える者だと耳にしていた人物が近づいて来ていると知った盲目のバルティマイが、抑えることのできないほど力強く叫んだかを想像するのは難しいことではないでしょう。

《イエスが弟子たちや多くの群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで「誰かに向かって叫ぶのです。バルティマイの傍らを大勢の人々が通ったに違いありませんが、あの男、はっきりとした名前のある人のことを聞いた時に叫び始めました」、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んできなさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。》⁴⁸

イエスが歴史に入り込んだその時から、人の人生・いのちの範囲には叫ぶことのできる「存在」がいます。わたしたち一人ひとりの叫びの前に《何をして欲しいのか》と問う「存在」が。わたしたちの叫びを受け止める「人」、もはや誰にも消し去ることのできない「存在」があるのです。なぜなら、歴史に起こった「事実」、そして今も起こり続け、永続する「事実」だからです。その「事実」に出会う可能性はわたしたち一人ひとりに与えられています。わたしたちがどんな状況に置かれていようと、どんなに潤いがなく、疲れていても、物事に興味を感じることができず無に襲われようと、どんな態度を取ろうと、誰にもキリストの《何をして欲しいのか》と言う問いが、自分に個人的に向けられること、再び問われること、響くことを避けることはできないのです。そして、盲目のバルティマイのように《先生、目が見えるようになりたいのです》⁴⁹と答えることを妨げ得るものは何もありません。わたしが《見える》ように、つまり、わたしを無から引きずり出す「あなた」の魅力を経験

⁴⁷ G. Leopardi, *Pensieri*, LXVIII in Id., *Poesie e prose*, vol. 2, Mondadori, Milano 1980, p. 321 逐語訳

⁴⁸ マルコ 10,46-51

⁴⁹ マルコ 10,51

したいという意味です。

キリスト信者の仲間は、バルティマイのように、わたしたちの人間性の叫びを聞き入れ、自分自身に対する究極の矮小化不可能な愛、他には想像もできない優しさを目覚めさせるこの「存在」をキャッチし、受け入れた人々によって成されています。そして、無に滑り落ちないように人間としての歩みを支えるのです。

2章

《どのようにして埋めるのか、 この人生・いのちの大きな隔たりを？》

わたしたちの注意の中心に据えた問い《わたしたちを無から引き離すのは何か》は基本的なものです。生きるという避けることのできないドラマの中で、わたしたちの傷つきやすさと無力さに屈服しないためにはどうすればいいのでしょうか？意味の欠如に対して何が答えとなり得るのでしょうか？わたしたち一人ひとりを揺さぶり、命を脅かした新型コロナウイルスによる攻撃は問いをさらに鋭いものにしました。そして、答えについての試みをより明確に評価する立場に置きました。

1. 不十分な試み

a) もはや誰をも納得させない主張

一部の人々は、押し寄せてくる無の挑発に打ち勝つためには、それについて話すことで十分だと考えています。しかし、わたしたちの経験からわかるように、まったく話しただけでは十分ではないのです。ある考え方、哲学、心理学的あるいは知的な分析、それらは人を再出発させ、望みを活性化し、自己を再び生かすことはできません。図書館にはその類いのもので溢れ、ネットのおかげですべてが手の届く範囲にあります。無は変わりなく蔓延しています。この不十分さは、わたしたちが自分の奥深いところで激しく揺れるものに注意を払えば払うほど意識的になります。《人間においては、曖昧にされ、抑圧され、無視され、歪められている何かがかかっている。このようなよろいを貫くにはどうすればいいのか。そして、そのよろいを貫くことがその人の究極的に求めるものであるかどうかを知るにはどうすればいいのか。人間の行動の研究に専念し、その人間の狼狽をなおざりにしていることが多すぎる。》⁵⁰

わたしたちの耳に入り、そして自分たちが発する多くの言葉の多くも空回りしていません！シェイクスピアは、《奴らのしゃべること道理といやあ、四斗俵の糶殻の中に紛れこんだ、せいぜい小麦二粒ってところだ。まる一日かかってやっと見つけたが、見つてみれや、骨折り損ってやつよ》⁵¹という痛烈な言い方でそれを暴いています。理性は現実的な内容に欠いた議論で空回りすることができます。《知性は[...]常に様々な概念の戯れ

⁵⁰ A.J. Heschel, *Chi è l'uomo?*, SE, Milano 2005, p. 18 逐語訳

⁵¹ W. シェイクスピア、*ヴェニス商人*、第1幕1場、中野好夫訳、集英社、東京1969年、pp.202-203

に逸脱するよう誘惑され、現実に関わりを打ち砕いたことに気づかず、それに魅了されることがある》⁵²のです。

要するに、いくら正しく適正な概念を提案したところで十分ではないのです。だから、その概念が人生・いのちを引きつけ、その特徴である渴きを満たすではありません。

《宗教的な話》でさえ—《ばらばらな考えの寄せ集めに過ぎないスピーチとなり、人に訴えるには足りないものとなるでしょう》⁵³—今日の人々を惹きつけるのではないのです。

ニヒリズムの沼地から脱出するには、宗教的な見方をする、神について話すこと、または超自然や神聖について話すことでは十分ではありません。文化的に信仰の厚い者であっても、キリスト教徒であってさえも、口にする言葉や公言する価値観を度外視して、絶望に至るまでの、人生・いのちの空虚を経験することがあります。抽象的でモラリスト的な説教—それが宗教的であっても、世俗的であっても—がわたしたちを無から引き離すのではないのです。エフドキーモフは《言葉や言説ではもはや十分ではない。歴史の時計は、キリストについて話すという問題だけではなく、むしろキリストになる時を示している。キリストの存在と言葉の場となる時を》⁵⁴と述べています。概念は、それがまったく完璧なものであっても、無に打ち勝つものかけらさえももたらすことができません。どのようなグノーシス主義も、具体的で実在的なニヒリズムと競うことはできないのです。危険を切り抜けようとして、概念を変えたり知的な知識を増やしたりしても十分ではありません。

ドストエフスキーは現実的な経験に欠けている中身の無い話に対する耐え難さを《そんなひとりよがりのおしゃべり、そんな際限もない陳腐なたわごとのくりかえしは、この三年のあいだに、それこそへどが出るくらい、さんざ聞きあきましてね […]他人が話すのを聞いているだけでも、こっちの顔が赤くなるほどですよ！》⁵⁵と表現しています。今の時代に、より浸透しやすくなり、わたしたち自身が経験するこの耐え難さの理由は、フォン・バルタザールが《美を主張する力がないとする世の中では、真実のための主張はその論理的結論を出す力が尽きてしまった。つまり、推論は事前に決められたリズム、回転式機械か分単位で決まったデータを出さなければいけない電子計算機のように周るが、結論[その論理、推論の]に導く過程は、もはや誰をも釘付けにすることができないメカニズム(しくみ)である。さらに、その結論はもはや結論になっていないのである》⁵⁶と示しています。真実であることを言うにしても、惹きつける美—*pulchritudo est splendor veritatis*⁵⁷—聖トマスは美を真実の輝きだと断定する—として、それが目の前で起こらない

⁵² F. Varillon, *L'umiltà di Dio*, Qiqajon - Comunità di Bose, Magnano (Bi) 1999, p. 30 逐語訳

⁵³ フランシスコ、使徒的勧告 福音の喜び 147

⁵⁴ P.N. Evdokimov, *L'amore folle di Dio*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2015, p. 63 逐語訳

⁵⁵ E. ドストエフスキー、罪と罰、江川卓訳、世界文学全集 27、集英社 東京 1968年 pp.127-128

⁵⁶ H.V. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, vol. I, Jaca Book, Milano 2005, p. 11 逐語訳

⁵⁷ «*Pulchritudo consistit in duobus, scilicet in splendore, et in partium proportione. Veritas autem habet splendoris rationem et aequalitas tenet locum proportionis*» (San Tommaso, *Commentum in Primum Librum Sententiarum*, distinctio III, quaestio II,

なら、わたしたち自身も他の人も誰をも釘付けにすることができないのです。フォン・バルタザールは、さらに《もし、聖トマスが美の証拠だとする、*真実 verum*に輝き *splendor*が欠けるなら、真実の認識は慣例的および形式的なものになる》⁵⁸と言います。

b) ルールの増加

ある人々は、実存的ニヒリズムに対する対抗策はある *行動基準*だと考えます。こうして義務、《やるべきこと》への訴えを増し、外見上、自分自身が生きのびることや様々な利益のために従順、敬意を奪起させるのです。けれども、それらは少しも自己の不快さ、意味を求める切実さに答えないのです。《意味が欠けていると義務だけで、役に立たない“なければならぬ”が残り、それはわたしをさらにどん底に引き寄せます。》⁵⁹と前に引用した若い友人の手紙にありました。このような感覚はトルストイによって《こうした目ざめの後は彼（ネフリュードフ）はきまって自分の生活条件を作成し、終生それを遵守するつもりになるのだった。日記をつけ、新生活をはじめて、もう絶対に裏切るまいと心がけた。——彼が自分に言い聞かせた表現をかりると、*turning a new leaf* [新しいページをめくる]のだった。ところがそのたびに [...]また足を踏みはずす、しかもまえよりもさらに低いところへ転落してしまうことがしばしばだった》⁶⁰と、うまく表現されています。行動基準は共有できるものであっても十分ではないのです。フォン・バルタザールはその深い理由を《もし *bonum* (善) に、アウグスティヌスにとってその善の美しさのしるしである *voluptas* (喜び) [わたしたちの人格を惹きつけ、満足、喜びの経験を可能にする魅力]が欠けるなら、善との関わりは功利主義および快樂主義に留まる》⁶¹と再び明らかにしてくれま

す。わたしたちは皆、道徳的な努力、自分の尺度に従った取り組みに、完遂、満たされることへの渇きに対する答えを求めようとする試みのもろさを知っています。しかしながら、大人は人生の計画、プランの無力さと、心の奥底の要求を満たすための《やるべきこと》と共生することに慣れてしまうことがあっても、若者にとって、空虚の感覚と意味への渴望は知らぬふりをしている時にも身を焦がすもので、矛盾しているかもしれませんが、どうにかしてその要求を満たす道か、あるいは逃げ道を探します。数ヶ月前にコッリエーレ・デッラ・セーラ紙に載った《弱さと孤独、こうしてわたしたちの若者は倒れる》と題する記事に、スザンナ・タマーロは《ディスコで熱狂的な一夜を過ごした友人同士のグループが、衝突事故で命を落としたとの悲しいニュースを見ない週末はない。このような悲

expositio primae partis. 逐語訳

⁵⁸ H.V. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., p. 138. 逐語訳

⁵⁹ 本書, p. 7

⁶⁰ L. トルストイ、復活 工藤精一郎訳、集英社、東京 1968年 p.102

⁶¹ H.U. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., p. 138. 逐語訳

劇を食い止めようとして、新たな対策が講じられる。それは、厳しい監視、ディスコの出口でのアルコール度検査、若者を無事に家に送り届ける交通手段。当然必要な対策で、ある意味救済をもたらすものだが、有刺鉄線で深い溝を囲もうとするのとあまり変わらない。誰かは救われるかも知れないが、深い溝は目の前から消えない。[……]わたしを驚かせるのは、繰り返されるこれらの出来事を見て「一体何が起きているのだ？」と立ち止まって言う人がいないことだ》⁶²と書いています。

生活上の具体的な深い溝を目の当たりにして、その解決法が《有刺鉄線》であると考えすることはできません。空虚から人生・いのち・生活を守るためにはルールや杭、制限では十分ではないのです。これがわたしたちの存在の神秘に対する答えではあり得ないということ、経験は常に裏付けています。わたしたちを衝動、渴望やあまりにも大きい望みから守る限度という行動基準、ギリシア人が《適切な尺度》と呼んでいた行動基準に、より洗練された名前をつけても物事は変わらないのです。ガリンベルティは《望みに限度がないわたしたちの文化に、この限度の文化が取り入れられたらいいと思う》⁶³と言います。

それでは望みは修正されなければならない欠陥なのでしょう。ギリシア時代から今日に至って、計り知れず、過度で、途絶えることのない望みを前に、唯一の対策は縮小することのようです。容認できる範囲に縮小しようとする執拗な戦いは、多かれ少なかれ、その構造的な計り知れなさ、不安にさせるほど過度であることをより明らかに裏づけます。ルールを課し、範囲を決めて望みを制御するといういかなる試みの失敗は、それが矮小化できないことを示し、わたしたちの存在の奥底にアウグスティヌスの *cor inquietum* (安らぎのない心) が永続することをあらわにします。

c) 望みのバー (棒) を下げる

望みを矮小化し修正する試みは後を絶たず、至るところにあることを、ルイーザ・ムラーホは《錯覚と異議は、わずかなことで満足するという自己節制によってもたらされる。錯覚はわたしたちが自分たちの要求の膨大さを過小評価し、当然限界のあるわたしたちの力に比例させなければいけないと考えることから始まる》と注意します。結果として《本当に興味のあることをするのも、もはや真に関心があることをするのもなく、自分たちにとっての本物の利便性を求めるのもなく、 コマーシャルにあるような限られたものに望みを》順応させます。《実際にわたしたちはわずかなものを得るために多く労苦することになる》⁶⁴のです。心をごまかそうとして、わたしたちの望みのバーを下げるのです。ある若者が《ぼくは自分の望みの背丈で生きることに苦しい思いをするので、よく望みを下げて、より少ないもので満足します》と書いてきました。モンターレは《無意味な

⁶² S. Tamaro, «Fragili e soli, così cadono i nostri ragazzi», *Corriere della Sera*, 18 ottobre 2019 逐語訳

⁶³ U. Galimberti, «Il greco senso della misura», *D la Repubblica*, 16 novembre 2019, p. 182 逐語訳

⁶⁴ L. Muraro, *Il Dio delle donne*, Mondadori, Milano 2003, pp. 31-32 逐語訳

もので空虚を埋める》⁶⁵《時間を紛らすことは、あの空虚を埋める仕事で埋め尽くさない限りできない。その空虚を瞬きせずに注視できる人々は少ないため、社会的に何かをする必要が生じる。たとえその何かが、あの空虚が自分の中に再び現れるという漠然とした不安を麻痺させるためだけであったとしても》⁶⁶と書いていました。

今日、わたしたちの望みを本質的に織り成すものを見出すことほど決定的なことがあるのでしょうか。ドウ・リュバックは《本当に明確にすべき大切なことは、人間の弱さのために多かれ少なかれ負うものではなく、その望みの本質と重要性である》⁶⁷と指摘しています。今の時代のもっとも油断にならない威嚇は、まさに人間の望みの本物の背丈を軽んじていることです。望みを軽んじることは、色々な行程をたどり、人々の人生・いのちを支配しようとする者によって異なった方法で助成されるのです。

ルイスはその俊敏さでこの概念を悪魔に言わせる《どんな人間の場合でも、そのもっとも深層に位する好みとか衝動こそ、「敵」が人間に与えている素材、いうならば人間にとっての出発点なのだ。だから、そうしたものから人間を遠ざけることができれば、われわれは点をかせいだことになるし、どうしてもいいような事柄においてさえ、人間本来の好悪の情をしりぞけて、現世的な基準とか、習慣とか、流行を重んじさせることは常に願わしいのだ。》⁶⁸これが悪魔的な策略です。わたしたちの気を紛らせることによって、もっとも奥深い推進力、わたしたちを成している望みから引き離すことです。しかし、わたしたち自身から引き離そうとあらゆる権力が利用する気晴らしも、新型コロナウイルスのこの時世で見えてきたように、現実がわたしたちを再び揺り動かすと、いつものごまかしの気泡がつぶれ、底が割れていることが明らかになります。気晴らしに対して、墓碑銘のように思えるラッパーのマツラカシュの言葉を借りるなら《空虚ではなく、時間を埋める》⁶⁹のです。

2. わたしたちの人間性

現実全体に対する興味を再び目覚めさせ、わたしたちの全身全霊を惹きつけるほどの何かが起こらないなら、すべては馴染みのないものになるのです。ジョゼフ・ロートが《彼ら一人ひとりの周りに馴染みのなさが増し、それぞれはガラスの球の中に閉じこもっているかのように座っていた。互いを見ていたが届かなかった》⁷⁰と書いているように。単に話が世俗的であろうと宗教的であろうと、義務や《やるべきこと》への呼びかけが宗教の名のもとであっても、望みを衰弱から、そして前に触れた興味の麻痺状態から徹底的に救

⁶⁵ E. Montale, *Nel nostro tempo*, Rizzoli, Milano 1972, p. 18 逐語訳

⁶⁶ E. Montale, «Ammazzare il tempo», in Id., *Auto da fê*, Il Saggiatore, Milano 1966, p. 207 逐語訳

⁶⁷ H. de Lubac, «Ecclesia Mater», in Id., *Meditazione sulla Chiesa*, vol. 8 – *Opera omnia*, Jaca Book, Milano 1979, p. 188

⁶⁸ C.S.ルイス、*悪魔の手紙*、C.S.ルイス著作集1、中村妙子訳、すぐ書房、東京 1996年、p.369

⁶⁹ «TUTTO QUESTO NIENTE – Gli occhi», di Marracash, 2019, © Universal Music 逐語訳

⁷⁰ J. Roth, *Lo specchio cieco*, in Id., *Il mercante di coralli*, Adelphi, Milano 1981, p. 63 逐語訳

うことはできません。

若い友人からもらった手紙がそれを裏付けています。《“わたしたちを無から引き離すのは何か”という問いへの答えを、すでに知っていると思うことが自分のもっとも大きな誘惑だということに気づきました。けれども実際には、わたしは常に無に^{ひん}瀕しています。すべてのこと、彼女や勉強、卒業することさえ退屈になり得るのです。すべてが同じで遠くに感じます[望みを満たすには不十分]。この無関心については後にしか気づかず[愛情でさえ免れない]、見つめれば見つめるほど自分がすでに知っていると思うことも矛盾するようです。大学の同級生と話すだけでも無に囲まれていることに気づきます。わたしたちの会話は、少し前に話していたことを思い出すことなく次から次へと話題を移すという無の象徴です。このような時に気づくことがあります。それは、自分は無のためには造られていないと言うことです。中身の無いことを話したくないし、自分をとらえ、無から引き離す何かが必要なのです。だけど、気づくだけではそれをキャッチするには不十分のように思えます。》

逆に自分は無のためには造られていないということに気づくことは、何が自分を無から引き離すかを見出すための道のりにとって決定的で不可欠な要因なのです。つまり、人間としての、自分自身の人間性の要求の発見です。

ごまかされることを許さず、からかうことはできない、自分の意志で選んだ答えでは満足しないこのわたしたちの人間性とは、一体何でしょうか。ごまかしや気晴らしは不快さを覆うことはできるけれども、無から引き離すことはできません。傷つき、みすぼらしく、混乱していても、わたしたちの人間性はまごつかされることなく、道行く人にかかわれることはないのです。それは、思うほど混乱してはいないというしるしです。時々ではあっても、誠実さか、注意か、究極的モラルかに欠けるため、本物ではないものに依じて魅了されることがありますが、早かれ遅かれまさにわたしたちに内在する人間性が、大きな思い違いに従ったことに気づかせてくれるのです。幻想の過去という共産主義の錯覚についてのフランソワ・フェレの著書のタイトルにあるように。

わたしたちの人間性は、最終的には避けられない重要な堤防です。経験においてそれを見て驚くのです。ルイスは《経験についてわたしが好ましく思うのは、それが真っ正直だということだ。人は何度となく間違った曲がり角を曲がるかもしれない。しかし目をしっかり見開いていればあまり遠くまで迷い出ないうちに警告の信号が現れるだろう。人がいかに自己欺瞞におちいろうとも、経験が人をだまそうと試みることはない。人が公正な態度でテストにかける時、宇宙という鐘はどこをついても真実の響きをとどろかせるのである》⁷¹と書いています。しかし、ここが重要なポイントですが、経験は、判断、評価を伴います。したがって、一つの基準に基づいて判断が下されるのです。その基準とはどんな

⁷¹ C.S.ルイス、不意なる飲び、C.S.ルイス著作集1、中村妙子訳、すぐ書房、東京 1996年、p.234

ものでしょう？それは、わたしたちの人間性です。これは単にわたしたちを苦しめるもの、意に反して負わなければならない重荷、わたしたちの現実との関わりを阻む埋めることのできない溝ではないのです。そうではなく、それはまさにわたしたちの判断の基準なのです。

わたしは、すべての物事との関わりにおいて経験をすることを可能にする判断能力を自覚した驚きの瞬間に、飛び上がって喜んだことを今も覚えています。事実、経験は、わたしたちの人間性という基準によって判断された体験です。その人間性とは、根源的な要求と明らかな事実の総体で構造的にわたしたちに備わっていて、わたしたちに向かってくるもの（物事）と照らし合わせることによって始動します。わたしは、自分自身の内にある要求と明らかな事実の総体が起こることを判断する究極の基準であることを見出したのです。

わたしたちの人間性の認知範囲の認識が、ジュッサーニに《愛情と情熱がこもった自分自身についての鋭い意識によってのみ、キリストに対して心を開くこと、彼を認めること》⁷²、生き甲斐となるものをキャッチすることができると言わせたのです。この同じ情熱、注意、優しさが自分自身に対するまなざしの特徴であるか問うべきです。時折、それはわたしたちが住んでいるこの地球とは異なる銀河のことであるかのように思えることがあるからです。ジュッサーニの《人間はまったく人間なのだ！人間は何と人間的なのだ！》⁷³という言葉は何と感動的でしょう。わたしの人間性は何と人間的なのでしょう！わたしたちは、多くの場合、自分の人間性に対して情熱ではなく恐れを感じます。そのため混乱し、真実をとらえることができず、最終的にはすべてが抽象的なものに消え失せるのです。ドストエフスキーが《深いもの思いに、というより、一種の放心状態におちたらしく、もうなににも目をやるでもなく、いや、どだいそんな気もないふうに歩き出した》⁷⁴と言っているように。

わたしたちが自分の人間性を二の次にしてしまえばしまうほど、起こる事柄の価値を認めることに躊躇し、進むべき方向に確信が持てないのです。それは、スペイン人の詩人ヘズス・モンティエルが、新型コロナウイルスのため外出自粛していた時に自分の子供たちを見ていて感動したということの逆です。《子供たちはずっとわたしを驚かす。わたしたち大人と違って、外出自粛の間、一度も不平不満を言わなかった。子供にとって真の正常さは家族だから状況を受け入れた。子供は、愛情のこもった環境—完璧である必要はない—で育つとより多くのことを要求しないことに気づいた。[...]あなたたちがいたら十分、と彼らは言う。[...]子供たちは、わたしたちが何か計画のためではなく、愛し愛されて生きるためにつくられている証拠だと思う。その場合のみ偶発的な状態は意味を持ち、現在

⁷² L. ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、ドン・ボスコ社、東京 2015、p.9.

⁷³ L. Giussani, *Affezione e dimora*, Bur, Milano 2001, p. 42. 逐語訳

⁷⁴ F. ドストエフスキー、罪と罰、前出 p.8

は揺るがない》⁷⁵のです。

子供たちは生きるために必要なもの、つまり、両親の存在を容易にとらえるのです。反対に、わたしたち大人は難渋し、しばしば不平不満に陥ります。もちろん、子供たちの素朴な人間性を保ち深める大人もいます。エッティ・ヒッレスムはその明らかな例です。著書の日記に《わたしの神よ、わたしをこのようにつくられたことを感謝します。時々、豊かさに満たされることがあるからあなたに感謝します。この豊かさはあなたに満たされるわたしの存在以外の何ものでもありません》⁷⁶と記しています。

3. 《人を丸ごと“感じる”技》

わたしたちのうちの誰が日常的に一瞬でも自分自身、自分の人間性に対して本物の優しいまなざしを向けるでしょう？何度となく、偽りにそそのかされない自分の人間性に対して怒りを浴びせ、自分自身をいじめます。つまり、わたしたちは（自分の人間性から）逃げたいと思う一方、それを消し去ることができません。悦ばしき知識でニーチェが旅人に言わせる一節《真実、現実、表面的ではないもの、確実なものへのこの燃えつくような望み！どんなに憎いか！》⁷⁷は、これをとても良く表現しています。

ですから、ヨハネ・パウロ二世の《人を丸ごと“感じる”技》⁷⁸にずっと心を打たれています。人を丸ごと《感じる》ことは生きるために必須で感情的傾向の反対です。けれども、ジュッサーニは《自分自身に対する優しさに溢れる人に出会うことはとても稀である》⁷⁹と言います。そうした人を何人知っているかを数えると、片手でも指が余るでしょう。今日では、現実に対してそうであるように、自分自身や他の人々に対して、怒りや暴力の方がより勝っています。

にもかかわらず、人が経験したいと望むことは、まさに自分自身の人間性に対するこの優しさです。カミュがその著書カリギュラで《なにもかも複雑に見える。だが、なにもかも単純だ。もしおれが月を手にいれていたなら、もし、愛（ドリュジュラ）だけで充分だったら、すべては変わっているだろう。この渴きをどこで癒せばいい？どんな心、どんな神が、湖の深さをたたえているのか？[...]この世にもあの世にも、おれに見合うものはなにもない。それでもおれは知っている、おまえもだ[...]不可能がありさえすればそれで充分だ。不可能！おれはそれを世界の涯^はてまで探しに行った、おれ自身[わたしたち皆が探すもの]の果てまで。[...]おれは両手を差し出す、するとおまえに出会う、いつもおまえだ、お

⁷⁵ J. Montiel, *The Objective*, 2 de abril 2020.

⁷⁶ E. Hillesum, *Diario. Edizione integrale*, Adelphi, Milano 2012, p. 271.

⁷⁷ 《Dieser Hang und Drang zum Wahren, Wirklichen, Un - Scheinbaren, Gewissen! Wie bin ich ihm böse!》
(Cfr. F. Nietzsche, *La gaia scienza*, Adelphi, Milano 1995, p. 223. 逐語訳)

⁷⁸ K. Wojtyła, *Amore e responsabilità*, Marietti, Torino 1980, p. 150. 逐語訳

⁷⁹ L. Giussani, *Un avvenimento di vita, cioè una storia*, Edit-Il Sabato, Roma-Milano 1993, p. 457. 逐語訳

れの前にいる。そしておれはおまえにたいして憎しみでいっぱいになる。（おまえは爪ではぎ取りたい傷のようだ）[…]おれたちは永遠に罪人だ。夜は人間の苦悩のように重い》⁸⁰と書いているように。

わたしたちの渇き、わたしたちの人間性に対するこの優しさを感じさせる“何か”を見いださないなら、愛情とはまったく反対に、これを自分からはぎ取りたい傷のように見ることになってしまうのです。しかし、なぜこれを自分からはぎ取りたいと思うのでしょうか？その悲劇を感じないため、その悲劇をできるだけ和らげるため、期待をかけるすべてのことの不十分さを認めないため、望むものと手に入れられるものとの不均衡の損得勘定をしないで済むためなのです。カミュの言うように《おれに見合うものはなにもない》、または恋愛関係について歌うグッチーニ《愛しい人よ、説明するのは難しい/これまでに分かっていないなら理解するのは難しい…//君は（僕にとって）いっぱいだ、十分ではないけれど/[…]君はすべてだ、けれどもそのすべてはまだ足りない》⁸¹と言うように。

こうして、優しさ(《人を丸ごと“感じる”技》)あるいは自身の人間性に対する憎しみ(《自分からはぎ取りたい傷》)という二者択一が姿を現わします。わたしたち自身の人間性を監視することも、押し殺すこともできないために、何度苦しみ悩むことでしょうか。つまり、全力を尽くしてその人間性を鎮めようとするにもかかわらず、まったく思いがけない時に現れるのです。

ミロスのミゲル・マニャーラは、そのような経験を模範的な方法で語っています。マニャーラは墮落した生活に身を任せますが、それは自分の人間性の深淵、望みを満たすことはできなかったのです。《わたしは「愛」を快樂、墮落、死に引きずりました[…] 退屈という岩の苦い草を食べています。わたしは怒り、それから邪心と嫌悪とでビーナスに仕えました。[…] もちろん、若い頃には、あなたたちと同じように、哀れな喜びを、自分のいのちを与えても名前を覚えてくれない落ち着いた異国の女を求めました。しかし、わたしの中にはすぐに、あなた方が決して知ることのないものを追求したいという望みが生じました。つまり、計り知れず、神秘的で甘美な愛を。[…] ああ！どうすれば満たされるのでしょうか、この人生・いのちの深淵は？どうすればいいのでしょうか。なぜなら、望みはより強く、いつになく熱狂的に常にそこにあるからです。すべてを包括する暗い無のもっとも深いところに炎を投げつける海上での火災のようなものです!》⁸² どんなことにもかかわらず、望みは前にもまして強く存続するのです。これが驚きだと言っているのです。消えることはありません。人が生きれば生きるほど、望みを満たそうとしたり、あるいは考えないようにしたりしますが、それは大きくなるのです。

⁸⁰ A. カミュ, カリギュラ, 岩切正一郎訳、ハヤカワ演劇文庫 18、早川書房、東京 2008 年, pp. 148-149.

⁸¹ «Vedi cara», parole e musica di F. Guccini, 1970, ©EMI.

⁸² O.V. Milosz, *Miguel Mañara. Mefiboseth. Saulo di Tarso*, Jaca Book, Milano 2010, pp. 27-28 逐語訳

アウグスティヌスにとって、わたしたち一人ひとりのうちに振動する人の心の深みに比べられるものはないのです。《深淵が深みであるなら、人の心は深淵ではないだろうか。実際にこの深淵より深いものは何であろうか。人々は話したり、手足を動かすのを見られたり、話している時に耳を傾けられたりすることはできる。しかし、誰がその考えに入り込み、心を細かく調べることができるだろうか。人が自身のうちで何をするか、何ができるか、何を熟考するか、何を進んで与えるか、何を望むか望まないか、誰に理解し得るだろうか。従って、人は深みによって理解されることが理性的だと思う。別の言い方で“人はその深い心で近づき、そして神はほめたたえられる”とあるように。》⁸³

ではもう一度繰り返しますが、わたしたちを無から引き離すのは何でしょう？何が、この人生の深淵を満たすことができ、《宇宙よりも広大な》⁸⁴わたしたちの中にある人間の^{しるし}徴、わたしたちの試みの不完全さ、不十分さを暴く、やっかいであり崇高なこの矮小化できない望みを満たすことができるのでしょうか？

⁸³ Cfr. sant'Agostino, *Esposizione sui Salmi*, 41,13 逐語訳

⁸⁴ G. Leopardi, «Pensieri», LXVIII, in Id., *Poesie e prose*, op. cit., p. 321.

3章

《CARO CARDO SALUTIS》

《CARO CARDO SALUTIS》《肉体は救いの要である》⁸⁵「教会」の教父の一人テルトゥリアヌスの言葉です。謎めいた感じがするかもしれませんが、わたしたちの経験に目を向けるとすぐさまその意味は明らかになります。つまり、わたしたちを無から引き離した何か—それが起こったなら、それが起こった時に一とは何でしょうか。

1. 肉体的な存在

ここでテーマとなっている内容⁸⁶について、若い女性が、簡潔で明確な方法で問題に焦点を当てるといふ特徴を持つ手紙を送ってきました。他の人々も状況の個人差はあるにしても、この女性が書いている内容に簡単に共通点を見いだせるのではないかと思うので、もう一度取り上げるのは価値があると思います。

《わたしを無から引き離すのは何かと自問する時、今日までの自分の歴史を考えないではいられません。この無について考える時、頭に浮かぶのは頭に焼き付いている二つの瞬間です。一つは幼い時の思い出で、星を見上げる時に感じていた不均衡です。広大な宇宙に対して自分は何でもない者であるという思いにショックを受けました。この理由で眠れない夜もありました。なぜなら、自分の人生・いのちは、過ぎ行く時間の中で無意味な瞬間に感じられたからです。ある日、母と買い物（死ぬほど好きないつものこと）のために店を転々とした後、帰る時に限りない悲しさ（いつも身近に感じていた悲しさ）を感じながら車に乗りました。母に“特別な何かがあったわけではないけれども、突然なぜだか分からない大きな悲しさを感じることもあるの”と言いました。ラジオの音を BGM にして、何も話さず家まで帰りました。「無」に行き着く限りない悲しさ。わたしが CL を知ったのは、運動の家族が集まって創立した新しい学校（そこでキリスト教も知りました）へ転校した時です。父の病気と死の数年後、17歳の時でしたが、初聖体を受けることと運動に参加することを決めました。大学1年の時にある神父に出会いました。彼はわたしの痛ましい状態を見て、性的虐待（わたしが立ち向かっていた状況とは何の関係もないこと）についてあなたが書いた手紙“傷を負って、キリストに立ち返る”（ラ・レブブツリカ紙2010年4月4日）を渡しました。その手紙であなたは正義への渇きについて書いていましたが、いつものわたしの渇きについて言えることでした。この渇きは“限りのないもの”、“底のないもの”、“無限である

⁸⁵ Tertulliano, *De carnis resurrectione*, 8,3: PL 2,806. 逐語訳

⁸⁶ 本書 p.4、導入を参照

ため満たされることは不可能だ”と。さらに“これが実際の状態であるなら、もっとも悲惨—誰にも逃れることはできない—な問題は避けられないほど単純だ。つまり‘*Quid animo satis?*’‘魂を満たし得るものは何か?’”とあなたは言っていました。あなたはなぜこのような問いをすることができるのでしょうか？この問いを満たす、叶える何かがあると推測できるから？わたしは一人で自分の応接間に座って何回も読み返し、“この痛み、この永遠を求める望み、この傷が満たされることは本当に可能なのだろうか。この世にこれらを満たすものがあるのだろうか。”と考えて、涙があふれました。人生ではじめて自分の渴きに応える何か肉体的で、具体的な実際のものがあるかもしれないと考えました。突然すべての要素が一つにまとまったような気がしました。だから、あの学校で知り合った人々、他の人とは異なる先生たちのまなざし、胸が高鳴り、心が広がっていった夏のキャンプでは、まさに自分が人生でずっと待っていたような言葉を聞くことができたと自分の中で考えました。これらすべては、わたしの傷、永遠を求める望みに応えることのできる具体的な「あなた」だったのです。“今ここであの世を具現化する人。つまり、肉となった「神秘」、キリスト”だったということです。この数年間は、この具体的な「あなた」、この具体的な肉に対する愛情の歴史です。外出自粛のこの数週間で気づいたのは、キリストが、わたしの悲しみは無へと強いるものではないことを見せ、経験させてわたしを惹きつけたということです”というものでした。

けれども、無から引き離すこの存在に出会った後も勝負は終わらないのです。人生の様々な変遷のため、時にはわたしたちの思い上がりや弱さによって、わたしたちを当惑させる困難のため道に迷って出会った存在から離れたたり、見捨てたりすることがあります。その場合にも、わたしたちを再びとらえることができるのは、常にそして唯一肉（人）でしょう。数か月前にある女子大学生が《一年前、当時抱えていた問題の重さのため、自分の人生において大切だと認めていた仲間から逃げていました。もはや自分自身が分からなかったのです。わたしの目は空虚で生気がなく、消えてしまいたいと望むほど心は疲れ果てていました。自分にはもう打つ手がなく、希望がないと信じていました。もう立ち上がることはできないと信じていたのです。けれども、わたしを一時も一人にはさせず、わたしとわたしの心を気遣ってくれた幾人かの友人のお陰でもう一度やり直し始めました。自分自身に対して感じることのできなかつた愛と優しさでわたしを見つめる、まさにあの人たちの顔によって再び出発できました》と書いてきています。

わたしたちのうちに備わっている探知機は何とよく機能するのでしょうか！人が自己のすべてを抱きしめる優しさで見つめられると、すぐに気づくのです！

手紙は《自分は自分自身を愛することができないのに、どうやって他の人にそれができるだろう？この人たちはどんな心を持っているのだろうか？何を見たのだろうか？わたしのよう人間をこんなに大切にするためにはどんなものに出会ったのだろうか？と何度も自問したことがあります。わたしは知りたかったのです。ですから、探し始めました。強烈ではちきれそうなハードな一年でしたが、素晴らしいものでした。人生・いのちが満たされた驚愕の

一年だったと言えます。それは、わたしが頑張ったからでも、心の中にあった痛みや恐れが消えたからでもなく、あの特定の顔を通して“意外で想像もできなかつた、感じたことのない心との一致を経験したからです”⁸⁷。わたしが経験したような出会いと友情の美しさをすべての人に経験して欲しいと望みます。自分の心にとって偉大な同伴者を見つけたという確信を持って生きることは素晴らしいものです。しっかり握りしめていきたいです。自分の考えに従わないために二度と失うことはできません。なぜなら、この場でのみ、わたしの弱さ、恐れ、痛みや必要、すべてが受け入れられ、愛されるのだと認めるからです。ここだけが、何も置き去りにすることなく、何も当たり前と考えず、自分自身を真剣に見つめて受け止めることができる場所なのです。この仲間うちのみ、わたしの心を大切にしてくれる友人を見つけたことを認めます。こんなに自信を持っていることに驚きます。普通はそうではないので》と続きます。

わたしたちに対して本物の優しさに満ちたまなざしに巡り合う時、自分自身に対する憎しみと怒りには別の見方があることに気づくのです。

《つまり、何がわたしを無から引き離すのでしょうか？何がわたしをあの日々の無から引き離したのでしょうか？この仲間です》と手紙はさらに続きます。言い換えると、実在の、肉体的な、歴史的な仲間です。これがいのちを救う肉体です。《CARO CARDO SALUTIS》わたしたちの考えでも、わたしたちのイメージでも、わたしたちの想像でもなく、肉体、つまり、《今ここに現存する「他者」、生きた「あなた」へとわたしを呼び戻し、わたしにいのちを返し与えてくれた愛と優しさのまなざしを見出す特定の顔》だと大学生は手紙を締めくくっています。

《肉体は救いの要である》と作家のダニエレ・メンカレッリがまなざしの家という感動的な自伝の箇所《ガラスの「自由」と書いてある辺りに二人の若者が車を止めた。母親が男の子を腕に抱き、父親は彼をあやしていた。中庭の噴水を見せながら、しかめ面をしたり舌を見せたりして子どもを笑わせていた。わたしが彼らから一メートル以内のところに来た時、両親が振り向いたので子どももこちらを向いた。歩調は止まり、息苦しくなった。幼児は3歳くらいだろうか。目を除いて顔はなく、鼻や口のところは赤い肉の穴だった。歩道の大理石に目を落とし、彼らを見ないでさっさとすれ違った。[...]あの二人の若者とその外観を損なった息子が立ち去るのを待った。子どもの笑い声が一番に耳に届いた。まだそこにいたのだ。ただ今は彼らだけではなかった。彼らの前にいた年配のシスターが前かがみで、男の子のすさまじい頬に自分の頬を軽く触れた。“あなたはママとパパのかわいい子よね？”片手を取ってキスするとくすぐったかったのか笑い出す。シスターは80歳を超えているようで、ぼつちやりしたミルクのような白い顔だった。“まあ、あなたはかわいいだけではなく、愛嬌もいいのね。こうされるのが好きなの？”子どもを喜ばせるためにその小さな手を自分の口と顎にもう一度触れさせる。すると、シスターは背筋を伸ばして父親と母親の方を向く。

⁸⁷ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, p. 22. 逐語訳

“彼の笑い声が聞こえない？彼の中には銀ではなく金があるわ。生きた金よ”。顔のことも何もかも気にせずキスする。わたしは仰天した。理解できない、意味がわからない。とても遠く離れた地の儀式のような、何か人間的であると同時になじめないものを見たのだ。自分の言語で言い表す手段を自分の中に見つけることができなかった[...]可能なアプローチを色々試みた。グレーの服を着た老婆の錯乱だと、見たことをなかつたものとしようとした。それから、あのような醜悪さを前にしても、自分の神の君臨を何としてでも証したい痛みに対して鈍いシスターの盲目的信仰として、さらに、もしかすると、優秀な女優による芝居で、誰にも見られないトイレであの形のない頬にキスをした口を洗ったかもしれない。けれども、どんな解釈もわたしが見たものと自分の論理の溝を埋めることはできない》⁸⁸と語っているように、肉体はその異例さのために見分けることができるのです。

作家は自分が見たもの、目に飛び込んできた（《何か人間的であると同時になじめないものを見た》）もの、惹きつけ、ある意味で釘付けにした異例さを周知のこととして片付けようと、想定内で理解可能な説明で済ませようとしたのです。わたしたちは何度、しかも執拗に、目の当たりにする普通とは異なるものを自分の尺度に矮小化しようとしたことでしょうか！《人間というものは、もともとシステムとか抽象的結論にはたいへん弱いもので、自分の論理を正当化するためなら、故意に真実をゆがめて、見ざる、聞かざるをきめこむことも辞さないのだ》⁸⁹

メンカレッリを虜にしたのは何でしょうか。上記の手紙を書いた女子大学生を虜にしたのと同じもの、つまり、普通とは異なる人間性です。シスターは男児の完全に外観を損なった顔を前に態度を変えることなく、逆に彼に対して、優しさを、具体的で深く目まぐるしい好意を、深い意味の好意を、激しい愛情を示したのです。その愛情は底知れなく人間的だったので、人間のもの《以上》に見え、《別世界のもの》一神聖一だったのです。

肉体のみ、肉体的な存在のみがわたしたちを無から引き離し得るのです。わたしたちを虜にするほどとらえ、心の奥底まで惹きつけ、すべての望みを目覚めさせると同時に想像を絶する一致を経験させ、どんな解釈も取り消し得ない存在のみがわたしたちを無から引き離し得るのです。わたしたちのうちの誰があの子学生に注がれたまなざし、あるいはシスターが男児に注いだ優しいまなざしで見られたいと思わないでしょうか。

誰かに宿ったそのようなまなざしに巡り合うことによってのみ、ミロスの言う《人生・いのちの深淵》を埋めることができるのです。肉体のみが無に打ち勝つことができます。それはどんな肉体でもいいのではなく、どんな肉体的な存在でもいいのではなく、わたしたちの期待すべてに一致する何かを有する存在です。そのため、わたしたちを虜にし得るのです。実際、人生に新しさをもたらしたジロラマに出会う前のミゲル・マニャーラに起こっていたように、孤独に包まれた退屈な人生に終わるような苦々しい思いをさせる肉体もあります。デ・リュバックは《人間が作り出すどんなものも、あるいは人間的な次元に置かれているど

⁸⁸ D. Mencarelli, *La casa degli sguardi*, Mondadori, Milano 2020, pp. 183-185. 逐語訳

⁸⁹ F. ドストエフスキー, *地下室の手記*、前出 p. 36

んなものも、人を孤独から引き離すことはできない。逆に、孤独は人が自分自身を知るほど徐々に深まる。なぜなら、孤独は、人が召されている交わりの反対にほかならないからである》⁹⁰と書いています。

2. ユダヤ人ナザレのイエス

何がわたしたちのうちのニヒリズムに打ち勝つことができるのでしょうか？自分自身のうちに、わたしたちのすべての期待、すべての望み、意味と愛情、満足と尊重のすべての要求に一致する何かを身につけているある存在、ある肉体の虜になることによってできるのです。わたしたちを無から引き離すことができるのは、再びミロスの表現を用いるなら、わたしたちのうちにある《人生・いのちの深淵》を、《熱狂的な望み》を満たすことができる“あの”肉体のみなのです。

この経験をしなければ、文化的に宗教的な話や言説に成熟し、あらゆる面で一生懸命であってもわたしたちはニヒリズムから脱出できません。なぜなら、バルタザールの言っていた《真実を引き立てる主張》や《やるべきこと》はわたしたちを“とらえる”こともわたしたちの自己すべてを惹きつけることもできないからです。そして、早かれ遅かれ一ふつうは早いうちに一わたしたちを退屈させるのです。

ところが、わたしたちの人間性に対する優しさに満ちたまなざしは、ある「男」、ユダヤ人ナザレのイエスの肉体を通して二千年前にこの世に入り込みました。《受肉において永遠の「み言葉」は、イエスに「ご自分」自身を結び付けました[...] だから「み言葉」は人イエスとの繋がりからもはや切り離して考えることはできないのです。[...] 「み言葉」に出会う人は、誰もがナザレのイエスに触れるのです。[...] 歴史的な人物であるイエスにおいて、彼は「み言葉」そのものなのです。確かに神は秘跡以外の方法でも人に触れられます。しかし、「彼」(み言葉)は常に歴史における「ご自分」自身の仲介者であり、永遠におけるわたしたちの仲介者である人イエスを通して触れるのです》⁹¹とラツィンガーは言っています。

この出来事—受肉—は人間の歴史の分岐点であり、誰にも取り除くことはできません。ですから、ジュッサーニは《ある肉体において肉となった「み言葉」を認めることができるのである。「み言葉」が肉となったなら、同じようにある肉体においてわたしたちは出会うのである》⁹²と主張します。そのことをキャッチする人は、自分の人生においてもっとも決定的な出来事を前にしていることに気づくのです。起こる時にはその出来事を明らかに見ることが出来ます。この観点においてより意味深い福音書の箇所を思い出しましょう。自分自

⁹⁰ H. de Lubac, «Ecclesia Mater» in Id., *Meditazione sulla Chiesa*, op. cit., pp. 161-162. 逐語訳

⁹¹ J. Ratzinger, «Cristo, la fede e la sfida delle culture», *Asia News*, n. 141/1994. 逐語訳

⁹² L. Giussani, *L'attrattiva Gesù*, Bur, Milano 1999, p. 123. Cfr. Costituzione dogmatica sulla Divina Rivelazione *Dei Verbum*, 4. 逐語訳

身と自分の必要に対して悲痛な意識を持ち、自分のすべての悪に対する苦々しい思いを抱え、平安を見出だせない無能さと、自分自身に対する優しさの欠乏によって、おそらく、自分が抱えている自身の人間性と、ぶざまに満たそうとした自分の望みをはぎ取る衝動に駆られてイエスの前に行く女に自分を重ねてみましょう。けれども、まさにあの人間性、あの愛される必要、真に見つめられる必要が予想外のもの、つまりイエスの存在に驚くことを可能にしたのです。

《さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」》⁹³と福音書は述べています。

ここでは、《前代未聞のしかたで実現した》ことを目の当たりにしています。ベネディクト十六世は《真の意味での新約聖書の新しさは、新しい思想ではなく、キリストの姿そのものの内にあります。キリストは、旧約聖書で述べられた考えを、自らの血肉としました》⁹⁴と言われます。わたしたちも皆、過去にどんなことをしたとしても、どのような人生を送ってきたとしても、あのようなまなざしで見られたいと思うに違いありません。

あの女がキリストのまなざしに“とらえられる”ためには何が必要だったのでしょうか？どんなに傷ついて哀れであっても、結局は皆そうであるように、唯一必要なのは自身の人間性です。あの「男」に出会った時、彼女の人間性は過去に犯したすべての過ちにかかわらず、止めるすべがないほど完全に虜にされたのです。周囲の批判や非難を超えて、自分の涙で宴

⁹³ ルカ 7, 36-47

⁹⁴ ベネディクト 16 世, 回勅 神は愛, 12.

の席にいたイエスの足を洗いました。福音書に自分を重ねるのは、ジュッサーニが伝えてくれたもっとも美しいことの一つです。実に、わたしたちはよくこのような箇所を当然のように読んでしまい、その話の実際の、歴史的で根本的な深さをくみ取らないのです。逆に、何度も何度も福音書のエピソードを読み返し、そこで描かれている出来事に自分を重ねてみることによって、ジュッサーニは—そこで—イエスがどのように出会う人々の傷ついて弱さだらけの人間性に対して接していたかを「見せて」くれました。「彼」を阻止するものは何もなかったのです。そして、今も「彼」を阻止するものは何もないのです。キリストが奥底までとらえるのは、まさにわたしたちのこの人間性—自分に見出す数多くの限界のため嫌だと思い、得にはならないから煩わしいと感じる—です。「彼」が目を向けるのはこの人間性です。この人間性がなければ、あなたやわたしの人生・いのちに入る方法がなく、接点を見つけることができないのです。《自身の生き方や罪にかかわらず、神のみが、真に人間たる人間の意識の奥底をとらえ、人間たらしめるのである。結局、あがないは、その罪よりも価値が高く、人間のうちにあるもっとも深いものを汲み上げるキリストである》⁹⁵とフランソワ・バリヨンが書いています。

キリストのまなざしは、わたしたちの内を、満たされたいという心の深い望みを読み取るものです。教皇フランシスコは《わたしたちは気がかりの種を持って生まれました。神はそれを良しとされたのです。満足を見つける気がかり、神を見つける気がかり。多くの場合は自分にこうした気がかりがあることに気づかないままいるのです。わたしたちの心は落ち着かないのです。わたしたちの心は渴いています。神に出会うことに渴いているのです。何度も誤った道で探し、迷い、後戻りしてまた探すのです…他方で神は、わたしたちに出会うために、この気がかりに応えるためにイエスを送られたほど、出会いに渴いています》⁹⁶と言われます。

この男、ナザレのイエスが歴史にもたらしたまなざしによって根本的に肯定されたと感じた人間はかつていなかったでしょう。どんな成功や失敗も超えて、自分の息子について、誰かが同じ根源の優しさを持って、その運命をまったく肯定的に主張するのを耳にした女性もかつていなかったでしょう。足を涙で洗った女にイエスは目まいがするほどの肯定的なまなざしを持って《「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」[驚いて言っているのではなく拒否しているのです。冒涇者だと言わんばかりに]と考え始めた。[それは問題となる新しさに対する反抗です]イエスは女に[誰も彼女に対する態度を思いとどまらせることはできません]、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた》⁹⁷のです。このまなざしはもはや地上から根絶することはできません。ですから、わたしたちが自分自身について言うこと、あなたが自分自身について言うことは、最終決定ではないのです。

⁹⁵ F. Varillon, *Traversate di un credente*, Jaca Book, Milano 2008, p. 98. 逐語訳

⁹⁶ Francesco, *Omelia a Santa Marta*, 26 aprile 2020. 逐語訳

⁹⁷ ルカ 7, 48-50.

福音書の罪人の女性を無から引き離したのは、彼女の考えや決意、努力ではなく、彼女に対する強い情熱、彼女の人格を、彼女の自己を“何よりも愛していた”ある「存在」です。彼女はその「存在」に心を奪われました。彼女の人生はあの出会いによって覆され、変えられたのです。だから、イエスによって、そのまなざしによって、骨肉を持った生身の存在によってすべてにかたがついたので、自分に向けられる他の人々のまなざしはどうでもよかったのです。彼女は、人生の中で、あの男のようなまなざしに向けられたことはありませんでした。さもないと、あの家に入らなかったでしょうし、涙で足を洗い、その髪の毛で拭いはしなかったでしょう。あの女性は、なんとという経験をしたのでしょうか！町中と食卓についていたファリサイ派の人々をあのよう挑発するために、なんとという確信を持ったのでしょうか！そのような確信がなければ自分自身や他の人々の見解に左右されてしまいます。ところが、この世のどんな権力にも取り消すことができないあのまなざしは、わたしたちや他の人々の考えを超えるのです。つまり、この世の権力を取り消すことはありませんが、(あのまなざしは) わたしたちがそれらの力によって麻痺させられるのを妨げることができるのです。

フォン・バルタザールを用いて、その確信は《人間の知性による明白さに基礎を置かない確信であり、神の真理によって表された明白さによる確信である。だから、自分で捕えたというのではなく、捕えられたというものである》と言えます。バーゼルの神学者は《それは、現代のキリスト教にとって重要な問題である》と強調します。なぜなら、信仰がわたしたちを取り巻く世界に信頼され得るのは、唯一《信仰がそれ自身を信頼できるものであると自覚する時だけである。つまり […]、始終、人間の能力では理解できず、権威への従順によってのみ“教義を真実だと見なす”時に受け入れられるのであれば、信仰とは言えない。信仰は、実際に、神聖な真理の超越であるにもかかわらず、いやまさに超越であるがゆえに、神が真に何であるかの理解に人を導き、その理解〔そのそばに〕と共に自分自身の理解へと導く》⁹⁸からなのです。

あの女性の確信と信仰は、完全に肯定され虜にされたと感じた他とは比べ物にならないイエスのまなざしを通して《神の真理に表された明白さによる》ものと、以前は経験したことがなかった自身を成している要求への一致に支えられていました。真理の明白さは非常に強力に、《栄光の啓示は》非常に輝かしいため《これ以外に他の正当性を必要としない》⁹⁹とバルタザールは重ねて言います。今日、信仰が信頼され得るためにこの明白さがいかに決定的であるかというこの同じ意識は、《わたしは、現在の経験において見出され、裏付けられ、そしてこれによって確認され、必要に答えるために役立つ信仰でなければ、すべて、すべてが反対を主張する世の中では持ちこたえられないと確信していた》¹⁰⁰と、最初からジュッサーニの教育的熱意を特徴づけていました。

⁹⁸ H.U. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., pp. 120, 125. 逐語訳

⁹⁹ 同書, p. 126. Cfr. DS 3008. 逐語訳

¹⁰⁰ L. Giussani, *Il rischio educativo*, Rizzoli, Milano 2014, p. 20. 逐語訳

3. ある出来事

神は、ナザレのイエスにおいてわたしたちのうちの一人になりました。《言葉は肉となって、わたしたちの内に宿られた》¹⁰¹のです。しかし、何について話しているかを理解するためには、最初に戻って起こったことを注意深く見る必要があります。わたしたちの“もう分かっている”というのは、事実、たびたび理解を歪めます。《あの時代に生きていとうしよう。イエス・キリストは人々の間で知られてはいなく、その名前も聞きなれたものではなかった。人々が見ていたのは一人の男》で、通りを行き来し、出会うこと、話しかけることができる人でした。イエスはペトロ、ザアカイ、マグダラのマリアと同時代の存在でした。《あの男の話を聞いていると、何かいのちに新しさを予感した。誰も口に出すわけではなかったが感じるのだった》それで《ある夜、ペトロ、ザアカイそしてマグダラのマリアにとって、彼らの人生・いのちのすべて、彼らの人生・いのちすべてとなった何かが起こったのである。》つまり、あの男に遭遇し、彼に“とらえられ”、虜になったのです。あれは彼らにとって決定的な出来事でした。事実、あの男において《永遠、確実性、存在、意味、生き甲斐があらわになり、理性がつくられた目的、意識がつくられた目的、自己がつくられた目的があらわになったのである。確実なもの、存続するもの、完全なものは一人の男なのである！》¹⁰²とジュッサーニは言っています。

二千年後に生まれたわたしたちにとってはどうでしょう？わたしたちにとっても同じです。まったく同様に。ジュッサーニは、大学生たちに向かって《わたしたちをここに導いたものは、とても短く弱々しい瞬間で、明らかな意識も、明らかな判断もない人生に対する約束の予感だったかもしれない。しかし、君たちの人生の中で、すべての意味、すべての価値、すべての望ましいもの、すべての正義に叶ったもの、すべての美しさとすべての愛し得るものを含む出会いが起こった日がある。なぜなら、神が人となられたというのはそういうことだからである。そして、人となった神は、ある人間の手、目、口という物理的現実を持って、あなたに触れるのである》¹⁰³と断言します。どんな現実でしょう？「彼」を信じる人々の仲間、「彼」の神秘的な体です。《わたしは道であり、真理であり、命である》¹⁰⁴と言った男は復活した、つまり、歴史と同時に歩んでいる存在です。《わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる》¹⁰⁵のです。どこで「彼」に出会えるのでしょうか？どこで「彼」を聞くことができるのでしょうか？今ここにいる「彼」の存在は、「彼」のイニシアチブによって集められ、「彼」を認めた人々によってつくられた目に見え、触れることができる具体的な現象と一致しています。それは「教会」という現実です。《あらゆる時代の人々とキリスト

¹⁰¹ ヨハネ 1,14.

¹⁰² L. Giussani, *Qui e ora* (1984-1985), Bur, Milano 2009, pp. 425-427. 逐語訳

¹⁰³ 同書, p. 426. 逐語訳

¹⁰⁴ ヨハネ 14,6

¹⁰⁵ マタイ 28,20

との関係は、教会である自らの体のうちに見えてきます》¹⁰⁶とされているように。

《公生活の時でさえ、イエスの出来事は、イエス自身の容貌のみならず、「彼」を信じる人々の容貌をも呈していた。彼らは「彼」の言葉、メッセージを告げ、驚異的なその業を繰り返すために、つまり救いである「イエス自身」をもたらすために「彼」によって派遣されていたのである》¹⁰⁷とジュッサーニは言っています。

キリストは今起こっている存在です。引用された二通の手紙とメンカレッリの箇所裏付けられているように、その存在に気付くことは、二千年前とまったく同じ経験をすることを意味します。すなわち、他とは異なる人間性を持つ存在と巡り合うことです。その存在は、人生・いのちに対して新しさを予感させ、わたしたちのうちにある構造的な意味と満足への渇きに他のどんなものよりも一致するために心を打ちます。先程触れたように、今日においても《すべての意味、すべての価値、すべての望ましいもの、すべての正義に叶ったもの、すべての美しさとすべての愛し得るものを含む》出会いの経験を指すのです。これが今「彼」の存在によって与えられた方法です。《心に一致することによって惹きつける他とは異なる存在に巡り合う、つまり、理性の判断と照合を通して、その存在に対する愛情から自由が目覚めるのである》¹⁰⁸と、ジュッサーニは言っています。

ジュッサーニは、この他とは異なる人間性の存在の特徴として《並外れた》という言葉を使っています。その意味は、個人的なパフォーマンスで勝っていることや、奇妙さや突飛さと言うのではなく、まさに前に触れた一致を指すものです。何か並外れていると言えるのは、たとえその明らかな意識がないにしても、心の根源的な期待にふさわしく一致する時です。しかし、なぜ《一致するもの》を《並外れている》と言わなければならないのでしょうか？それは、わたしたちの根源的な要求との一致は、ふつうのことであるはずなのに、通常起こらないからです。今日ではこれまで以上によく理解できます。わたしたちはすべてを所有し、すべての意味で、以前とは比べ物にならないほど多く、人間関係や物事との関係、体験にしても、すべてにアクセスできます。しかし、これらすべてのうちのどんなものも、わたしたちを心の奥底までとらえ、心が渴望する一致の経験をさせてくれ得るものはありません。よって、ある出会いでこの一致が起こると、何か並外れたものを感じられるのです。まさにこのため、この一致の体験をさせる存在、顔は、他の人々と異なるのです。それでわたしたちは《素晴らしい（並外れている）！》と言うのです。

ですから、キリストの同時性のみがわたしたちを無から引き離すことができるのです。今ここにいる「彼」の存在が唯一ニヒリズムに対する、意味の空虚に対するふさわしい答えになり得るのです。つまり、霊的でも、抽象的に“理想的な”存在でもなく、肉体的で歴史的な存在です。キリストはアイデアや考えではなく、わたしの人生・いのちに入り込む現実的な

¹⁰⁶ ヨハネ・パウロ二世、回勅 *真理の輝き*、25

¹⁰⁷ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, Rizzoli, Milano 2014, p. 26 (なぜ教会なのか1部2章3節)

¹⁰⁸ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 37-38. 逐語訳

出来事なのです。《何かがある何か》¹⁰⁹に出会い、わたしの存在すべてを虜にするのです。《二千年前のあの男は、他とは異なる人間の姿に身を隠して居合わせるのである》¹¹⁰と、ジュッサーニが言っているように。

もう一通の手紙《50代の入り口で再び生まれることができるとは思いませんでした。わたしは47年間、イエス・キリストは必要な“もの”ではないと確信を持って生きてきました。何年も、時間の攻撃に耐えられない、大学や仕事や家庭という目標をずっと追いかけてきました。自分で前もって決めた目標に達しても満足できなかったのも、常に新しい目標を探し求めました。わたしの人生はすばらしいもののように見えていたにもかかわらず、自分は何か満たさないものを糧にしていたような気がしていました。その結果、わたしは大きな危機に陥りました。自分は役立たずのように見え、友人、同僚そして大切な人たちとの関係も難しくなってきました。一人でいたいと思いました。ある日、子どもたちの学校関係の場でまなざしが輝いている人と知り合いになりました。彼も仕事の問題で苦労していましたが、穏やかで自信があり、一言で言うと喜んで見えていました。彼がCL運動のメンバーであることを知らなかったように、何が彼をそのようにさせるのかも分かりませんでした。彼との間に深い友情が芽生え、共に時間を過ごしたいと思うようになりました。それぞれの家族と共にバカンスにも一緒に行き、彼に対する興味は深まるばかりでした。後に、わたしの友人にもなった彼の友人との交流も始めました。運動が勧める活動に参加し始めました。そして、再び祈ったり、ミサに与ったり、告解したりするようになりました。時々“なぜそうするのか？”と自問し、“その方がより快調だから”と答えました。イエス・キリストに対する愛情が根源であるこの友情に今でもまだ驚きます。以前は、仕事や同じスポーツに対する情熱を持った友人、あるいは利便性による友人しかいませんでした。この3年間はわたしを変え、高めました。昔からわたしを知っている人々、古い友人、家族、同僚は何か変わったことに気づいたようです。もしかしたら、わたしのあの友人のまなざしの輝きと同じものではないかもしれませんが、わたしのまなざしにも時折輝くものがあるのだと思います。ドン・ジュッサーニが言っていたように、“キリストがすべてだということを互いに思い出させる”ために、“わたしたちの間にいる「人」”を認めるために、“この意識を持って生きることがふだんのことになるまで互いに思い出すのを助け合う”¹¹¹のためにこの友人たちとより関わりを持ちたいと思います》が生き生きとした証をしてくれます。

これが信仰を伝えてきた、そして、これからも伝える方法、つまり、望みを喚起し、キリストの共同体に参加することによって、出会いそのものがもたらす約束を確認するよう人を動かす予想もしなかった出会いという方法です。《使徒の時代が終わった後の古代「教会」

¹⁰⁹ L. Giussani, *Il cammino al vero è un'esperienza*, Rizzoli, Milano 2006, p. 142. 逐語訳

¹¹⁰ L. Giussani, «Qualcosa che viene prima», in *Dalla fede il metodo*, Cooperativa Editoriale Nuovo Mondo, Milano 1994, p. 39. 逐語訳

¹¹¹ L. Giussani, *L'opera del movimento. La Fraternità di Comunione e Liberazione*, San Paolo, Cinisello Balsamo (MI) 2011, p. 216. 逐語訳

は、「教会」として比較的ひどい状態の宣教活動を行い、異教徒へ信仰を告知させるための独自の戦略を持っていなかった[……]それにもかかわらず、その時代は宣教において成功した時代である。古代世界のキリスト教への改宗は、計画された行動の結果ではなく、キリスト教徒の生活や生き様と「教会」共同体に見られた信仰の証の結果であった。経験から経験への実際の招きは、人間的に言えば、古代「教会」の宣教の力以外の何ものでもなかった。

「教会」の生活共同体は、この生活の源である真理が明らかにされる生活に参加するよう人々を招いていたのである。[……] 首尾一貫した真理と、生活の中で保証されるその真理との絡み合いのみが、人間の心が期待する信仰の明白さを輝かせることができる。この扉を通ってのみ、聖霊はこの世に入るのである》¹¹²と、ラツィンガーは言っています。

ニヒリズム/肉体的であること。これらは今日のわたしたちの状態を特徴づける用語であり、今日にとどまらず常の状態を指します。なぜなら、わたしたちが言っているニヒリズムは、他の時代で異なる言葉で示されていたとしても、偶発的な現象ではなく、人間の魂にとって永久的に可能性として存在するものなのです。ニヒリズムに対しては、つまり、わたしたちに浸透し、常に屈するよう誘惑する「無」に対しては、単なる話、ルール、気晴らしでは答えることはできません。なぜなら、これらはわたしたちの人間性を虜にし、魅了することができないからです。これは、キリスト教をグノーシス主義やペラギウス主義に矮小化する危険に対する教皇フランシスコの強い主張を説明しています。¹¹³ニヒリズム、意味の空虚に対しては、昨日も今日も、80歳のシスターや友人に受肉したまなざし、ある肉体でしか答えることはできません。《キリストだけがわたしの人間性のすべてを心に留められる》¹¹⁴のです。今日、わたしの人間性のすべてを心に留められる存在の経験をするか、結局のところ救いはないかなのです。なぜなら、話や言説も、行動基準も、手元にある気晴らしも、わたしの存在のもっとも深いところで期待している満足を生み出すことはできないからです。

自己が“とらえられる”経験なしではキリスト教はあり得ません。キリスト教の本来の性質通りの出来事としてのキリスト教があり得ないのです。そうなると、人や物に対する考え方、扱い方の変化が期待できなくなり、メタノイア(回心)も本物の愛情もあり得なくなります。《神は人間に知られるために、人として、人の姿をして人間の人生に入り込んだ。よって、

¹¹² J. Ratzinger, *Guardare Cristo*, Jaca Book, Milano 1989, p. 31. 逐語訳

¹¹³ 参照 教皇フランシスコ、使徒的勸告 *福音の喜び*, 94. (この霊的な世俗性は、とりわけ、深く関連し合う二つの源泉から湧き出てきます。その一つは、主観主義にとらわれた信仰であるグノーシス主義の魅惑です。これは、特定の経験、一連の論証、知解のみに関心を持っています。それは、慰めと光を与えると考えられるものですが、主体は自らの理性と感情の内在に閉ざされたままなのです。他の一つは、自己完結的でプロメテウスの真ペラギウス主義です。この人々は、自分の力だけに信を置き、定められた法規を遵守していること、またカトリックの過去に特有の様式にかたくなに忠実であることで、他者よりも自己の力と感情のみ信を置いているのです。教義と規範の仮定的確信が自己陶酔的で権威的なエリート主義を生じさせます。それによって、福音をのべ伝える代わりに他者を分析し格づけし、恵みへと導くことにはなく、人を管理することに力を費やします。どちらの場合もイエス・キリストに対しても他者に対しても、真の関心を払ってはいません。人間中心的な内在論の表出なのです。このようなキリスト教のゆがめられた形態が、福音の真の活力を生み出すとは想像もできません。訳者挿入)

¹¹⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 8. 逐語訳

人間の考え方、想像力と愛情は「彼」に「釘づけにされ」、虜にされたのである。キリスト教の出来事は“出会い”のかたちをしている。日常の平凡な現実の中の人間の出会い》¹¹⁵なのです。人間にとって出会いのかたちをした出来事ほど理解しやすく、分かりやすいものはありません。今なら、教皇フランシスコが《福音の神髄にわたしたちを導くベネディクト一六世の言葉を何度でも繰り返しましょう。「人をキリスト信者とするのは、倫理的な選択や高邁な思想ではなく、ある出来事との出会い、ある人格との出会いです。この出会いが、人生に新しい展望と決定的な方向づけを与えるからです。》¹¹⁶と、*回勅 神は愛の箇所*を何度でも繰り返される理由がわかるでしょう。これが神の方法、人—わたし、あなた、わたしたち一人ひとり—を無から、自身の完遂が不可能な状態から、すべてが空虚に終わるのではないかという疑いから、自分自身に対する重苦しい失望、諦めや絶望から引き離すために神が選ばれた方法です。《イエスの時代のように今も、わたしたちの人生・いのちにおいてすべては出会いから始まる》¹¹⁷のです。

神は人となられ、わたしたちのうちに住まわれています。これがキリスト教です。まず教義や道徳というのではなく、今ここに現存する「人」です。それ以外—教義や道徳—は後から来ます。《すべてをつくったもの[つまり神、いのちの源、運命、意味]は、ある心もとない肉体と同一になり、[再度]心もとない肉体と同一なのである。その心もとない肉体において聞くことができ、触れることができる》¹¹⁸のです。あなたやわたしのような、弱い、限界だらけの肉体ですが、とらえられ変えられた肉体です。もしキリスト教がわたしたちを魅了したなら、わたしたちがある現実に関わられたなら、それは普通の事柄に対して異なる方法で関わる人、苦痛や苦労の中でも自分のために望んでいる喜びと平安を持っている人、より困難で相容れない状況を前にしても無償で肯定的なまなざしを持っている人を見て、“羨ましく”思ったからです。キリスト教の出来事に“とらえられ”、変えられた人々—彼らにも出会い—というかたちで起こった—、自分たちの周囲の雰囲気や人間的な意味をかき乱す人生・いのちの新しさの証人を見たからです。この混乱の根源は、《彼らの心の喜びの中でわたしの存在をあらわにする》¹¹⁹と、アンブロジーノ典礼にとてもうまく描写されています。

ジュッサーニは、イエスにおいて神が肉となったなら、《イエスを理解するためには、肉においてでなければならない。経験がイエスを理解させるのである。神が、「神秘」が一人の女性の胎内から生まれ、肉となったなら、肉体的な経験から出発しないことにはこの「神秘」について何も理解できないのである。理解されるために肉体的なものとなったなら、肉体的なものから出発する必要がある》と述べ、さらに、《肉体を捨て、矛盾をはらんだ事態

¹¹⁵ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 36 逐語訳

¹¹⁶ 教皇フランシスコ, 使徒的勸告 *福音の喜び*, 7

¹¹⁷ 教皇フランシスコ, *CL 運動のための話*, サン・ピエトロ広場, 2015年3月7日

¹¹⁸ L. Giussani, *La verità nasce dalla carne*, Bur, Milano 2019, p. 115. 逐語訳

¹¹⁹ «*Populus Sion, ecce Dominus veniet ad salvandas gentes: et auditam faciet Dominus gloriam laudis suae in laetitia cordis vestri*» (Confrattorio della IV Domenica d'Avvento ambrosiano, in *Messale ambrosiano. Dall'Avvento al Sabato Santo*, Milano 1942, p. 78. 逐語訳

を消滅させるなら、この信仰はもはや誰にも関心を持たれない》¹²⁰と指摘します。ただの話や言説、抽象的なもの、倫理的なもの、マニュアルとなり、もはやわたしたちを虜にしないのです。人間による経験のみがキリストの存在を見出すことを可能にし、「彼」とあなたとの関係が何であるかを理解させるのです。

4. 真実をキャッチするために必要なのは誠実な注意のみ

キリストの存在の同時性をキャッチするのは簡単です。わたしたちを虜にし、前に述べた一致を経験させてくれる存在は稀なのです。ですから、キャッチするのは簡単なのです。つまり、ペトロやザアカイ、サマリアの女、マグダラのマリアにとっては簡単だったのです。簡単ではあっても、当然のことではないのです。それはイエスに対しても起こっていたことです。「彼」がザアカイの家に行くのを見ていた人々のスキャンダルとその結果としての反感を思い出してみましょう。

イエスの新鮮さ、他の人々との相違、唯一性をキャッチするために、ペトロやザアカイ、サマリアの女、マグダラのマリアや「彼」に出会った人々に何が必要だったのでしょうか。誠実な注意と開かれたまなざしです。実際、《真実は、わたしたちが日常の生活の中で出会う美しいものと同じように、注意していなければ見逃してしまうのである。つまり、問題は注意なのである》¹²¹とジュッサーニは言っています。注意は誰にもできることで、注意することは自由をもたらします。なぜなら、人生・日常の現実に対する無関心を隠す《わたしには能力がないし、頭もよくないし、理解するための手段が欠けている》と繰り返される口実を一掃するからです。真実をキャッチするためには注意のみが必要なのです。

確かにシモーヌ・ヴェイユが《わたしたちの魂には、肉体が疲労を嫌悪するよりもはるかに激しく真の注意を忌み嫌うものがある。[...]注意は、自身の思考を中断し、対象に対して思考を開き、空にして対象を浸透しやすくすることである》¹²²と書いているように、注意するというのは常に簡単なことではありません。けれども、対象を自分自身の思考に浸透しやすくするために、自身の尺度に閉じこもっていないために、《かかわるすべての要因に対して開かれている》¹²³ためには、自分自身に対するかすかな愛情、自身の存在の運命に対するかすかな関心が必要です。このかすかさは、たとえ心の底にうずもれていても、愛されることを受け入れさせ、わたしたちの存在を肯定する存在に“反応”させ、注意するよう促され

¹²⁰ L. Giussani, *Si può (veramente?) vivere così?*, Bur, Milano 2011, pp. 481, 207 逐語訳

¹²¹ L. ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.65

¹²² S. Weil, *Attesa di Dio*, Rusconi, Milano 1972, pp. 75-76. 逐語訳

¹²³ L. ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.213 著者は《注意に向けて自由を教育することはそこにかかわるすべての要因に対して開かれていることであり、そして受け入れることへの教育とは、わたしたちが出会うものを意識的に両手を広げて抱きしめることを学ぶことである。これらが人間的な歩みの基本的な問題である。》と指摘する。こうして彼は注意のためには自由を教育することが重要な問題であることを提起している。

ることを可能にします。

ペトロやザアカイ、サマリアの女、マグダラの MARIA は自分たちの人間性に弱音器を付けていなかったのです。彼らのまなざしには、渇き、苦しみさえ見える安らぎのない期待がありました。あの「人」の存在がその渇きと期待を呼び覚まし、抱きしめながら一致し、共鳴したのです。

確かに、あの見開いたまなざしは、イエスの並外れた存在によって促され、引き起こされたのですが、彼らはその扇動、催促に従わなければなりません。彼らの中で魔法のように、または機械的に起こったことは何一つありません(そのように起こるものは、人間的ではないのです)。

いのちの新鮮さを有している存在に気づくためには、これをキャッチするためには、注意が、愛情を持って取り組む理性が、生き生きとした人間性が必要です。注意も、開かれた理性も、愛情の振動がなければ、興味がなければあり得ないのです。注意深いまなざしは、常に興味のあるまなざしです。《要するに、人はあるものに対して興味・関心をもたなければ、それに目を向けることはない。目を向けないのなら、当然それを知ることはできない。知るためには、それに注意を払わなければならないのである。注意(attention)という言葉はラテン語の「…に向かって張り詰めている」という意味からきている。つまり、興味をもち、感銘を受けるなら、それに対して緊張した状態で立ち向かうだろう》¹²⁴とジュッサーニは言っています。

5. 信仰という認識

したがって、この注意は、わたしたちの目の前にあるものの性質を認識し始めることです。実際、異なる人間性をもつ存在をキャッチすると—それが起こった時、起こった場で—、見ているものの性質について問うのは避けがたいことです。イエスの存在を前に、「彼」の言葉を聞き、行うことを見ていた人々には《この人は誰なのだろう?》という問いが生じました。不思議な問いです。それを生じさせたのは「彼」の矮小化できない異例さです。《彼の出身も知っており、母親も親族も、彼についてはすべて知っていた。にもかかわらず、彼の見える力はまったく度を超え、偉大で、その人格も他の者とはまったく異なっていたため、「この人は一体誰なのだろう?」という問いにも異なるニュアンスがあった》¹²⁵のです。

今日でも、《あなたは誰? どうしてそのように振る舞うの?》という同じ問いが、巡り合い、知り合いになって関わりを持ち、友人となった人々を前に、わたしたちのうちに生じるのです。問いが生じるのはその人たちの存在が並外れていて、わたしたちの経験上その異例さが明らかだからです。このようにしてキリスト教は昔のように今も伝わるのです。先ほど引用した 50 歳の友人の手紙によく表現されていました。問いが生じるというのは、イエス

¹²⁴ L. ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.57

¹²⁵ *Cristo la compagnia di Dio all'uomo* - 1982 年 復活祭のポスターの言葉、コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ

に関わった人々に降りかかった《度を超える問題》と同じ問題を目の当たりにしている兆候にほかならないのです。教皇フランシスコは《証言は称賛を喚起し、称賛はその証人を見る人に問いを喚起します。“この人はなぜこのようなのでしょうか？希望する賜物はどこから与えられ、無償の愛を持って他の人々を処遇する賜物はどこから与えられるのでしょうか？”と人々は問うでしょう》¹²⁶と述べておられます。

皆が同じ優しさであなたを見ますか。皆が同じ無償の愛であなたを見ますか。皆があなたの運命を同じ情熱で見ますか。すべて同じですか。ですから、人が他とは比べ物にならない異例さを目の当たりにすると一シスターを目の当たりにした作家のメンカレッリのように一“この人は一体誰なのだろう？”と問わずにいられないのです。ここから、取り消すことのできない問いを喚起する驚きの反動から、信仰という認知、認識の道のりが始まります。

それがイエスに出会った最初の人々にとってどのように広まったかを見ていきましょう。福音書の話から見えてくる認知的な躍動とわたしたちに起こることを照らし合わせるために、その中の無数のシーンの一つに自分を重ねてみましょう。イエスは弟子たちとフィリポ・カイサリア地方に行きます。道中、ある時点で足を止めて弟子たちに《人々はわたしを何者だと言っているか》と問います。突然だったので、彼らはとりあえず《『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリアだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミアだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます》と答えました。ここで問いかけは、《それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか》と個々に向けられます。最初に衝動的に反応するペトロが《あなたはキリスト、生ける神の子です》¹²⁷と答えました。どうしてあのようなことが言えたのでしょうか？ペトロは自分の理性の力で考え、自分の言葉、自分の能力によって出した結論を言ったのではなく、イエス自身から聞いた言葉を繰り返したのです。どうして繰り返すことができたのでしょうか？その言葉の意味を完全に捉えていないにもかかわらず、何が繰り返すことをまったく理性的なものとならしめるのでしょうか。それは、ペトロがあつた男について至った確信、《この人が信頼できないなら、自分自身も信頼できない！》ことを明らかにした「彼」との関わりの経験です。

6. 自由と信頼

なぜペトロはイエスを信頼できた—信頼すべきだった—のでしょうか（《この人が信頼できないなら、わたしたち自身も信頼できない！》）。第一に強調すべきことは、誰かの生き様に注意を払えば払うほど、その人に対して確信を持てるということです。イエスを信頼すべきだと理解できたのは誰でしょう？癒してもらうために集まりはしても、命をかけてイエスとかかわらない群衆ではなく、「彼」に従って共にいた人々です。共生と分かち合いによってのみ、誰かに対して確信に至るために必要なしるしを蓄えていくことができるのです。

¹²⁶ Francesco, *Senza di Lui non possiamo far nulla*, LEV, Città del Vaticano 2019, p. 37. 逐語訳

¹²⁷ マタイ 16,13-19 参照

そして、まったく理性的に《彼は信頼できる》と言えるのです。

しかし、しるしを読み取り、解釈するためには自由を要します。しるしは、導く対象に対して結論を“義務付け”ません。《自由はしるしという領域で動きを見せる。[...]しるしが解釈すべき出来事であるという点において自由はしるしの躍動にかかわるといえるのである》¹²⁸と、ジュッサーニは言っています。ですから、イエスという同じ人を前にして、人々の間に異なる解釈があったのです。しるしを前にする時、自由があらわになるのです。¹²⁹

多くの人にとって自由の存在は異議を表し、人生・いのちを重苦しいものにする何か、到達しようとしている結論の真実を弱める何かとして感じられます。

ある若い友人に、わたしたちは自由の労力を惜しんではいらないだけでなく、それがわたしたちにとって良いことだと明らかにしようとして、例を示しました。彼に《あなたが彼女と数年間付き合い、互いにとって良いことだというたくさんしるしを見出し、彼女にはっきりと「わたしと結婚しませんか」と尋ねようと決意したと想像してみてください。尋ねる時に不安を感じるとお思いますか》と言いました。すると、彼は《きっと不安だお思います》と答えました。わたしは《えっ、あなたには二人の関係のことはすべて分かっているのに、なぜ?》と言いました。彼は即座に《ノーと言われるかもしれないからです》と言うのです。《要するに、あなたはそれらのすべてのしるしが彼女にとってイエスと言うのに十分かどうか分からないので、不安なのですね。なぜなら、あなたは“彼女”がするしるしの解釈、つまり彼女の自由にさらされているからです。そうですか?》とわたしが聞くと、《はい》と彼は認めました。そこでわたしは《あなたは彼女の自由のリスクにさらされず、不安を感じないためにすべてが機械的で自動であった方がいいですか。それともノーと言われるリスクを負っても、彼女に自由にイエスと言ってもらいたいですか?》と彼に尋ねました。彼は《間違いなく彼女に自由に言って欲しいです》と言いました。さらに、《あなたは神があなたよりも眼識が劣っていると思いませんか?神も、自由に「はい」と言う人を好みます》と付け加えました。教皇フランシスコは最近《イエスはどのように行動しますか?[...]彼は尊重します。わたしたち自身の状態を尊重し、先に進んだりしません。[...]主は歩調を上げず、いつもわたしたちのペースに合わせます。[...]彼はわたしたちが第一歩を踏み出すのを待っています》¹³⁰と言いました。これは「彼」がしるしを、わたしたちに必要なすべてのしるしを与えてくれないという意味ではなく、わたしたちはしるしに対して自由であり続けるという意味です。神はわたしたちを自由に創造され、ある意味でわたしたちの自由が決心することに従うのです。なぜなら、人間の自由な「はい」と、意識的な自由を欠く盲従的な「はい」は比べ物にならないからです。最後に《あなたの「はい」が自由の結果でなければ、あなたのうちに沸き立つ喜びをもたらすことはないからです》と締めくくりました。

わたしたちの自由が厄介なものではなく賜物であることに気づくことがどれほど決定的

¹²⁸ L. ジュッサーニ 宗教心、p.207

¹²⁹ Sulla libertà nell'atto di fede, cfr. DS 3035. 逐語訳

¹³⁰ Francesco, *Omelia in Santa Marta*, 26 aprile 2020. 逐語訳

なことであるかです！

よって、自由はわたしがある人を信頼できるというまったく理性的な確信に至ることを可能にするしるしの解釈に関わるのです。この信頼に基づいて、ペトロはイエスから聞いた言葉を自分のものとして繰り返すことができたのです。信仰は、深淵に飛び込むという理性を欠いてなされる行為ではありません。《信仰は、ある歴史的な「存在」が自分自身について言うことを真理と認めることである。》《ある「人」が自分自身についてあることを告げ、人々はそれを真実として受け入れた。その「事実」が今日並外れた方法によってわたしに届き、わたしも受け入れる。イエスは“わたしは、道、真理、いのち”であると言った人である。[…]あの人が行うこと、話すことに注意を払い、“わたしは「この人」を信じる”と言えるほど、その「存在」の言葉を真実と認め従うこと、これが信仰である。信仰は、“この人は真実を語っている。偽りではない。だから、言っていることを受け入れる。”と人に言わせる、並外れた「存在」によって動かされる理性の行為である》¹³¹とジュッサーニは言っています。カトリック教会のカテキズムでは《“信じる”とは、二つのことにかかわっています。人と真理です。すなわち、真理を証言する人を信頼して、真理を受け入れるのです》¹³²とされています。

信仰は、理性の持つ能力を超える“何か”一人間のうちに神聖の存在一を認めることです。理性だけでは特定できないにもかかわらず、それは完全に理性的な認識であり、目の前にあるもの、自分の経験を説明するものです。バルタザールは《信仰と完遂の経験との間にある親密なつながり》¹³³があると指摘しています。

《認める真摯さを、受け入れる素直さを、そして、そのような存在に寄りすがる愛情を持つこと、これが信仰である。真摯さと素直さは類似する言葉である。“素直”であるというのは、外から無関係な要因を入り込ませることなく、そのものを正面から見つめることを意味する。[…]事実を、出来事を素直に見つめる必要がある。言い換えれば、それを評価するために無関係な要因を入り込ませず、理性に、心に、語り伝えられるままの出来事を見る必要がある》¹³⁴とジュッサーニは言っています。だから、素直さは、経験に無関係なものは何一つ入り込ませずに、理性を経験に従わせることだと言えます。ジュッサーニが1998年にサン・ピエトロ広場で教皇の前で話した言葉《わたしにキリストを並外れたものとして感じさせ、認めさせたのは心の素朴さでした。現実の色々な要因や瞬間の揺るがない確固とした明確な事実がわたしたちの人生・いのちの境界に入り込むと、確実にすぐ、心を打つと同じように、キリストを認めさせたのです》¹³⁵がわたしたちの記憶に刻まれています。

¹³¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 34-35. 逐語訳

¹³² *Catechismo della Chiesa Cattolica*, n. 177. 逐語訳

¹³³ H.U. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., p. 119 逐語訳

¹³⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 41-42 逐語訳

¹³⁵ 同書, p. 8. 序章 1 節 逐語訳

4章

生涯続く道のり

今ここで、それぞれ自分の時間と歴史によってキリストの現存を認めた出会いが起こり、異なる人間性を持つ存在に虜にされ、“取り押さえられた”経験をした後、人生・いのち・日常においてその実りを味わい始めると、ゴールに到達したように思えるので歩みをやめていいと思ってしまうがちです。

わたしたちはそうではないという事実を受け入れなければなりません。一度限りではなく起こり続け、新たにされる出会いは、常に開く道であって、中断してはならない道のりです。《ある意味で侵入してきたこの“事実”は歩みの出発点になる[…]。与えられたものは、探求と、まったく所有しようとしなない作業の出発点となり、むしろ学ぶことをやめない望みの労苦である》¹³⁶とデ・チェルテアウが言っているように。

1. 道の必要性

わたしたちが与えられたものを所有していると思いついで立ち止まると、重苦しさや潤いのなさが日々押し寄せてくるのです。手中には生き生きとした花ではなく、枯れ草しか残りません。わたしたちの時間を織り成すものの中に再び無が侵入してくるのが分かります。わたしたちはそれに驚き、失望してしまうのです。このような潤いのなさはどこから来るのでしょうか。エティ・ヒレスムの言葉がわたしたちの思いを《わたしの心はまた凍ってしまい、溶けようとしなない。すべてのパイプが詰まって、わたしの閉ざされた脳は恐ろしい力で締め付けられていた》¹³⁷とよく表しています。

わたしたちに何が起こるのでしょう？ラツィンガーが聖アウグスティヌスについて《カッシヤコの近くの庭園で回心した時、アウグスティヌスは、まだ尊敬していたプロティノスおよびネオプラトニズム派の哲学者たちの枠組みで回心を理解していました。彼は、罪に覆われた過去の人生は今や決定的に終わり、回心者は、これからはまったく新しく異なる人になり、その道のりは常に神に近づく純粋な高みに向かう上り坂だと思ったようです。ニッサのグレゴリオがデ・ヴィータ・モイシスで“まさに体が下に向かって突き飛ばされると、それ以上の推力がなくても、自ら沈下する…このように、だが反対に、地上の情熱から解放された魂は、素早い動きで常に自分自身を超えて上昇する”と描写しているようなものだ

¹³⁶ M. De Certeau, *Mai senza l'altro*, Qiqajon - Comunità di Bose, Magnano (Bi) 1993, pp. 26-27. 逐語訳

¹³⁷ E. Hillesum, «4 settembre 1941», *Diario. Edizione integrale*, op. cit., p. 153. 逐語訳

考えられます》¹³⁸とっています。

このような言い方はしたことがないにしても、わたしたちも何度となく、もしかすると気づきもせず、自分たちに起こったこと―出会いや《回心》―を、わたしたちとは関係のないどこからか借りてきた枠組みによって考えていることがあります。《しかし、アウグスティヌスの実際の経験は違うものでした。キリスト信者であるには、常に起伏を伴う困難な道のを歩むことを意味するのだと学ばなければならなかったのです。上昇のイメージは、道のりに置き換えられ、その歩みの骨の折れる困難を慰め支えるのは、時おり与えられる光の瞬間です。回心は歩みであり、生涯続く道なのです。そのため、信仰は常に成長であり、まさに“自分自身に対してよりも親密である”「真理」に向かって魂を成熟させること》¹³⁹なのです。

ジョン・ヘンリー・ニューマン没 100 周年に際して、ラツィンガーは、今は聖人に列聖された英国の枢機卿にとって回心のより本物で異なる考え方を強調するために《ニューマンは、成長という考えの中で、終結することがなかった個人的な回心の経験を語っています。こうして彼は、キリスト教の教義の道りだけでなく、キリスト信者の生き方の解釈をもわたしたちに提供しています。「教会」の偉大な博士の特徴は、考えと言説によってだけでなく、彼の生き様によって教えたということにあると思います。だから、彼の中で考えと生き様は浸透し合い、相互の原因となっていたからです。もしこれが真実なら、ニューマンは正真正銘の「教会」の偉大な博士の一人だと言えます。なぜなら、彼はわたしたちの心に触れると同時にわたしたちの考え方を照らすからです》¹⁴⁰と述べています。

ラツィンガーの文章に含まれている貴重な貢献を心に留め実りを生む必要があります。《回心は歩みであり、生涯続く道りである》《信仰は常に成長である》。これらの言葉にペギーは、そのせき立てるような文体で《入手したどんなものも永遠に自分のものであるわけではない。それはまさに人間の状態である。そして、それはキリスト信者のもっとも深い状態である。永遠に、一生変わることなく、誰にも異議を申し立てられることなく何かを入手するという考え方は、キリスト教の思想に反し、誰にも疑問視されることのない永遠で決定的な支配の考え方は、キリスト教の思想において、人間の運命にもっとも反する》¹⁴¹と呼応しています。

それ以前とそれ以後の分岐点となり、矮小化できない決定的な新しさをわたしたちにもたらす洗礼でさえ始まりに過ぎません。つまり、わたしたちの人生・いのちを勝ち取るために、その完遂を目的として、キリストが戦士として“侵入する”戦いの始まりです。《自分

¹³⁸ J. Ratzinger, *Discorso di sua eminenza il card. Joseph Ratzinger in occasione del centenario della morte del card. John Henry Newman*, Roma, 28 aprile 1990. 逐語訳

¹³⁹ 同書 逐語訳

¹⁴⁰ 同書 逐語訳

¹⁴¹ Ch. Péguy, «Nota congiunta su Cartesio e sulla filosofia cartesiana», in Id., *Cartesio e Bergson*, Milella, Lecce 1977, pp. 254-255. 逐語訳

がキリストの出来事の一部であることを理解させ、受け入れるよう人に呼びかける》洗礼によって「教会」における洗礼は《いつも信仰と結びつけられています[...]使徒たちとその協力者たちは、》《イエスを信じる者であればだれにでも》¹⁴²洗礼を授けます—《異なる人、異なる民が生じる》¹⁴³のです。

しかし、多くの人々に起こるように《時間の中で日付のついたその始まりも分厚い土の層に覆われるか、忘却と無知の墓に埋もれることもある》¹⁴⁴のです。《生き生きとしたキリスト信者の仲間》に出会うことによって、わたしたちは洗礼の奥深さを意識するようになり、人生・いのちにおいてその実りに驚くのです。そして、わたしたちのうちに洗礼の恵みが成長するのは、その仲間に関し共に生きることによるのです。

繰り返しますが、歩みに関わるものです。洗礼を通して選ばれ、とらえられた人も実際に《この世のぬかるんだ海原の中に沈むこともある。それは、人の人生・いのちにおいて実際の出来事であるキリストの存在の意識である記念を怠り、忘却に身を任せる時に起こる》¹⁴⁵のです。

従って、歩みは中断してはならないのです。回心が生涯続く道のりであることと、信仰が常に成長するという明白な事実は、ほとんど気づくことなく、方法を変えるという誘惑に屈するように仕向けることができます。つまり一人生・いのちの切実な場面や個人的あるいは社会的な挑発に直面した時—出会いを他のものと置き換えるのです。言い換えれば、誘惑とは出会いを当たり前と思い、信仰を当然と見なし、そして他のものに焦点を当てるのです。すなわち、わたしたちを惹きつけた出来事ではなく、人生・いのちの完遂を他のものに求めるのです。そのためジュッサーニは《“出来事”は[...]現代のメンタリティにおいて、もっとも理解し難く、受け入れにくい言葉である。よって、わたしたち一人ひとりにとってもそうである[...]。もっとも受け入れにくいのは、わたしたちを自分自身に目覚めさせるもの、わたしたちの人生・いのちの真実に、わたしたちの運命に、希望に、モラルに目覚めさせるものが出来事であるということである》¹⁴⁶と書いています。こうして、わたしたちは自分で考え、作り出したものに逃げ場と支えを求めることになるのです。わたしたちの判断—暗黙のうちではあっても—では、それらの方が自分を取り巻き、侵入してくる無を攻撃する力があると思えるのです。

しかし、一度心をとらえられた後に、なぜわたしたちは衰え、わたしたちを消耗させる戦いにさらされることがあるのでしょうか？わたしたちはなぜ方法を変えるのでしょうか？まず注意すべき点があります。出会いの代わりに、自分たちでよりコントロールしやすく、自分たちをより満たすことができると思うものに焦点を当てる選択は、とりわけ明らかではな

¹⁴² カトリック教会のカテキズム、n. 1226.

¹⁴³ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 79. 逐語訳

¹⁴⁴ 同書 p.80 逐語訳

¹⁴⁵ 同書 pp. 83-84 逐語訳

¹⁴⁶ 同書 pp. 30-31 逐語訳

くても、強くわたしたちを取り巻き、浸透しているメンタリティによって助長され、容易にされているということです。《わたしたちは自分に起こったこととは反対の“世俗的な”現実に浸っている。この“世俗的な”現実には、キリストの出来事が必要であり、その出来事を証しし、生きることが必要なのである。しかし、意識と愛情（感情）の面では、キリストから生じる新しい人格、“新しい人”とは根本的に無関係で、反対の立場》¹⁴⁷なのです。キリストの出来事によってもたらされた新しさと、わたしたちが置かれている歴史的状況の矛盾は、キリスト信者、洗礼を受けた者を常に挑発するのです。どうすればその挑発に負けないでいられるでしょうか。それは、生き生きとしたキリスト信者を通して経験できる受肉した「神秘」の具体的で継続的な存在によってのみ可能なのです。

特に愛された人（《ザアカイ、急いで木から下りて来なさい、あなたの家に行く》）を通してわたしたちと関わるキリストの具体的で継続的な存在から離れては、わたしたちは皆、洗礼を受け、ある時点で「教会」という仲間を巡り合っている、自分の欲望の前では、力と権力の甘い言葉に左右されてしまうだけです。周囲から日常的に差し出される完遂のイメージに振り回され、意識的に、または無意識のうちにそれらを自分のものとするのです。

けれども、注意してください。キリストが使われる人々を通して、「彼」との継続的な関わりを保っていなければ、わたしたちを取り巻くメンタリティに屈しないでいることは困難か、ほぼ不可能だというのが事実なら、同じように、生き生きとしたキリスト信者の仲間の中にいることが、出会った出来事を他のものと置き換える、他のものに希望をかける、自分の能力で完遂への道を思い描くなどの誘惑に陥るリスクを自動的に回避する保証にはならないというのも事実です。これは初めにあったように今日にもある誘惑で歴史と共に続くものです。その誘惑に陥ることが本質的には《罪》というものです。マリア・ザンブラーノは起源に目を向け、これを《創世記の聖なる話に従えば、彼[アダム]は、魅力的な将来—“あなた方は神と同じようになる”—に対する誘惑に屈するのである。幸せへの渇きのためではなく、幸せとは反対に、自分だけの創造、自分だけでつくり出すものを求めようとした。自分に与えられているものを凝視することを避け、名前は知っていたが、その秘密は知らない被造物の純粋な存在から逃げるために》¹⁴⁸と独特の方法で述べています。

わたしたちはそれぞれ、個人および共同体の生活において、肉となった「神秘」による新しさを、自分だけの創造、自分だけでつくり出したものと置き換えると何が起こるかを観察するよう呼ばれています。

2. 自己主張（肯定）の誘惑

ドン・ジュッサーニに与えられたカリスマから生じた歴史に目を向けることが、キリスト

¹⁴⁷ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 83. 逐語訳

¹⁴⁸ M. Zambrano, *Chiari del bosco*, Bruno Mondadori, Milano 2004, p. 71. 逐語訳

信者の道のりに関わる要因を理解するために貴重だというのが分かるでしょう。

歴史的重大局面の中、1968年からの数年間に、文化的、社会的、政治的な背景からの絶えない圧力のただ中で、ジュッサーニはわたしたちが話している誘惑—いくつかの局面は、ある意味でわたしたちが今日さらされているものに似ています—を的確に説明しました。1975年のことですが、恒例の「年度始めの日」¹⁴⁹のためにコンセルバトリーオの部屋に集まっていたミラノの成人のグループに向けて話されたことは、そのまま今日のわたしたちに当てはまります。

ジュッサーニはCL運動の現実の中に《欠乏》—無味乾燥とした経験、混乱、不安—が受けられることをはっきりと告げ、それは《方法の欠如、注意の欠如》に原因があると言いました。この方法と注意の欠如はどのように理解すればいいのでしょうか。それは《問題の根底、根本、すべての基となるもの、エネルギーと知性の源が当然のこととして考えられ、もはや養われず、育まれず、わたしたちの注意と意志によって助けられていない。そのため、ゆっくりと姿を消し、抽象的になっていくかのようだ。キリスト信者の人生・いのちにとって、わたしたちの顔、わたしたちの人格、わたしたちの光と力の絶えない源を何らかの形で当たり前のことと考えるとは！》¹⁵⁰と言っています。源、つまり起こった出来事を当たり前だと考えると、これは確かに先験的認識や概念となり引き出しに収められてしまうのです。出来事を前提と見なした後に、自身の計画や解釈をもとに現実に立ち向かおうとするのです。出来事は既知のカテゴリーとして残存し、使用もされますが、認識と行為の根源でなくなっているのです。キリストの出来事は出発点にはならず、そこに満足を期待することもなくなります。つまり、心の根源的な要求に一致するものを、自分自身が成就すること、自分自身のつくり出す能力、自己主張に求めるのです。こうして知らず知らずのうちに、先ほど触れたように方法が変わっていきます。

従ってジュッサーニは方法と注意の欠如は、《個人また集団としての表現、そうした表現の追求の耐えがたい優位》にあり、《本能的な意味での表現だ。わたしたちの個人的な人生・いのちを埋め尽くす本能、要求、必要性が、わたしたちの集団としての人生・いのちにも表れる。これらすべてを満たすことが特に優先されるのは、人間そしてキリスト信者としてのわたしたちの歩みを養う場にとっても、とても危険なことだ》と、それが原因だと指摘しています。要するに、人生・いのちに入り込んだ、人間としての新しさ、また新しい知性と愛情の起源として明らかになった出来事を犠牲にして、自分の表現を求める傾向があるのです。

問題の原因は何でしょう？ジュッサーニは、《教会に行ったり、工場、学校、大学で苦労したりする時、一人でいる時も一緒にいる時も、わたしたちが追求している価値は、自分の興味のあるもの（愛情であったり、文化的な好みと好奇心であったり、自分のある手腕を表現することであったり、社会と政治への情熱であったり）によって自分自身を主張

¹⁴⁹ 夏休み後の社会的な年度の始まりに行われるCL運動支持者の伝統的な集まりを指す

¹⁵⁰ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975

することだ。これが問題の核心だ。わたしたちが個人として、あるいは集団として追求している価値には、自分自身にとって興味深いと感じるものに依拠して、必要性、思い上がり、そして自己主張の焦りが際立っているように思える》¹⁵¹ と、行為の究極的な目的と到達点が自己主張であることだとためらうことなく答えています。注意すべきことは、ジュッサーニが他の道を歩む選択をした人々にではなく、彼自身が引き起こしたキリスト教の経験の様々な分野で献身的に時間とエネルギーを費やし、関わっている人々に向けて話しているということです。このことがまさに彼の指摘に興味深いものにするのです。なぜなら、“他の人々”ではなく、キリスト教の勧めに惹きつけられ、従って生きている“わたしたち”に言われているからです。

ジュッサーニは、出版されたばかりの本の中で、《存在、現実をその完全な真実においてまるごと、総体的な運命において余すところなく肯定するのではなく、わたしたちは自分自身を主張する心配にかられているのである》と、問題の重要点を選択肢という観点から明らかにし、さらに、《わたしたちは、自分たちの計画に希望を置いている。希望を自分たちの計画に置くこと、これが罪なのである》¹⁵²と続けます。これがわたしたちの絶えざる誘惑なのです。深刻で異様な弱さと思い上がりのために人は、つまりわたしたち一人ひとは、自分を生かすものから離れ、それを当たり前—これは否定する一つの方法である—と考え、自分自身を主張するのです。人は、自分自身に焦点を合わせ《特定の限られたものに注意と望みを置く。本来の計画、人が創造されたもともとの計画は、自由の横暴な使用によって変質させられたのである。こうして、人は全体から切り離された特定のものに傾き、それを人生・いのちの目標と見なす。日常的に体験するのは、人々が特定で限られたものと人生・いのちの全体を同一視する傾向があるということだ。わたしたちの力では、こうした部分的な生き方から抜け出すことはできない。誰も一人では現実に対して本物のまなざしを取り戻すことはできない》¹⁵³のです。

自己主張の追求は、期待できそうに思える満足と豊かさには導かず、無から解放しません。すでに見てきたように、わたしたちの話や言説や努力は不十分で不毛な試みなのです。どんなに頑張っても逆に《過度に不満が増すばかり》¹⁵⁴です。罪には贖罪があり、《人は自分が犯した過ちによって罰せられる》ことを意味するダンテの表現では《反座の刑》と言います。

¹⁵¹ FCL, 視聴覚資料、CLの年度始めの日、ミラノ、1975年9月14日。トルストイはこのことについて福音書を巧みに言い換えて《神の王国とその真実をさがし求めよ、その他のものはそれに付随して手にはいるのだ、と言われているのに、われわれは付録の方ばかりさがし求めているんだ。これじゃ、見つからないに決まっている。》(L. トルストイ、復活、原卓也訳、中央文庫、1981年 東京、p.774)

¹⁵² L. Giussani, *Un avvenimento nella vita dell'uomo*, Bur, Milano 2020, pp. 187, 27. 逐語訳

¹⁵³ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 31-32. 逐語訳

¹⁵⁴ FCL, 視聴覚資料、CLの年度始めの日、ミラノ、1975年9月14日。ドストエーフスキイはカラマーゾフの兄弟で《今すべての人は[...]自分自身の中に生の充実を味わおうと欲しています。ところで、彼らのあらゆる努力の結果はどうかというと、生の充実どころか、まるで自殺に等しい状態が襲うて来るのです。なぜというに、彼らは自分の本質を十分に究めようとして、かえって極度な孤独に陥っているからです。(F.M. ドストエーフスキイ、カラマーゾフの兄弟、第二巻、米川正夫訳、岩波文庫、東京 1993、p.188)

実際に《自分がより興味を持っている特定のものにおいて自己主張を追究することは、結果として常により強い不快感をもたらす。自己主張を好むこの姿勢、自己を表現すること、自分の表現力に快感を覚えることがすべてを台無しにする》¹⁵⁵のです。

この新型コロナウイルスの時世ほど、現実立ち向かうある種の姿勢の限界と、自己の表現力とに希望を置くことがどれだけ哀れであるかを感じたことはありません。グレアム・グリーンは《自己表現は残酷で利己的なものだ。それはすべてを、「自己」までをも食い尽くす。最終的には、表現する「自己」さえないことに気づくのだ。もはや自分の興味を引くものは何一つなくなる》¹⁵⁶と述べています。《自分自身や、自身の善良さや知性、自身の正当性に中心を置く者は、現実の底知れない自分とは異なる不思議さを見落とす。こうして、人生で唯一熱意を掻き立てられるものは、自分の正当性と満たされることだ。だから、起こることや、人に語りかける現実や、存在の恵みによる驚きへの熱意ではなくなる》¹⁵⁷のです。自分自身を中心に置くことは、現実に対して耳を傾けることを妨害し、現実の底知れない自分とは異なる不思議さが見えなくなり、人生・いのちを窒息させるような気泡に変えてしまいます。

満足が得られると思ったものがニヒリズムへと導くのです。自分の表現力を優先させることは、すべてを崩壊させ、つまりすべてをつまらぬものにするのです。なぜでしょう？それは人間の完遂の法則に反するからです。《いのちの法則は、“自分自身に固執する者は自分を失い、自分を失うことを受け入れる者はそれを見出す。「わたし」のために自分を失うことを受け入れる者は、それを再び見出す。”と主が言われている通りだ。これが“回心”の意味》¹⁵⁸なのです。

3. 回心。常に信仰を取り戻すこと

ジュッサーニが示している採るべき方法は、《自分自身の表現ではなく、自分自身の回心を。運動の公の、文化的、政治的表現ではなく、運動の回心を。これだ！神の時間に従って、その摂理の中で、この回心によって、一すべての預言者がイスラエルのために歌ったように、忠実であるなら—この世において“すべての民はあなたのもとに集う”という報いを神は保証される》¹⁵⁹というものです。

¹⁵⁵ FCL, 視聴覚資料, *CLの年度始めの日*, ミラノ, 1975年9月14日 逐語訳

¹⁵⁶ G. Greene, *Un caso bruciato*, Mondadori, Milano 1984, p. 78. 逐語訳

¹⁵⁷ L. Giussani, *Un avvenimento nella vita dell'uomo*, op. cit., p. 139. 逐語訳 同様の考えをドゥ・リュバックは《わたしたちは、自分は啓発されていると信じ切つて、本質的なものを識別できなくなる。もはや、わたしたちの周りで開花したばかりの、常に自分自身と同じでありながら、常に新しい聖霊の数千の創作を見出すことができないのである》と言う。(H. de Lubac, «Le nostre tentazioni nei confronti della Chiesa», in Id., *Meditazione sulla Chiesa*, op. cit., p. 200) 逐語訳

¹⁵⁸ FCL, 視聴覚資料, *CLの年度始めの日*, ミラノ, 1975年9月14日 逐語訳

¹⁵⁹ 同上。このことについてドゥ・リュバックは《「教会」においてその人間的な功績以外は見えなくなり、単に現世的

キリストの出来事へと《回心》することが《報い》を、この世で百倍の実を結ぶこと一すべての意味において、歴史に影響を与えることまで一を保証するのであって、自分自身の計画で思い上がり、必死に自己表現を追求し、自己主張することではないのです。しかし、ここがまさに人を陥れる点です。なぜなら、信仰、出会いは、しばしばあまりにも脆弱に見えるので、自分たちが望み、期待し、想像する満足と影響力を得るには十分ではないと感じられるのです。そのために、出来事を放棄して、自分たちの企画に留まるのです。トルストイはこの態度とその結果を《自分は信仰しているのだと彼は思っていたが、その反面、[...]自分の信仰がまったくの《まがいもの》であることを、全存在で意識していた。だからこそ、彼はつねに愁いをたたえた目をしているのだ》¹⁶⁰と、把握しました。

ところで、神が、すべてのものの意味が人間となり、この出来事が歴史の中で続き、わたしたち一人一人の人生・いのちと同時代に存在するならば、それを認める人にとっては、すべてはそれを中心に回るべきでしょう。《わたしたちの歩みの始まりである出会いは、決定的で包括的であると言う同様の特徴を持っている。よって、わたしたちが生きる歴史のすべての特定の事柄はその出会いの一部なのである》。キリストは人生全体、すべての小さな事柄に至るまで関係があります。《出会いの中で、すなわち歴史のある時点で表れる信仰の内容一人となった神、死んで復活されたイエス・キリストーは、渦のように、その出会いの中に持ち込まれるすべての瞬間と側面を包み込む。それらの瞬間と側面は、出会いから生じる視点、そこから生じる愛情によって、その出会いが示唆する自分自身の運命および人の運命にとって役立つように取り組むべきものである》¹⁶¹とされているように。

ジュッサーニは、この包括的な特徴を強調するために《出会いは、その包括的な性質のため、時間の中であらゆる関係の真のかたち、自分自身、他の人、物事を見る真のかたちになる。出会いは、包括的であるなら、単に人間関係の範囲ではなく、かたちになる。つまり、(出会いは)関わりの方としての仲間を特定するばかりではなく、その仲間に対する考え方や関わり方のかたちになるのである》¹⁶²と、かたちと範囲の違いを取り上げています。現実の各部分、人生の些細な折り返し目に対するまなざしは、あの出会いによってかたちづくられるという意味です。圧迫された状況にある場合でも、予期せぬ力強さと尊厳を持ってすべてを生きることができます。これは“文学”ではなく、体験です。ウェステルボルク収容所の木製のベンチに座ってエティ・ヒレスムは、《ここでは多くのことを学びます。たとえば、人生は歴史書に描かれているものとは大きく異なり、生きることは有刺鉄線に囲まれていようと隙間だらけの小屋の中であろうと、他の人や人生を必要な愛を持って生きるためならば、

な目的一どんなに高貴であろうと一を得るための手段と見なし、曖昧ながらキリスト信者であり続けながら、「教会」において)第一に信仰の神秘を見出すことができないなら、それは完全に理解できなくなったということを意味する》と指摘している。(H. de Lubac, «Il sacramento di Gesù Cristo», in Id., *Meditazione sulla Chiesa*, op. cit., p. 145). 逐語訳

¹⁶⁰ L.トルストイ, 復活, 前出, p. 492.

¹⁶¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 40. 逐語訳

¹⁶² 同書 逐語訳

どこであっても善であること》¹⁶³だと書いています。

結局のところ、自分自身にも認めにくいけれど、何度もわたしたちを支配するのは、出会いや信仰はこの世に影響するのか、「神秘」のイニシアチブは有効なのかという懐疑的な思いなのです。神の《ひそやか》な方法とベネディクト十六世は言われましたが、わたしたちにはひそやか過ぎるように思えるのです。《神がひそやかに働かれるのは、神の神秘に属することです。神が神の歴史を人類の偉大な歴史の中に打ち立てるのは、本当にゆっくりとなのです。神が人となったということは、同時代人にも、歴史を支配する勢力者にも気づかれませんでした。神は苦しみ、死に、復活者として弟子たちに現れ、弟子たちの信仰を通してのみ人類のもとに来ることを望まれたのでした。神は今も依然としてわたしたちの心の扉を密かに叩かれ、わたしたちが神に心を開くときのみ、徐々にわたしたちの“目を開いて”くださいます。[...]まさにこれが神のやり方なのではないでしょうか。外面的な力で他を圧倒するのではなく、自由意思に任せ、愛を与え、目覚めを待つのです》¹⁶⁴とされています。

あからさまに口には出さなくても、その懐疑的な立場—わたしたちの動き方から見えてくる—のために出来事を、神の現れ方や動き方、そのスタイルを自分たちの計画、活動と置き換えるか、または“手助け”することを好むのです。そうすることで、わたしたちはキリストを露骨に否定はせずとも、聖櫃や、わたしたちの強靱な前提に取り残したままにするのです。源を当たり前と見なし、肉から切り離し、自分たちが考え、望むもの、自己主張を正当化するインスピレーションに変えるのです。¹⁶⁵ジュッサーニがわたしたちを個人的かつ集団的な回心へと呼びかけるのはこのためなのです。

回心！回心とは一体何を意味するのでしょうか？なぜそれが重要な点なのでしょう？ジュッサーニは《回心するというのは、絶えず信仰を取り戻すことで、信仰とはある事実を認めることだ。起こった事実、わたしたちの間に存続する偉大な出来事を。二千年前に信仰を持っていたのは誰だろう？少数だったか大勢だったかはよしとして、あの「男」のうちに偉大な、超自然的な「何か」を認めていた人々だった。「彼」を見るように、見えるものではなかったけれども、明らかに「彼」にある何かだったのだ。なぜなら、ニコデモがイエスに言ったように“神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしをだれも行うことはできない”はずだからだ。要するに、信仰を取り戻すというのは、わたしたちの間にある「神秘」、わたしたちの中に、わたしたちの間にある出来事の意識と、これに従う態度を絶え間なく取り戻すことを意味するのだ。洗礼によってわたしたち一人ひとりの中に、そして神の「教会」の一部としてのわたしたちの間にいるのだ》と。そしてこの回心が真に

¹⁶³ E. Hillesum, *Lettere*, Adelphi, Milano 2013, pp. 182-183 逐語訳

¹⁶⁴ J. ラッティンガー — ベネディクト 16 世, *ナザレのイエス・イエスの死からの復活*, 里野泰昭訳, 春秋社 2013 年, pp. 326-327.

¹⁶⁵ 参照. in proposito Congregazione per la Dottrina della Fede, *Lettera Placuit Deo ai Vescovi della Chiesa cattolica su alcuni aspetti della salvezza cristiana*, 2. 逐語訳

《わたしたちの人生・いのちの計画になるなら、わたしたちは日々歴史に求められるすべての事柄に対してより良く準備ができ、意欲を持って能力を発揮できるだろう》¹⁶⁶と書いています。

ジュッサーニは、信仰を絶え間なく取り戻すというのは《知性と従順としての信仰を取り戻すこと》を意味すると続けて詳細に述べています。ここには注意深く見ていくべき信仰の二つの側面—知性と従順—が出てきます。

前者から見ていきましょう。《わたしの中に、そして君たちの間に、わたしたちの間にある出来事は知性によって知覚される。実際に、信仰は知性によるものだ》が、この知性は《自然な理性の通常の知性よりも深く、大きい。それは、物事の実質と意味を認めるレベルに入り込むからだ。知性としての信仰を取り戻すというのは、わたしたちの間にある事実を絶え間なく認めることを意味する。“この「パン」を食べるわたしたち皆は一つである。あなたがたは互いに相手の部分なのだから、互いの重荷を負いなさい”》¹⁶⁷というものです。

わたしは自問します。すべての成果と発展とに特徴づけられ、懐疑主義と偏見によって緊張が続く今の世の中で、なぜわたしたちが取り上げていることを話すことができるのかと。どのような権限を持って言えるのでしょうか？人生・いのちの権限と経験を持つてのみ言えることです。つまり、わたしたちのうちに新しい自意識が成長し、それによってすべての人が生きている同じ状況を新しい方法、より人間的に生きることによってのみ言うことができます。《精神の解放は、抽象化への移行ではなく、具体化への移行に随行する、[...]関係ないと感じさせる力に対する勝利である》¹⁶⁸と、ベルジャーエフが指摘するように。さらに、ジュッサーニの言葉を借りて《わたしたちは、解放に向けた人間の気高い努力がより完遂される場を成している》と、どうして言えるのでしょうか。《神聖な現実が、わたしたちの間およびわたしたちのうちにあるキリストの神秘が、常に存在し続け、新しい自意識を成すものにならないなら》どうしてこのようなことが言えるのでしょうか。新しい自意識というのは《本当に自分自身を知覚する別の方法であり、本当に他者を知覚する別の方法だ。その人が誰で、わたしとの関わりがどういうものなのかを知覚する別の方法なのだ。《わたしたち皆は一つである。このようにあなたがたは互いに相手の部分なのだから、お互いの重荷を負いなさい》。これが毎朝の、日常の計画にならないなら、わたしたちは[この世で]一体何をしているのだろうか？わたしたちのこの世に対する立場は、他の多くの中の一つの言説、イデオロギーとなり、人間の顔に投げかけられる数えきれない幻想の一つに過ぎなくなるのだ》¹⁶⁹と言えます。

ジュッサーニが回心、信仰の絶え間ない取り戻しを示すために使う二つ目の言葉は、《従順》です。従って、知性としての信仰だけでなく、《わたしたちの中とわたしたちの間にあ

¹⁶⁶ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

¹⁶⁷ 同上 逐語訳

¹⁶⁸ N. Berdjaev, *Schiavitù e libertà dell'uomo*, Bompiani, Milano 2010, p. 627 逐語訳

¹⁶⁹ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975 逐語訳

る新しさの認識としてだけでなく、その認識された現実への従順として、わたしたちの中とわたしたちの間に認める現実に対する、わたしも、君たちもそうであるキリストの神秘との一致、わたしと君たちの一致に対する従順だ。母親が保証する血液の一致は、主が群衆の間にいた時に“先生、あなたのお母さんと兄弟がここにいます”と言われると、“わたしの母、兄弟、親族とは誰か？御父のみ心を行う者、これがわたしの母、兄弟姉妹だ”と答えたように、この一致より深く、決定的なものではない》¹⁷⁰のです。

この言葉—従順—は、この道のりの終わりで、より詳しく説明することにしましょう。さて、自問してみましょう。認識としての信仰、わたしたちの中とわたしたちの間にある新しさの認知が、あなたとわたしにおいて事実であるかは、どのようにして確認できるでしょう？また、その認められた現実、《あの男、キリストにおけるわたしたちの一致》¹⁷¹に対する従順が、あなたとわたしにおいて事実であるかは、どのようにして確認できるでしょう？回心の確認とはどういうものですか。そのような確認は、最終的な幸せの前触れである新しい人間性です。

これは聖パウロの手紙によって《とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのことです。わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤ民族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることで》¹⁷²と証しされている経験です。

では、賞を得るために走るとは何を意味するのでしょうか？それは未来への期待に過ぎないのでしょうか。ジュッサーニは、何かに向かうということの根底にある経験を明確にす

¹⁷⁰ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975 逐語訳

¹⁷¹ L. Giussani, *Dall'utopia alla presenza (1975-1978)*, Bur, Milano 2006, pp. 25-26. 逐語訳

¹⁷² フィリピ 3,4-14

るために、聖パウロ、すなわち典礼がそれを示すために用いる言葉を説明します。わたしたちにとって、わたしたちの経験—あなたのそしてわたしの—にとって、完遂を望む人間にとってもっとも重要な指摘を《賞（報い）はこの世で始まる。それは約束された新しい人間性だ。聖パウロと典礼は、“保証”という非常に明確な用語を用いている。約束された聖霊の保証。“保証”とは“前払い”を意味し、最終的な幸せのこの世での体験（前払い）を意味します。わたしたちは他の人に、この世の中に、人々に与えるために、それを体験し、生きるように呼ばれているのです。なぜなら、この新しい人間性という賜物は、人の努力が欺かれず、偽りにならず、失望させるものに終わらないための最高の勧めだから》¹⁷³だと付け加えています。

新しく、異なった、より本物で完遂された望ましい人間性は、わたしたちの人間としての、現代人としての意識に突破口を開けることができる唯一の“勧め”です。唯一魅了し、解放を与えるように感じられる“勧め”なのです。こうした書き方は、必然的に一般的なレベルに留まりますが、これまで言ってきたことは《あなたの家族、妻、夫、子供、職場の同僚との関係にも該当するものだ。あなたが出会い、関わりを持たなければならないどんな人との関係にも、順境にあっても、逆境にあってもどんな出来事にも一順境にある時は謙遜に、逆境にある時には変わらず信頼するように一通用するはず》¹⁷⁴です。

新しい人間性、最終的な幸せの前触れ、つまり物事に対する異なった考え方、新しい認識、*現実に対する真のまなざし*。これが賞（報い）です。今まで話してきた回心によって導かれる賞（報い）です。

¹⁷³ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

¹⁷⁴ 同上 逐語訳

5章

御父との関係

現実に対する真のまなざしとはどのようなものでしょうか。一体誰がそのようなまなざしを経験したことがあるのでしょうか。誰がそれを歴史にもたらし、それを生きるようわたしたちを助けることができるのでしょうか。

イエスはわたしたちと同じように地上で生きました。本物の人間として、特定で限りのあるはかない物事と関わり、試練や苦難を味わい、十字架という死に至るまでの苦しみに耐えました。何が彼を局部的なものに屈服させず、ニヒリズムや究極の試練を前にして失望に陥らせなかったのでしょうか。キリストは、わたしたちが局部的な物事や状況に振り回されることや、自己主張をしようとする焦りや、意味の欠如や、失望からどのようにして助けてくれるのでしょうか。

1. 「他者」に依存するわたしたちの人生・いのち

人間にとっての信仰の有益性(逐語訳)¹⁷⁵という著書において、ジュッサーニは、ラツィンガーの著書キリスト教入門(逐語訳)の一節《自らキリスト信者になる時、模範的な人間と認め、人間のどんな行為にとっても手本となる判断基準として受け入れて、キリストの名に服従する時、何が起こりますか。この行為(信者になること)によってわたしは、どのような回心を実現し、人類に対してどのような立場を取るのでしょうか。この行為にはどんな奥深さがあるのでしょうか。現実の全体に対してどんな評価が生じるのでしょうか》¹⁷⁶を引用しコメントしています。

ジュッサーニは、引用した後、その一節を繰り返しながら、そこに含まれている意味を《ラツィンガーは、キリスト信者はこのキリストの名—ヘブライ語の“名”の意味で—に、この「存在」に、この「存在」の力に服従することだということから話を始めている。“このように受け入れながら”、わたしの人生・いのちを覆う“模範的な人間”だと認め、基準として、“人間のどんな行為にとっても規範的な判断基準”として認めることだと。「彼」が振る舞うように、わたしは振る舞おうとすべきである》¹⁷⁷と展開します。

では、キリストの名に《服従し》、どんな行為にとっても規範的な判断基準として受け入れることでわたしたちに生じる最初の変化、一番の新しさは何でしょうか。まずは、《わた

¹⁷⁵ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, Bur, Milano 2018.

¹⁷⁶ J. Ratzinger, *Introduzione al cristianesimo*, Queriniana, Brescia 1969 (1986), p. 55. 逐語訳

¹⁷⁷ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., pp. 126-127. 逐語訳

私たちの人生・いのちが「他者」に依存し、この「他者」に因るものだという意識である！朝起きてカフェオレを飲む時、家の中で精力的に片付けを始める時、仕事に出かける時—この仕事は何であれ(違いはない)—、わたしたちの人生・いのちは別の何か、より大きい、とてつもなく大きいものに因るのである》¹⁷⁸ということです

ジュッサーニが断言する次のこと、《わたしたちが何かより大きなものの“もの”、わたしたちは御父の“もの”だという意識である。「彼（キリスト）」の存在すべてが御父に“因るもの”で、「彼」が御父の“所有物”、御父の“もの”だということを理解した時に明確に直観される》¹⁷⁹は、キリストが人として、人生・いのちの模範として、判断基準として、行為の基準として生じさせること、わたしたちのうちに生じさせるべき第一の基本的なことです。《御父》、これは決定的な言葉です。

置かれている状況の中で、新型コロナウイルスによってどれだけ脆弱で、傷付きやすく、起こることに依存しているかを皆が意識させられた今、これらの言葉の意味はあらためて劇的に際立ってきます。

まさに“御父”に対する決定的な依存を《使徒フィリポはキリストが拘束される一時間前におぼろげではあっても直観して、“御父について話し続けてください。御父を見せてください。そうすれば満足できます”と頼んだ。彼は、この言葉は人が一般的に自分自身を感じ取る方法を覆し、すべての根源に通じ、すべての範囲に及ぶものだと理解した。なぜなら、御父はすべての範囲、すべての根源だからである。より身近な例として考えられる宿ったばかりの赤ん坊にとって、母親（母親も父親も同じ）の子宮が完全な範囲で、完全な根源であることよりもこの上ないのである》とジュッサーニは言っています。すなわち、継続する根本的で究極の父性なのです。それから《誰もこれほど父親ではない。「彼」は唯一の「父」であり、わたしたちの人生・いのちのすべては「彼」に頼り、「彼」の所有物である。“フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、御父を見たのだ。”これがキリストに対してドストエフスキーが感じていた限りない愛情と驚きの根源である。わたしたちが帰属し、親密となる御父の神秘は御子にあるからだ》¹⁸⁰と続けます。

「神秘」が親密になることを、宇宙とわたしの自己、わたしたち一人ひとりの自己が瞬間ごとに生じる捕らえることのできない源、最終的にはすべての存在が帰属する源との親密さを示すために《わたしたちに使用できる言葉では、“父”という言葉がもっとも身近だ。父親と母親は、もっとも近い象徴、この親密さにもっとも近いしるしである。神はわたしたちの内の一人名となった。しかし、キリストが人間の模範として、基準として、わたしたちに生じさせるのは、“父”と呼べる何かより大きい、常になだれ込んでくるものに帰属しているという深い意識である。仕事が熱意を持って捧げられ、人間関係が憐れみと愛に溢れるよう

¹⁷⁸ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit. p. 127. 逐語訳

¹⁷⁹ 脚注 178 と同所 逐語訳

¹⁸⁰ 同書, p. 128. 逐語訳

に、わたしたちは自分たちの仕事と人間関係にそれを認めるべきなのである》¹⁸¹とジュッサーニは言っています。

御父はわたしたちをご自分との深く親密な関わりに導くために、どのような方法を選ばれたのでしょうか。御子を送り、わたしたちにとらえられ得る存在とされたのです。そして、聖霊の業¹⁸²によって人となられた御子を通して、わたしたちが「彼」とどのような親密な関わりに呼ばれているのか、すべてのものの見方や、扱い方にどのような新しさがもたらされるかを“見る”ことができるようになるためです。

キリストは人間として、自分に耳を傾け、行いを見ていた人々を御父への帰属の意識へとどのようにして導いたのでしょうか。「彼」のどの行為も、言葉も、まなざしも御父の意識によって生み出され、とらえられ、御父の意識を表していたのです。《人としてのキリストは、この意識に完全に決定されていた。その証拠に“わたしと父とは一つである”（ヨハネ 10,30）と言えたのである。歩いている時、あるいは使徒たちと話している時や食事をしている時に「彼」を止めて、“この瞬間にあなたの意識を満たしているものは何ですか。”と訊ねた者には誰にでも“父だ”と答えただろう。“わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある。わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである”（ヨハネ 4,32-34）。御父の業を成し遂げることで、これが人生・いのちである。》ジュッサーニは、自分とわたしたちについて話しながら、どんなことをしようと、どんな道を歩もうと《わたしの人生・いのちは御父の業を成し遂げることである。わたしが司祭だからというのではなく、わたしも事務員である君とまったく同じなのだ》¹⁸³とすぐに続けています。

キリストの経験は、わたしたちが照らし合わせ、自分を重ね、見つめるべきものです。今、誰かが道行くわたしたちの足を止め、《この瞬間にあなたの意識を満たしているものは何ですか》と訊ねたとしたら、何と答えるでしょう？はっきりさせたいのは、なにがしかの言葉を繰り返すことではなく、日常を生きるわたしたちの意識を実際に満たしているものに意表を突かれることです。

御父の意識を持つというのはどういう意味でしょうか。御父とは誰ですか。御父はすべてのものの源、野の花や愛している人、究極的にすべてのものの起源、発端です。では、キリストが持っている御父についての意識と、「彼」の現実との関わりとの間にどんな繋がりがあるのでしょうか。わたしたちにとって、キリストが人間としての人生・いのちを御父との関わりとして生きる生き方に、どのような得があるのでしょうか。

キリストにおいて心と一致し、満足させ、満たし、失望させない存在と関わる方法が親し

¹⁸¹ 同上 逐語訳

¹⁸² «イエスが御父について、また子である自分自身について語ることは、霊のあの充滿から流れ出ます。この霊はイエスの内にあり、イエスの魂に自らを注ぎ入れ、イエスの「自我」そのものに浸透し、イエスを奥深いところから燃え立たせ、イエスのわざを生き生きとしたものにするのです。」（ヨハネ・パウロ二世、回勅 聖霊-生命の与え主、21

¹⁸³ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., pp. 128-129. 逐語訳

みのあるものになったのです。わたしたちはそのためにつくられたのです。《現実を「神秘」から生じるものとして認めることは、理性にとって親しみのあるものであるはずである。なぜなら、矮小化するのでも深みのない平坦なものにするのでもなく、現実をありのままに、つまり神が望まれたままを認めることに、“心”の要求は一致を見出し、わたしたちの本質である理性と愛情の可能性は徹底的に実現されるからである。確かに、理性は、その本来の躍動によって、「神秘」に根をはるものとして現実を認めなければ自身を完遂することはできないのである。人間の理性は、「他者」に起因するものとして物事をありのままに認める時、頂点を極め、本物の理性であると言える》¹⁸⁴とジュッサーニは言っています。

現実を「神秘」から生じるものとして認めることは、夢想家の幻想でも、自分に言い聞かせることでもなく、理性と愛情を真に用いることの頂点なのです。わたしたちにとって、これはどれだけ親しみのあることでしょうか。日常的な事柄を見ながら、わたしたちは何度「神秘」を認めたことがあるのでしょうか。才能の問題ではありません。現実を「神秘」のしるしとして認めることは、聖パウロがローマの教会への手紙で《神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます》¹⁸⁵と言っているように、誰にでも手が届くことです。

誰にでも手が届くことではあっても、当然なことではありません。反対です。わたしたちの理性—構造的に現実の意味をとらえるようにつくられている—にとって馴染みのあるべきものであり、わたしたちの自由に合致しているにもかかわらず、歴史を辿ってみるとはるかかなたの焦点が合わないもののように、認めることも肯定することもできないのです。その証拠に、現実を「神秘」のしるしとして認めることが起こる時、わたしたちはあっけにとられてしまいます。つまり、わたしたちにとって、日常的な経験ではないということです。日常的なのは、現実の存在を当たり前と見なす別の関わり方です。

福音書が提示する、人々や物事との日常的な関わりにおけるイエス自身の経験とはどういうものでしょうか。イエスは現実すべてを出来事としてとらえます。《出来事の躍動が(イエスの)人生・いのちのどの瞬間にも描かれている。“御父がソロモンよりも立派に装われる”野の花は出来事である。落ちてくる小鳥—“天の父は知っておられる”—は出来事である。“数えられている髪の毛の一本一本”は出来事である。何百万世紀も前から存在する天と地も出来事で、説明し尽くされないこととして、今日も起こり続けている新しい出来事なのである。すべてのものとの関わりにおいて“何か別のもの”を垣間見ることは、その関わり自体が出来事だということである》¹⁸⁶とジュッサーニは言っています。

福音書が描くイエスの現実に対するまなざしに驚き、惹きつけられないでいることは難しいでしょう。イエスは現実を平坦にせず、矮小化しない関わり方を示し、現実のどの側面

¹⁸⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 31. 逐語訳

¹⁸⁵ ローマ 1,19-20

¹⁸⁶ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 28-29. 逐語訳

に対しても本物の、全面的な関わり方を証ししています。野の花や落ちてくる小鳥、苦しむ人、すべてをどのように見ているかを証しすることによって、イエスは今起こっている「神秘」との親密さにわたしたちを導き入れます。つまり、すべては出来事として、すなわち究極的にすべては今「神秘」から生じているものとして生きることができるのです。

どうしてこのような熱意で現実を生きることができたのでしょうか。御父との関わりです。前章で述べた言い方をするなら、イエスは自分を主張すること、「自分」の表現力ではなく、御父との関係に希望を置いていたのです。(奇跡もこれ見よがしの行為ではなく、人々の視線を御父に向け、御父に気づき、自分が御父から遣わされた者であることを皆が認めるために行ったものです。)¹⁸⁷「彼」の人間としての生き方は、自己主張ではなく、御父のみ旨への従順でした。どの瞬間にも「彼」の意識を満たし、途切れることない御父との関わりが、比例のない熱意と濃密さですべてを生きさせていたのです。人間キリストのうちに、わたしたちはローマーノ・グアルディーニの《深い愛の経験の中では[...] 起こることはすべて出来事となる》¹⁸⁷という言葉が完全に反映されていることが分かります。

《わたしと父は一体である》¹⁸⁸とあるように、御父より「彼」をとらえるものはありませんでした。被った悪でさえ彼を御父から切り離すことはできませんでした。むしろ、そこに計り知れないほどの信頼をもたらず御父との関係の濃密さが見られます。《どんな疑いの余地もない御父に対するこの根本的な信頼は、御父と御子との聖霊の交わりに基づいている。つまり、聖霊が御子のうちに御父への揺るがない信頼を保たせるのである。そのため御父の意向はどんなものでも一離れることが見捨てられることになったとしても一常に愛に由来するものであって、人となった御子はそれに対して、人間として従わなければならないのである》¹⁸⁹とフォン・バルタザールは言っています。ここに無に対するキリストの勝利の根源があります。御子の生き方は無に対する勝利なのです。

キリストはすべての行いを通して《わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた御父を信じるのである》と御父との関わりを証しします。¹⁹⁰「彼」のすべての行為や言葉は、御父、「神秘」に向かわせます。「彼」のすべての行動やまなざしは、この「存在」に貫かれています。ジュッサーニが言っている文章《ナザレの男イエス―「御言葉」の神秘に覆われ、したがって、神の本質を保ちながら(しかし、その外観はまったく人と異なるところは何一つなかった)―、この男の行為は、御父の意識を明らかにしないものは一つもなかった》¹⁹¹をわたしは可能な限り繰り返そうと努めています。人間イエスの自意識の特徴を繰り返しながら、ジュッサーニは《“わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである”。ある

¹⁸⁷ R. Guardini, *L'essenza del cristianesimo*, Morcelliana, Brescia 1980, p. 12 逐語訳

¹⁸⁸ ヨハネ 10,30.

¹⁸⁹ H.U. von Balthasar, *Se non diventerete come questo bambino*, Piemme, Casale Monferrato (AL) 1991, p. 31. 逐語訳

¹⁹⁰ ヨハネ 12,44 参照

¹⁹¹ L. Giussani, «Un uomo nuovo», *Tracce-Litterae communionis*, n. 3/1999, pp. VII-IX. 逐語訳

いは、“わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ”。「彼」の人生は継続的な模倣、模倣の連続のような、鏡のようなものである。「彼」の意識は常に御父の意識の鏡だった。“わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く”。意識の中で聞くから、“わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである”¹⁹²と、ヨハネ福音書の言葉をとりあげています。

イエスは自分の価値はすべて御父との関わりによるという意識を持って生きていました。この関わりの外では持続するもの、実質を持つものは何もなかったのです。御父が、御父との関わりが、どんなものにも深さと意味を与えるのでした。《イエスは確かにすべてのものに対して驚いた […] ごく小さな花から際限のない大空に至るまで。しかし、この驚きは、愛の完全な霊においてすべてを支配し、超える愛そのものに驚く永遠の御子のもっとも深い驚きから生じる。“御父はより偉大である”》¹⁹³とフォン・バルタザールは言っています。

2. イエスに従う、つまり、子であること

どうすれば実際にわたしたち一人ひとりにとって、世界と自分自身に対するこのまなざしが親密なものになることが可能なのでしょうか。イエスと共にいることによって。キリストの現実に対するまなざしを学ぶことは、わたしたちにとって有益なのです。なぜなら、《人が世界を“与えられたもの”、出来事として見ないなら、神が今この時にその人に与えているものとして見ないなら、世界は惹きつける力すべてを、驚きとモラルに訴える力を、つまり、物事の秩序と運命に従う勧めを失ってしまう》¹⁹⁴からです。逆に、現実が出来事として、「神秘」から生じるものとして認められるなら、人生・いのちには比べ物にならない熱意がもたらされます。《瞬間ごとに、すべてのものと源との関わりをとらえる者には何という熱意が約束されていることか！どの瞬間も「神秘」との決定的な関わりがあるので、失うものは何もない。わたしたちはこのために生きており、これがわたしたちの幸せなのである》¹⁹⁵とジュッサーニは言っています。

一瞬一瞬を、もっとも儂い瞬間をも意味と確実性に満ちるものにするのは、御父との関わりです。そして、わたしたちはそれを意識する必要があります。《何世紀もの力強さが/わたしたちにのしかからない/瞬間はない。いのちの持つ鼓動ごとに/永遠の驚異的な尺度を響かせる》¹⁹⁶のです。さもなければ、すべては薄片と化し、意味の空虚が勝ります。

¹⁹² L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., p. 129 逐語訳

¹⁹³ H.U. von Balthasar, *Se non diventerete come questo bambino*, op. cit., pp. 45-46. 逐語訳

¹⁹⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 29. 逐語訳

¹⁹⁵ 同書, p. 31. 逐語訳

¹⁹⁶ A. Negri, «Tempo», in Id., *Mia giovinezza*, Bur, Milano 2010, p. 75. 逐語訳

このため、イエスに従うことはわたしたちにとって最大限に有益なことなのです。「彼」に従うことによって、《わたしに従う者は今この世で百倍受ける》という約束が実現するのをわたしたちは見ることができます。イエスと共に生きることで、現実との真の関係は、わたしたちの中で安定した経験になっていくのです。宗教性一すなわち、すべての中で、あらゆるもののうちに「神秘」を認め関わること一は、どの瞬間にも経験され、そこから生じる異なった人生・いのちは継続的なものとなり得るのです。

キリストと共にいるなら無駄なことは何也不会あります。それは、キリストが御父と親密な関わりを可能にするからです。《話し合いを重ね、共に歩いてきた今、それらがどんな類いの熱意と尊さ、人生の軽やかさ、どんな類いの異なる生き方に導いたかを感じ始めることができる！ […] “わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方の御心を行うために天から降った。わたしを遣わされた方の御心は、わたしに与えられたものは何一つ失わないことである”。わたしが何一つ失わないこと！ イエスは使徒たちや弟子たちのことを言っていたのだが、この文の意味は拡大できる。御父の御心は、わたしに与えられたものは何一つ失わないことである。どの瞬間も、人生のどの状況も、どんな挑発も、どんなやるべきことも。自然に生じる熱意、常により自然に生じる熱意である。自分の意志で執拗に求めることの結果ではない》¹⁹⁷とジュッサーニが言っているように。

それは、ナチズムへ抵抗して命を失ったボンヘッファーが牢獄で書いた手紙の一通に《“愛する兄弟たち、手放しなさい/あなた方を苦しめるものを/あなた方に欠けているものを/わたしがすべてあなた方に返し与える”。“わたしがすべてあなた方に返し与える”とはどういう意味でしょうか。失われるものは何一つないのです。キリストにおいてすべては取り返され、保たれます。当然、違うかたちで、透明で、明らかな […] キリストは […] わたしたちの罪に歪められたものではなく、本来神に望まれたかたちのままで、すべてを返し与えてくださいます》¹⁹⁸と証ししている熱意です。

どんな状況もキリストが世界にもたらした新しさを伝えることができます。しかし、そのためには、わたしたちの努力一わたしたちの自由が必要ではないという意味ではない一だけでは十分ではないのです。イエスに従うというのが何を意味するかを注意深く見てみましょう。イエスがわたしたちに証ししている方法とはどんなもののでしょうか。努力ではなく、父子関係です。子であることです。イエスは、自分の子としての証しを通して、わたしたちに子であることがどういうことかを教えます。「彼」が示す完遂への道は、能力があることではなく、子であることです。

聖パウロは、誕生したばかりの「教会」のキリスト信者にこの親しみの源を《あなたがたが子であることは、神が、『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってく

¹⁹⁷ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., pp. 129-130 逐語訳

¹⁹⁸ D. Bonhoeffer, *Resistenza e resa. Lettere e scritti dal carcere*, Paoline 1988, Cinisello Balsamo (MI), pp. 238-239.

逐語訳

ださった事実から分かります》¹⁹⁹さらに、《あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです》²⁰⁰と思い出させています。ベネディクト十六世は《受肉と死と復活により、わたしたちと同じ人間となったイエスは、ご自身が人であり御子であることのうちにわたしたちを受け入れてくださいます。こうしてわたしたちも、イエスが特別な意味で神に属することのうちに歩み入ることができるようになります。確かにわたしたちは、イエスと同じように完全なしかたで神の子であるわけではありません。わたしたちは、キリスト教的生活の歩み全体の中で、つねにますます子とならなければなりません。そのために、いっそうキリストに従い、キリストとの交わりのうちに、わたしたちの人生を支えてくださる父である神との愛の関係をますます深めなければなりません。そして、わたしたちが聖霊に心を開き、聖霊がわたしたちに「アッバ、父よ」と神に呼びかけさせてくださるとき、わたしたちに示されるのはこの根本的な現実です。わたしたちは、創造を超えて、イエスとともに本当に養子とされます。わたしたちは神と本当に一つに結ばれ、新たなしかたで、新たな次元で子となるのです》²⁰¹と話されています。ハインリッヒ・シュリエは、キリスト・イエスのうちにいることは《“聖霊のうちにいる”ことにおいて、わたしたちに明らかになり、手に届くものとなり、現在の実験の経験になるのである […] 実際、聖霊においてイエス・キリストは現れ、経験できるものとなるのである》²⁰²と述べています。

イザック・デッラ・ステッラはその著書セルモーニにおいて、子となることについて示唆的に《子になること以上に奴隷が望むものがあるだろうか。それどころか兄弟たちよ、もし神自身の善良さがそれを許し約束しないなら、わずかにでもそんなことを信じる者があるだろうか》²⁰³と言及しています。その少し先では《あなたとわたしが一体であるように、彼らもわたしたちと一体であるように。これは奴隷が向かっている方向、敵が和解に向かっている方向である。それは敵の立場から奴隷に、奴隷から友人に、友人から子に、子から相続人に、相続人から一体となり、さらには遺産の源と一体になるように。こうして、自分自身を奪われないのと同じように、神ご自身である遺産を奪われることはないのである》²⁰⁴とも言っています。

わたしたちの過ちは、イエスがわたしたちと違うのは「彼」の優れた能力が無に屈せずに生きることができるというわたしたちにはできないことを行うことを可能にするからだと考えことです。しかし、イエスが揺るがず、不毛にならず、無の被害者にならないのは

¹⁹⁹ ガラテヤ 4,6.

²⁰⁰ ローマ 8,15.

²⁰¹ ベネディクト 16 世、一般謁見 2012 年 5 月 23 日、カトリック中央協議会

²⁰² H. Schlier, *Linee fondamentali di una teologia paolina*, Queriniana, Brescia 2008, p. 156. 逐語訳

²⁰³ Isacco della Stella, «Sermone V», in *Pensieri d'amore*, a cura di M.A. Chirico, Piemme, Casale Monferrato (AL) 2000, p. 102. 逐語訳

²⁰⁴ 同書, p. 110. 逐語訳

、御父のために生きていますからです。《わたしは父によって生きています》²⁰⁵これが「彼」の唯一の力なのです。「彼」のわたしたちとの違いは、独自の力で自分自身であることではありません。「彼」のわたしたちとの違いは子であることにあるのです。ここにキリストの性質におけるわたしたちとの完全な違いがあります。

「彼」の自意識を成しているのは、御父との関係です。《“自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める”[自己主張]—わたしたちが話し合う時のことを考えてみればわかるように、これは自分を殺してしまう—“しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は、真実な人”なのです。わたしたちは、自身の視点の主張をするのではなく、わたしたちを遣わした方の“考え”を探し求めるために、懸命な試みによって謙遜に真実を主張するべきである》²⁰⁶とジュッサーニは言っています。

自身の視点で主張しようとしなないというのは、どういう意味でしょうか。それは意識の異なる態度です。《キリスト信者が“意識”という言葉の口にする時は、現代人が口にする意味とはまったく逆である。現代人が口にする意味の意識（“わたしは自分の良心に従う”）は、自分の意見、考えを生み出し、自分が考え、感じることを主張する権利を持つ場を意味する。それは、自分自身をすべての源だと考えるからである。つまり、意識は基準と判断の源として捉えられている》のです。逆に、キリスト信者にとって意識とは《人が自身のうちで「他者」の真理を求めて耳を傾ける場である。したがって、キリスト信者は本質的に謙虚であり、物事が明確な時には確信に満ち、謙虚に確信を持つのである。“わたしをお遣わしになった方は真実で、わたしは「その方」から聞いたことを世に伝えている”とヨハネ福音書にあるように、その人は探し求めるために、“聞く”ために、自分のエネルギーを費やす準備ができているのである。わたしたちは聞いたことを伝える》²⁰⁷のです。

「他者」の真理に耳を傾けること、「他者」から聞いたことを言うことは、難しいことあるいは奇妙な態度でしょうか。そうではないと、《あなた方がいつもしていること、失礼、あなた方がよくしていること》ですが、ただそれについて意識する必要があります。ジュッサーニは話しをしていた大人たちに向かって《それをしていることを意識するのは何と偉大なことだろう。あなた方が子どもたちに、同様に友人にも言ったり、勧めたりしていることに驚くのは、自分の子どもたちや友人に“わたしにこのように語らせている方は真実で、わたしは「その方」から聞いたことを伝えている。わたしは自分の子どもに「彼」から聞いたことを伝えている”と言えることだ》²⁰⁸と続けます。子どもたちとの関係の中で、この新しい意識が働くと《何という平安、何という安心、何という平和が生じることか！あなた方は子どもの答えに対しても自由になる。逆に、自分たちの意見を大切にするなら、

²⁰⁵ ヨハネ 6,57.

²⁰⁶ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., p. 130. 逐語訳

²⁰⁷ 同書, pp. 130-131. 逐語訳

²⁰⁸ 同書, p. 131. 逐語訳

何としてもそれを通そうとするのである。つまり、支配するのだ》²⁰⁹と答えます。これらは、キリストによってもたらされた新しい意識が、わたしたちの肉に浸透し始めているかどうかを確認する非常に具体的なしるしです。

従って、ポイントは、御父の意識が益々親密になり、誰もがイエスのように《わたしを遣わされた方は、わたしと共におられる》と言えるようになることです。すでに言ったように、歩み続け、出会いによって常に開かれる道を歩むのをやめないなら、それは時間の経過とともに成熟する経験です。《想像し、考えてみよう。ある人が1日に10、100、1000回自分を遣わした方、つまり自分を成している「方」、自分を成している「神秘」が自分と共にいると、神が自分と共にいるという意識を持つことを。幾人かの顔に、幾人かの修道士や修道女の顔に表れる平穩の根源はここにある。しかし、わたしたちの間でもこうした意識を持って生きている人がいるから、わたしたちの友人の多くの顔にも印象的な平穩が見られる》²¹⁰と続けます。

このような意識は、一步ずつ、すべての瞬間を、すべての行為を、すべてのまなざしを、そしてすべてに立ち向かう方法を形づくりします。《わたしは神から来た。わたしは自分自身でやって来たのではない！》わたしはあなた方にこれを言っているのではなく、自分自身に言っているのである》とジュッサーニは思い起こしながら、強調しています。そして、《誰もが自分自身にそれを言うべきである。わたしは自分自身でやって来たのではなく、「他者」から出た者なので、「その方」の業を行わなければならない。わたしは「その方」に耳を傾け、見つめ、模倣しなければならない。もし誰かが、ナザレのイエスの若い時か成人してからかの人生のある瞬間に近づいて、“あなたは何を考えているのですか”と訊ねたならば、「彼」は“御父のことを”と答えただろう。だが、それは物事に目を向けていないわけではない》のです。実際に御父のことを考えることと、物事のことを考え関心を持つこととに違いはありません。《御父のことを考えることは、物事についての一つの真の考え方である。いや物事についての真の考え方である。それは、あなたが妻や夫、子どもたち、仕事、あなたに起こる良いこと、悪いこと、自分自身に対するまなざしの向け方である》²¹¹と続けます。

イエスはわたしたちに「神秘」を「父」として示します。「彼」がわたしたちに《わたしたちの父よ》と言うように教えます。あらゆることと根源との関わりを瞬間ごとにとらえることは、あらゆることと御父との関係をとらえることです。そして、それはわたしたちがあらゆることをその真実、全面的に見ることを可能にし、作り上げることを可能にします。《しかし、あなた方は、イエスが言っているような「神秘」との関係、御父との関係、つまり、キリストを模倣することは、男性や女性、子どもや花、物事に目を向けないようにすると考えるのだろうか。いや、わたしたちにそれらを百倍の熱意を持って見るように

²⁰⁹ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., 逐語訳

²¹⁰ 同書, p. 132. 逐語訳

²¹¹ 同所 逐語訳

、それらを百倍の真実で見るようにするのだ。だから、わたしたちは、はっきりとは言えなくても真実がここにあることを理解し、はっきりとは言えなくても真実はここから来ることに気づくのである》²¹²と続けます。

3. 悪は忘れること

御父との関係は、物事から注意をそらすのでも、それらを排除するのでもなく、意味で満たします。御父のことを考えることは、物事を考える真の方法です。まったく真のままざしです。その時、すべてが比類のない深さと強さを得ます。すなわち、ついに、瞬間と人間関係や仕事、現実、様々な状況、自分自身や他の人々の苦しみの価値を肯定することができるのです。

すべてを真の方法で扱う時にあらわになるしるしがあります。それは、自由、平和、揺るぎない確信、信頼、委ねること(《あなたの御手にわたしの魂を委ねます》)です。不安はもはやわたしたちのうちで勝つことなく、わたしたちは自分の表現力による成果に決定されず、恐怖と不確かさに支配されません。《従うことが何より易しいのに、なぜ悩むのだ》²¹³とポール・クローデルはマリアへのお告げでアンヌ・ヴェルコールに言わせています。

しかし、自分自身や他の人を扱う時、物事を考えるわたしたちの方法には何と多くの偽りと偏りがあるのでしょうか！このようなことの原因は何かと、わたしたちはしばしば自問します。そして、実際に罪が何であるかよくわからないまま、すぐに罪のためだと答えます。わたしたちはすぐにエネルギー、意志、一貫性の欠如に思いがいきます。それはわたしたちの日常生活に影のようにつきまとい、わたしたちの多くの日々をくすませる道徳主義への傾きの症状です。

それでは道徳主義によってすぐに道を踏みはずすことなく、この問題をより深く見てみましょう。罪の経験は《文字通り、御父の意識の欠如、つまりこの意識を生じさせるための緊張の欠如》です。実際、《わたしがこの“わたしより大きい”ものにつながっているなら、[...]わたしの本質が意識的に生きることであるならば、わたしがこの関係の意識を放棄すること、それが悪である！悪は、この関係の意識を放棄する人間の行動である。[...]本当の悪、悪を織り成すのは、この忘却である。そうであるなら、朝、夕の祈りは何と大切なことか！わたしたちの父よ、と唱えることがどんなに重要なことか！24時間のうちの少なくとも一瞬は真の人間となるように、言葉の意味を考えながら、ゆっくり唱えるようにしましょう。なぜなら、それは後々すべてに影響を与えるから》²¹⁴なのです。

本当の問題は、エネルギー、意志、一貫性の欠如ではなく、忘れること、御父との親密さを欠くことです。そして、これは能力の問題ではありません。御父の意識、つまり

²¹² L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit. p. 138. 逐語訳

²¹³ ポール・クローデル, *マリアへのお告げ*, 木村太郎訳, ヴェリタス書院, 京都 1960年, p. 170.

²¹⁴ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., p. 134. 逐語訳

子であることの意識がなくなると、生きる目的が矮小化されます。だから、まったく自己主張になります。つまり、わたしたちは《すべてを無に投げ入れる一時的な目的のために行うことになる。わたしたちは自分自身のために何かをする場合、すべてを無に投げ入れるのである。90パーセント、いや、わたしたちの行動すべてはこの恐ろしい運命にあるので、これに抵抗して歩まなければならない》のです。従って、人生がより大きな何かのためにあるという意識がわたしたちのうちに成長せず、時間が経つにつれて《わたしたちが行うことすべての起源でなければ、すべてを無に投げ入れることになる》²¹⁵のです。

自分自身のためにやることは、すべてを無に投げ入れることと同じで、すべてが深さ、意味に欠けるため儂いものになるのです。わたしたちがしなければならないことの、行為の適切な目的が欠けるのです。人生・いのちは、食べること、飲むこと、家庭を持つこと、仕事、レジャー等の外見に矮小化され、平坦なものとなります。最終的に生き甲斐となるものは何もなく、わたしたちを引き付け、物事に意味を与えるものはなくなります。物事の価値は、実際にそれらが持っている意味と、それらを生きる意識の強さによるのです。

ジュッサーニは、教師としての初めの頃に起こった印象的なエピソードを《宗教の授業を始めた頃、学生に話していたことだが、まだ家畜を運ぶ車両があった戦後すぐに、一等席でミラノのカリタス(モンシニョール・ビッキエライが会長を務めていた)を代表して行ったサンレモからの帰路のことだ。しかし、一等席でさえぎゅうぎゅう詰めだった。わたしの近くには、70歳くらいの洗練された初老の紳士がいた。彼は修道院に多額な寄付をするためにサンレモに行ったと言った。そして、名乗らずに“わたしは何十もの工場、会社を持っているので、人生で望んだことはすべて手に入れました。”一要するに、彼は著名な事業家だった—“しかし、70歳になった今、わたしは人生を無駄にしたのではないだろうかと自問するのです。”と話していたことを覚えている》²¹⁶と思い起こしています。

今日、わたしたちは、「神秘」、御父との親密さを学ぶにはどうすればよいでしょうか。つまり、イエスが歴史にもたらした現実との関係を学ぶにはどうすればよいでしょうか。ニヒリズムの誘惑に屈しない可能性、現実、自分自身の実質に対する疑い、そして生きることが肯定的であることへの疑いに陥らない可能性はこのことにかかわります。イエスが子であるように、今日、子らを生み出すことができるのは何でしょうか。

²¹⁵ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit. p. 135. 逐語訳

²¹⁶ 同書, pp. 135-136. 逐語訳

6章

御子において子

わたしたちは、キリストの意識が御父のことを考えることに、御父の意識に支配されていたということを見てきました。ですから、キリストに従うなら、「彼」に従う決心をしたなら、《神の意識は、わたしたちが行うことに入り込まなければならない。その場合ゆっくりと、時間が経つにつれて、それはふだんのこととなっていく。[...]神のことを考えることは、すべてにかかわり、すなわち、すべてのものの見方に、あなた方の妻と自分自身、善と悪の見方に一致する。そうすると善は傲りにならず、悪は絶望にならない》²¹⁷のです。

この点において疑問が生じるかもしれません。弟子たちは《自分を受け入れた人、その名を信じる人々に神の子となる資格を与えた》²¹⁸と言われるように、イエスによって自分と御父との関係を意識するよう導かれました。では、今日、わたしたちは誰によってその関係に導かれるのでしょうか。御父との関係に導くのは常にキリストです。どのように導かれるのでしょうか？

1. 信じる者の仲間を通して。カリスマ

キリストは、これまで思い起こしてきた²¹⁹ように、今日わたしの人生に出現し、ある存在、特定の肉体、説得力のある出会いを通して自分に引き付けるので、「彼」に出会った最初の人たちが経験した同じ関りの経験をすることができます。ですから、御子において、今ここにいるキリストとの関係の中で、わたしたちは「父よ」と言うことを学び、わたしたちをつくっている神秘を「父」と認めることを学ぶのです。アッバはイエスが使う言葉で、その時までには想像にも及ばなかった、考えられなかった、神との関係の親密さを表します。

2000年前と同じように、わたしたちは聖霊、《わたしたちを神の子とする、貴重で必要なたまもの》²²⁰であるキリストの霊を受ける信仰と洗礼を通して《御子において子》になります。そして「教会」であるキリストの体の、*教会憲章* 4 で思い出されている聖チプリアノの美しい記述《父と子と聖霊の一致に基づいて集められた民》の一員となり、異なる方法でその建設と使命に貢献するために与えられた《階層的賜物とカリスマ的賜物》によって豊かにされます。階

²¹⁷ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., pp. 133-134 逐語訳

²¹⁸ ヨハネ 1,12

²¹⁹ 本書 p.35-40 参照

²²⁰ ベネディクト 16 世, *一般謁見*, 2012 年 5 月 23 日 カトリック中央協議会

層的賜物とカリスマ的賜物との関係に関するカトリック教会の司教への手紙 *Iuvenescit Ecclesia* (若返る教会) は、ヨハネ・パウロ2世によって明確に示されたこれらの賜物が《どちらも不可欠》という原則を思い起こし、教皇ベネディクト16世の主張である《「教会」における重要な組織もカリスマ的です。そして、それぞれのカリスマは一貫性と継続性を保つために何らかの方法で制度化されなければなりません。こうして、聖霊を起源とする双方の次元は、キリストの体を通して共に世界にキリストの神秘と救いの業を具現化するために貢献します》²²¹を引用しています。

このため聖霊の賜物から生まれる運動や新たな集団は、「教会」が《強引な改宗活動によってではなく“人を引き付ける”》²²²ことによって成長するという重要なことを証しています。

教皇フランシスコは、これらの新しい現実(運動や新しい集団)に対して、宣教へ開かれていること、司教・司祭への従順と「教会」の内に留まる必要性を絶え間なく呼びかけています。なぜなら、《御父によってわたしたちに豊かに与えられる賜物は、共同体の中でつぼみをつけ、開花し、共同体の懐でそれらをすべての子に対する御父の愛のしるしとして認めることを学ぶ》²²³からです。

わたしたちは神に、御父に帰属し、もっとも基本的な意味で《神のもの》です。つまりわたしたちは「神」の創造物です。けれども、わたしたちのこの創造物としての依存について《[聖霊のうちに]キリストによって明確にされなければ、謎めいた束の間の認識のままであったらう。“いまだかつて、神を見たものはいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである(ヨハネ1,18)”》とジュッサーニは言っています。「人」となり、歴史に介入した神への帰属によってのみ、《[究極的で]完全な依存、わたしたちの“つくられている”という意味が明らかになる》²²⁴からなのです。そして、キリストに帰属するというのは、《わたしたちが持っているキリストのイメージではなく、ローマの司教、教皇との一致のうちにある、信徒の交わりの中で歴史上に留まり実在するキリスト》²²⁵に帰属することです。

御子は、今日「教会」を通して、わたしたちに御父の神秘を親しみのあるものにし、あるカリスマ、わたしたちの場合はドン・ジュッサーニに与えられたカリスマとの出会いの恵みを通してわたしたちにとって出来事となります。神の霊は、自由と無限の想像力で、《千のカリスマ、キリストにおいて人間に伝わる千の方法をつくり出すことができる。カリスマは、まさに主がわたしにとって、そして他の人にとっても同様に、出来事となる時間、空間、性格、気質、心理的、情緒的、知的方法を表す。この方法は、わたしから他の人に伝わり、

²²¹ 教理省, *Lettera Iuvenescit Ecclesia*, 10 逐語訳

²²² 教理省, *Lettera Iuvenescit Ecclesia*, 2 に引用された教皇フランシスコ, 使徒的勧告 *福音の喜び* 14

²²³ 教理省, *Lettera Iuvenescit Ecclesia*, 10 逐語訳

²²⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p.85 逐語訳

²²⁵ L. Giussani, *La verità nasce dalla carne*, op. cit., p. 54. 逐語訳

わたしと那些人たちの間には、他のすべての人とは異なる親近感、より強い、より緻密な兄弟愛の絆がある。こうしてキリストは、御父の神秘が定める歴史的状況の中で、「彼」の存在を認めさせ、愛するようにし、世の終わりまで、毎日、わたしたちと共にいる》²²⁶ のです。

従って、カリスマは《今日における「出来事」の明確な事実であり、まさにわたしたちを動かす時 […] キリストの「霊」がわたしたちにその並外れた存在を認識させ、素朴さと愛を持ってキリストに従う力を与える方法》²²⁷ なのです。カリスマは教会を生き生きとさせる「教会」全体のためのものです。《「霊」が人をキリストの「出来事」に触れさせるために用いる歴史的方法は、どれも常に“特定”なものであり、特定の時間と空間、気質、性格によるものである。しかし、それは全体に開かれている特定なものである》²²⁸ とジュッサーニは言っています。

ヨハネ・パウロ 2 世は、《一つの運動を生み出すカリスマの独創性は、「教会」によって情熱的な忠実さで保持されており、もとより可能なことではありませんが、*信仰の遺産*の豊かさに何かを加えようとはしません。しかしながら、その独創性は、キリスト教の経験を知性と創造性を持って十分に生きるための強力な支えであり、示唆に富んだ説得力のある呼びかけです。これは、移り変わる歴史的状況や時代の緊急性と挑発に適切な答えを見つけるための前提条件です。この観点から、「教会」が認めているカリスマは、すべてのキリストの民との交わりにますます根を下ろすと同時に、キリストに対する知識を深め、より寛大に「彼」に自分自身を与え尽くすためへの道を示します》²²⁹ と鋭い指摘をしています。

次の証言は上記のことをとてもよく説明しています。《わたしは今年、CLの兄弟会に入会しました。59歳で。普通は何かを始める歳ではなく終わる年齢です。前置きですが、以前からわたしは大勢のいところを通して運動とはつかず離れずの関係でした。ですから、ドン・ジュッサーニのメッセージはわたしを間接的にとらえました。わたしにとって魅力的だったのは、《わたしは一体誰なのかしら？わたしは家で、両親と昼食を取る時はキリスト信者だけど、学校では誰でもないの？わたしは日曜日のミサ中は信者だけど、その後、映画館では別者？》という問いに対する答えを見つけることでした。教育に育まれたものではなく、要

²²⁶ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 127-128. *Iuvenescit Ecclesia* に《カリスマは“個人に与えられるものですが、ほかの人々と共有することもできます。ですから、人々の間に特別な霊的な親しさを生み出すものとして、尊く生き生きとしたものとして受け継がれ、いつまでも保たれることとなります。”(ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告 *信徒の召命と使命*, n. 24: AAS81 (1989) 434)。カリスマの個人的な性質とそれに参加する可能性との関係は、教会共同体で常に個人と共同体を結びつけることに関わるため、その躍動の決定的な要素を表す(参照同上, n. 29: AAS81 (1989), 443-446)。カリスマ的賜物は実際において、親近感、親しみ、霊的な親近性を生み出すことができます。これらを通して、創設者に由来するカリスマの遺産が共有され、深められ、まさに真の霊的家族に命を与えます。教会の新しいグループは、その多様性において共有されたカリスマの賜物と言えます》(教理省, Lettera *Iuvenescit Ecclesia* ai Vescovi della Chiesa cattolica sulla relazione tra doni gerarchici e carismatici per la vita e la missione della Chiesa, Roma, 15 maggio 2016, 16.)と書いている。逐語訳

²²⁷ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 129-130 逐語訳

²²⁸ 同書, p. 129 逐語訳

²²⁹ Giovanni Paolo II, *Messaggio al Congresso mondiale dei movimenti ecclesiali*, Roma, 27 maggio 1998 逐語訳

求として自分の内面で感じていたことと、68年以降の執拗な思考、先入観に基づいた表面的な判断など自分の外で遭遇したすべてのものをどのように合致させるのだろうか、と。この問いかけはずっと続き、パズルに意味を与える接着剤を見つけるために、生活のどの面でも探し続けていました。その問いに対して、ジュッサーニの“現実を生きる”という呼びかけの中に、最初の方向性、具体的な可能性を見つけました。もちろん、わたしが祖父母に見ていたものは良識でした。当然、信仰が自然に溶け込んだ彼らの人生は、どの行為も信仰から切り離されることはありませんでした。逆にわたしは日常生活の中で、すべてを疑問視するという態度を取っていたためすべて混乱していました。狼狽、分裂、はれ物に触るような表面的な人間関係。けれども、わたしはまるで立ち聞きしているかのように、答えはあると、一人の師が道を指し示してくれるのを聞きました。そして、“現実を生きる”という一言を持って、わたしは前進しました。4人の子供、忙しい仕事、多くの困難と多くの成功、充実し筋の通った刺激的な人生でした。ずっと探し続けた人生でした。なぜなら、すべての苦労や“すること”は手探りの探求、望みだったので、可能なすべての道、多くの道を試みました。わたしは可能な限り物乞いのように確証や支えを求めましたが、見つけることはできませんでした。わたしは成果への拍手あるいはやり過ぎへの非難、評価は受けましたが、それは交わりではありませんでした。その後、予期せぬ出来事が起こりました。“あなたは、生きているキリストを自分の中にもっているの？”とある人に言われ、わたしは窮地に立たされました。答えではなく、問いでした。そして、答えはすでにそこに、わたしの目の前ありました。今日、傍らに、自分の中の生きたキリストはその人の顔をしていました。世の終わりに会うキリストではなく、今日、ここに、今。わたしのために。あの瞬間はわたしの人生を変えました。それは、わたしの祈り方を変えました。前もって定めた計画に従って苦労して点を稼ぐのではなく、親近感、傾聴、期待、信頼。また現実の中のわたしの動き方も変えました。ある「存在」の傍らで、つまり異なったまなざしで“現実を生きる”ようになったのです。自分に注がれた同じまなざし。自分が変えられたので、目の前にいる人を変えるあのまなざしです。わたしが人生で読んで学ぼうと勉強し、理解しようとしたものは、違うものでした。苦労ではなく、明確な事実でした。そして、仲間のうちで深められるなら、この明確な事実は、ずっと探し求めてきたわたしの魂のための音楽です。》

「教会」の中で、「教会」のためにカリスマによって生み出された仲間がわたしたちを感動させ、それに惹きつけられるなら、それはまさに《この「男」との出会いを具体的な経験とし、「彼」を抽象化から取り戻し、今生きることが出来る現実として「彼」を経験させるからである。仲間は、考えでも、言説でも、論理でもなく、事実であり、帰属関係に関わる存在》²³⁰なのです。

²³⁰ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 86. 逐語訳

2. 権威、今存在する父性

キリストとの出会いが起こる具体的な仲間は、《わたしたちの自己の帰属の場所に、物事を知覚し、感じる究極的な方法を得る場、物事を知的に理解し判断し、想像し、計画し、決定して行う方法を得る場となる。わたしたちの自己は、キリスト信者の仲間であるこの「体」に帰属し、その中ですべての物事に立ち向かうための究極の基準を得る。こうした仲間は、唯一わたしたちに現実に立ち向かう能力を与え、現実に触れさせ、わたしたちを本物にするのである》²³¹とジュッサーニは言います。

では、今ジュッサーニと共に《わたしたちが呼ばれている民にとって、わたしたちが参加している仲間においてもっとも重要な要因は何だろう?》と自問してみましょう。彼は《民としてもっとも重要な要因は、わたしたちが権威と呼ぶものである》²³²と答えます。権威が民としての現実のもっとも重要な要因であるのは、権威がいなければ民は生み出されないからです。そして権威とは、キリストが勝利することが明らかになる場、キリストが説得力のある方法で心の要求に一致することを証明する場です。《権威とは、その人を見ることによって、キリストの言うことが心に一致するのだと、理解させる者のことである。このことによって民は導かれるのである》²³³とジュッサーニは言います。

わたしたちの社会では、《権威》という言葉はしばしば懸念を持って見られるもので、人々を支配下に置く力や、人々を自分自身に縛り付ける個人主義と見なされます。けれども、ジュッサーニが指摘しているように、「教会」の生活の中では、神の民の中ではそうではありません。そうであってはならないのです。《権威、指導者は、権力とは反対の存在であり、権力の意味合いはかけらも持たない。このため、神の民における権威の意味合いには、どのレベルにおいても、恐れの影響はまったく存在しない。なぜなら、権力は恐れと呼応するものであり、人は恐れから自由になるために権力を無視しなければならないからである》²³⁴とジュッサーニは続けます。

それでは、権威との関係、神の民への帰属を特徴づけるものは何でしょうか。この関係は、ペギーの弟子であることと、子であることの区別²³⁵にあるように、父子関係という言葉

²³¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 85 逐語訳

²³² L. Giussani, «La gioia, la letizia e l'audacia. Nessuno genera, se non è generato», *Tracce-Litterae communionis*, n. 6/1997, p. II 逐語訳

²³³ Da una conversazione di Luigi Giussani con un gruppo di *Memoires Domini* (Milano, 29 settembre 1991), in «Chi è costui?», suppl. a *Tracce-Litteare communionis*, n. 9/2019, p. 10. 逐語訳

²³⁴ 同所 逐語訳

²³⁵ ペギーは《弟子が師の響きではなく、師の思想の貧弱な繰り返ししかならない時。弟子が、もっとも偉大な弟子であったとしても、弟子だけであるなら、何も生み出すことはない。弟子は、自分自身の新しい響きを加えた時にしか創造し始めない(つまり、弟子に終わらないなら)。師を持つべきではないということではないが、勉学の師弟関係からではなく、自然な親子(父子?)関係の方法から系統を受け継ぐべきである。》と書いている。(Cfr. Ch. Péguy, *Cahiers*, VIII, XI [3.2.1907]) 逐語訳

葉でよく表されています。帰属するという事は、師弟関係や繰り返しではなく、父子関係を意味します。父子関係の方法を通して本物の仲間の特徴、カリスマの独自性、《わたしたちが託された教えの形》²³⁶がわたしたちのうちに浸透して行きます。ジュッサーニは、わたしたちが権威の子であることを《子は父親の切り株を受け継ぎ、父親から与えられた血筋によって成っており、父親に成されている。だから、完全にとらえられている。権威はわたしのすべてをとらえるのである。わたしを脅かす言葉でも、恐れを抱かせるものでも、恐れるから“従う”というのでもない。神がわたしを引き付けられるように、わたしをとらえるものである。だから、《権威》という言葉は《父性》という言葉と同義語と考えることができる。つまり、生を与え、命を繋ぎ、ゲノムを伝える。血筋を引き継ぐのである。命の血筋というのはこの関わりによってとらえられ、変えられるわたしの自己である。《権威》という言葉は、《自由》という言葉に繋がり、自由を生み出す。子であるというのは自由であることである》²³⁷と思い出させます。

権威は今存在する父性です。《御子において子》であるためには、キリストにおいて、わたしたちの頭の中のキリストではなく、今、ここにおられる実際のキリストにおいて子であるためには、従って御父との関わりに導かれるためには、現在における父性が生きることが必要です。つまり、わたしたちを子として生み出す存在が必要なのです。ジュッサーニは《父がいるということが不変な状態であるのは、その歴史に属するからである [それぞれの歴史、誰もが父親を持っているので。ここに決定的なポイントが…]。1954年にわたしがベルシェ高等学校ではなく、他の高等学校に入っていたらまったく違ったことになっていただろう。状態は不変であるが、父性の興味深い点である子を産むのは存在であり、現在のものである》²³⁸と言います。

父子関係、生み出される経験がなければ、わたしたちの人格の開花も、真の創造性もあり得ません。《今生まれ出ていないなら、誰も産むことはできない。“生んでもらっていない”ならではなく、“今生まれ出ていないなら”である。このような父性の観念は啓蒙主義的文化にもっとも攻撃されてきたもの》²³⁹で、多くの場合、キリスト信者の間でも、ドン・ジュッサーニに与えられたカリスマに遭遇する恵みを受け、今テーマとなっている事柄を新たな、そして魅力的な方法で見出すことができたわたしたちの間でも同じ攻撃がされます。

《人は父と言える誰かがいないなら、その人も父、命の与え手にはなれない。[要注意！] [父が] “いた”と言っているのではなく、[現在において] 父と言える人が“いなければ”と言っているのだ。父と言える人がいなければ、出来事だとは言えないからである、[…] 産

²³⁶ ラツィンガーの有名な表現である。《信仰は、わたしたちが託された教えの形への心からの従順です》

J. Ratzinger, *Intervento di presentazione del Catechismo della Chiesa Cattolica*, in *L'Osservatore Romano*, 20 gennaio 1993, p. 5). 逐語訳 ローマ 6,17 参照

²³⁷ L. Giussani, «La gioia, la letizia e l'audacia. Nessuno genera, se non è generato», *Tracce-Litterae communionis*, n. 6/1997, p. II. 逐語訳

²³⁸ 同書, p. IV. 逐語訳

²³⁹ 同所 逐語訳

んでいないのだ。産むことは現在における行為なの》²⁴⁰です。

イエスは、わたしたちを惹きつけた仲間のうちで、現在の父性を生きるように呼び掛けながら、自分と御父との親密な関りにわたしたちを導きます。こうした父性は、イエス特有の御父との関係がわたしたちのもの、つまり、あなたやわたしのものになる方法なのです。この新しさが起こるように、御父との関係がわたしたちの人生・生活を完全に包み込むように、こうして、たとえもっとも平凡でありふれたものでも、わたしたちのすべての考えや行動の基準になるべきで、そのためには、今、父性が必要です。つまり、キリストを経験可能、明確な事実で説得力のあるものとならしめる存在によって今生み出されている必要があります。今生み出されることを介さなければ、御子において子になることはできません。このように現在において生み出されるのでなければ、御父との関わりはわたしたちのうちに意識的で生き生きとしたものになることはできないでしょう。そして、どんな努力もわたしたちを無から引き離すことはできないのです。

ジュッサーニは、この《今》の本質的な必要性を比類のない言い方で《出来事というのは、ただ起こったことそのものや、それによってすべてが始まったというのではなく、現在を引き起こし、現在を明らかにし、現在に意味を与え、現在を可能にするものである。知っていることや持っているものが経験となることは、知っていることや持っているものが今わたしたちに与えられることである。つまり、今、手がそれを差し出し、今、目の前に顔があり、今、血が流れ、今、復活が起こるのである。『今』はこのこと以外の何ものでもない。まさに今起こらないのなら、わたしたちの自己は動くはずも、感動するはずもなく、すなわち変わるはずはないのだ。それが出来事である。キリストは今わたしに起こっていることである。だから、わたしたちが知っていること、キリストやキリストについての話が経験となるためには、わたしたちを刺激し、心を動かす現在でなければならぬ。つまり、アンデレやヨハネにとって現在出会ったような現在である。キリスト信仰は、キリストはアンデレやヨハネが彼の後をついて行ったときとまったく同じものである。だからキリストが振り返ったとき、彼らがどれほど驚いたことだろう！そして彼らがキリストの家に行ったときのことを…今に至るまで、今この時まで常にこうなのだ！》²⁴¹と強調しました。

けれども、この父性が存在するだけでは十分ではなく、それによって自分自身を生み出させる心の開きが必要です。わたしたちの人生・いのちの豊かさは、子となることに心が開かれているか否かによります。《イエスがニコデモに言ったことである。“新たに生まれなければならない”。“どのようにして？新たに生まれる？もう一度母の胎内に入って生まれることができるでしょうか？”“新たに生まれない者は現実の真実、物事の真実を理解す

²⁴⁰ L. Giussani, «La gioia, la letizia e l'audacia. Nessuno genera, se non è generato», *Tracce-Litterae communionis*, n. 6/1997, p. II. pp. II-IV. 逐語訳

²⁴¹ L. Giussani, 2011年 コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの復活祭のポスターの言葉

ることはできない”。ここで言う理解が新たに生まれるということである》²⁴²とジュッサーニは言います。

子となって「彼」に従うことを受け入れる人は、自分の人生に起こり始める新しさに驚くでしょう。

3. 従順

さらにジュッサーニは、新しい自意識の成長のために決定的であると考えさらなる一歩を踏み出すようわたしたちを促します。以前、回心は、わたしたちのうちに、わたしたちの間にある新しさを見極める知性である認識と従順として信仰を理解することを取り戻すことだと述べ、これらの言葉を再び取り上げることを約束しました。

《この知性によってわたしたちが招かれる従順に到達したいなら、越えなければならないハードル、無視できない障害物のようなものがある。それはわたしたちが“権威”と呼ぶものを考慮に入れることである。ここでわたしが思い起こしていることが、キリストによってつくられた「教会」の権威、教皇と他の人々と一致のうちにある司教に当てはまるならば、類推して、現実的で教育のためには決定的であるより下のレベルにも同様に適用されると言える。キリスト教の生活においては、“権威”を担うどんな存在にも適用されるのだ》²⁴³とジュッサーニは言っています。

この点に注意する必要があります。なぜなら、権威という《このしるしがなければ》《わたしたちの間に仲間、「教会」の神秘、世の善のためにその中を歩んでいる新しい民は存在しない。権威がなければ、キリストがわたしたちに共に生きるよう呼び掛けられた新しさはない》²⁴⁴のです。

1975年に回心の道について話した時、ジュッサーニは《権威という要因との関係は教育的に決定的である。この要因を無視するなら、わたしたちはそよ風にさえ吹かれて地表に散らされるほこりになり、聖パウロがエフェソへの手紙の第4章で言っているように、“…人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりする”不安定な子どもに後戻りすることになる》と言いました。よって、《わたしたちの間の権威は議論されるべき文化的見解ではなく、他の見解と同じように提示されるものではない。権威の役割は、わたしたちの人間としての、キリスト信者としての経験に関わる統一的な提案をすることである》²⁴⁵と続けます。

次の節では、権威の性質と、それが結果的にわたしたち一人一人をどのような性質の関係へと呼びかけるかが、《権威は、生き方の経験を提案するに当たって、細部までも、わたしたちの人格のすべてをかけるよう求める。つまり、権威は、「神秘」の最高のしるし、御

²⁴² L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, op. cit., p. 130 逐語訳

²⁴³ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

²⁴⁴ L. Giussani, *Un avvenimento nella vita dell'uomo*, op. cit., p. 229. 逐語訳

²⁴⁵ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

父の摂理の「神秘」のしるしだ。展開し、流れている歴史として、発展している歴史として、わたしたちの間にいる「神秘」の最高のしるしなのだ》と述べています。このため、つまり権威がわたしたちの間にいる「神秘」の最高のしるしであるという事実から、《権威の役割に対する注意深い誠実さを従順と言う。議論で優位になったためではなく、主に対する従順であるため、権威の前では信仰の行使がある。よって、運動全体の一致に対する真の誠実さの中でしか、わたしたちの間に権威はあり得ない。同様に運動は、キリストに与えられた権威に対する誠実さを深かめて生きなければ、どんな権威も得ることはない》²⁴⁶と強調されています。

この一節は、わたしたちが属しているキリスト信者の仲間の中で《権威》を認め、評価するためのしるしや基準も示しています。ジュッサーニはとても正確に《わたしたちが運動について言うことは、常に教育的な価値がある。わたしたちの試みは、わたしたちの人生・生活の中で「教会」の意味を成熟させようとする教育的な試みなのだ。つまり、〔運動〕は、主がその目的のために生きるようわたしたちを招かれた経験だ。したがって、運動全体の生活の中で、運動への一致の中で深い誠実さを感じられ、見受けられない権威は、存続できず、人々が従うことはない。もし、支持されることがあってもそれは独裁的、独裁体制になり、何らかの強制であり、人を疎外するものになる。世の中の権威の考え方は、つまづかせるものであって、建設的なものではないのだ》²⁴⁷と述べています。

真の権威は建設に不可欠な要素です。世の中が考える権威、つまり権力は、疎外する専制主義であり、つまづきの石であり、建設的ではありません。しかし、これらの指摘はキリスト教の経験の範囲を超えるものです。実際わたしたちは、すべての人の次元、信者にも、未信者にも必要なことについて話しています。キリスト教で起こることは、人間の躍動の真実であり、強化です。ですから、特定の人物を超えて、真の権威 (*auctoritas*, "成長させるもの") は、わたしたちの自己の成長に、人格の形成に不可欠な要因です。権威の経験は、現実に対する意識に富んだ人との出会いとしてわたしたちの人生・生活の中に伝わります。総体的な状況にわたしたちを導き、それらを適切に解釈し、立ち向かうための“意味の仮説”を具現化しながら、同時にその仮説の根拠をまず自分で検証し、確かめるよう促すのです。さらにジュッサーニはあえて《権威は、ある意味でわたしより真の“わたし”だと言える。にもかかわらず、今日では多くの場合、勧められる権威は個人にとって馴染みのない“取って付けた”ものとして感じられる。権威は、ことによると、制限を与えるものとして敬虔に受け入れられたとしても、意識から外れたままである》²⁴⁸と主張しています。

この馴染みのなさが勝ると、権威は自己の成長のための要因としてではなく、障害として認識されます。奨励され、実際に経験されるこの馴染みのなさのため、ジュッサーニは《今日の文化は、ある一人の人に従う“だけ”では、自分自身と現実を知り、変えること

²⁴⁶ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

²⁴⁷ 同所. 逐語訳

²⁴⁸ L. Giussani, *Il rischio educativo*, op. cit., p. 84 逐語訳

は不可能だと考える。わたしたちの時代には、人は、知識と変化の手段として考えられておらず、これらの理解も矮小化され、知識は分析的、理論的な考察として、変化はルールの実践と応用として理解されている。しかし、イエスに遭遇した最初の2人、ヨハネとアンデレは、その並外れた人に従って、自分自身と現実を異なる方法で知ること、これを変えることを学んだのである。あの最初の出会いの瞬間から、この方法は時間の中で発展し始めたのだ》²⁴⁹と指摘します。

カミュは、その強烈な自伝的物語の*最初の人間*の中で、わたしたちの構造的な権威の必要性、自己に取って付けたものではない父性である権威の必要性を《わたしは最初から、つまりごく小さい頃から、何が善で何が悪かを、自分一人で見つけようと努めてきました。——だって私の周囲にいる人たちは誰もそれを教えてくれなかったんですから。それから今はわかったことですが、すべてが私を見捨てたとはいえ、私には道を示してくれる誰かが、[...] それも力によってではなく権威によってそうしてくれる誰かが必要なのです。父親を必要としているのです》²⁵⁰と証言しています。

それは、キリスト教の経験の中で本質的な要素であることを示しながら実現します。《建設するには、不動でしっかりした地面が必要だ。さもなければ建設はできない。わたしたちの中にあるキリストの神秘以外に不動で確かなものがあるだろうか。その確信は、キリストの神秘が「彼の教会」に留まっていることと、今までも多くの労苦を要し、これからもさらに苦労を要するこの「教会」の権威に従うことから得ているのだ》²⁵¹とジュッサーニは言います。

従順を強調した後、ジュッサーニは—1975年の話をしていますが、彼の言葉はわたしたちの現状を言い得ています—講話の最初に戻り、聞き手に自分自身の満足を求めることと、自身の回心を求めることとの間の対立に注意するよう促します。《だから、皆にこの対立についてよく考えて欲しい。この対立が、わたしたちを養う根、わたしたちの信仰による知性を養う源とキリスト信者としての務めを果たすエネルギーであり、善良な神が与えられる様々な状況で求められる活動をするエネルギーである意志との間に起こる分離の危険のもとだと考える。残念ながら、家が燃えているような時なので、ソファーでくつろいでいる時間がない。人間という家が燃えているのだ。わたしはこの対立に植物の根と開花の間の解離を容易にする危険を見ている。根から切り離された植物は枯れる運命にある。すなわち、運動、共同体、キリスト教的な生活そのものを自己満足のために生きることと、自分自身の回心を求めて生きることとの対立だ》²⁵²と続けるのです。

この対立の根本性と明確さは、ある意味で自分自身との比較を避けられないものとしませう。わたしたち一人一人にとって残る危険は、《自分が考え、感じ、興味があるものの基

²⁴⁹ L. Giussani, «Dalla fede il metodo», in *Dalla fede il metodo*, op. cit., p. 18. 逐語訳

²⁵⁰ A.カミュ、*最初の人間*、新潮社、大久保 敏彦 訳、東京 1996年、原注 p.302

²⁵¹ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

²⁵² 同所。逐語訳

準の回心ではなく、自分が考え、感じ、興味があるものを基準に自己主張することだ。最初の言葉として、主が用いた“メタノイア”という言葉はそれなりの理由があつてのことだ。評価の基準を変える必要がある。人生の価値、従って運動、共同体、CLの中での活動の価値は、あなたにとって切実な利益（大切にされること、友人を増やすこと、彼か彼女を見つけること、自分の考えが認められること）をどれだけ満たすかではなく、価値は[あなたの中で]起こる信仰への回心にあるのだ。それでは、これをテーマにしよう》²⁵³とジュッサーニは言います。

4. 《この世で百倍》

回心を促すもっとも簡単な方法は、自分にとっても他の人にとっても、わたしたちに届く人々の人生の証しです。ですから、恵みによって、わたしたちに届いた多くの証しの中から2つ紹介しましょう。

パンデミックが起こる前に受け取ったこの手紙は、わたしたちが話している継続的な回心の素朴な例です。

《去年はかなり困難な状態でした。わたしと夫は新しい仕事に完全に没頭してしまったのですが、しばらくしてわたしたちは道に迷っていることに気づきました。二人の関係がとても困難になるまで、わたしたちはただ日常をこなしているだけでした。わたしたちには何をするにもわずかな時間しかなく、友人はほとんどいない上、たいいてい遠くに住んでいました。ある時、わたしたちは立ち止まって、どこで間違っただのかを自問する必要がありました。わたしたちは、それぞれの仕事から一步下がって、何ヶ月もおろそかにしていたスクオラ・ディ・コムニタ²⁵⁴をもう一度始めることにしました。一緒に行くために、ベビーシッターを雇いました。その費用は子供たちを日中みてる人に支払う費用に加算されましたが、わたしたちが一緒に過ごすことができる唯一の夜をスクオラ・ディ・コムニタに当てることに決めました。わたしたちはスクオラ・ディ・コムニタに行き始めてすぐに、より幸せであることに気づきました。それは明らかで、わたしたちの関係の改善にも役立つものでした。わたしはそこで、思いがけず人々に喜んで迎え入れられたことに驚き、毎週新しい人がやって来ることに驚いています。わたしにとって、色々な人が自分たちの歩みのその時々にかかるキリストとの出会いについて話すことや、そこでされる質問は、最初にわたしたちを惹きつけたあの同じ「存在」に再会する機会となっています。わたしのためにもう一度起こっているのです！運動の中で15年間過ごしたけれど、スクオラ・ディ・コムニタに参加することをこんなに幸せに感じたことはありませんでした。平日でも（スクオラ・ディ・コムニタの）仕事をするように努めるので、それはわたしたちの日常を照らします。スクオラ・ディ・コムニタは、現実を見るための別の方法を、より

²⁵³ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975.. 逐語訳

²⁵⁴ CL の継続的な信仰教育の場

真実で全体的に見る方法を教えてください。再び従うようになってから、わたしたちは出会う人々に対してより心を開いているように思います。それは、すべての人々のうちに「彼」の存在の照り返しを認めたいから、同じ心の豊かさをすべてにおいて生きたいからです。キリストは思いやりと好意に満ちたまなざしでわたしの人生に入り込み、そのまなざしはわたしの実際の望みに唯一一致するものです。他のすべてのことは後でやって来ます。そして、最初の出会いが再び起こるお陰で、どこでもあの照り返しを見出すことができることに気づきました。今、その出会いはとても多くの顔を持っています！ 隣人や小教区の司祭に、同僚に、または単に起こることによって助けになる些細な事柄に「彼」が寄り添っていることを見るのはわくわくします。わたしたちが従いながら、この1年で行った仕事は貴重です。わたしたちは、より成熟し、より意識的で、大人の信仰、自由で喜ばしい信仰を持って、本当に支えになるものが何かを認識しました。この発見と意識の歩みをするのを助けてくださってありがとうございます。イエスは最後の晩餐で「わたしがいなければ、あなた方には何もできない」と言いました。体験によってそれが真実であると再確認できます》というものです。

聖ベルナルドが《神から来るものは、神なしで保つことはできません》²⁵⁵と書いているように。言い換えれば、「彼」の存在が再び起こり、わたしたちが応じなければ、味わったにもかかわらずその実りを増やすことはできません。真実への道は経験です。ジュッサーニの天才的な教育方法はすべてここにあります。

二つ目の証言は、人生の新しさを裏付けているため紹介したいと思います。子どもができない若い女性の手紙です。《4年前に結婚し、夫とわたしはすぐに子どもがほしいと思いましたが、今だに授かっていません。夫も友人もわたしを落ち着かせることができず、泣くのが日課という困難な日々を過ごしました。わたしにとってすべてがこの授からない子どもにかかっていたのです。わたしは自分の人生全体を部分的なものに見立て、唯一の幸福の可能性は、自分の頭で描いていた母になる要求への答えにあるかのように思っていました。ある時夫が「ねえ、結婚式の司式をしてくれた神父さんのところに行こうよ」と言いました。神父さんに最初に訊ねられることの一つは、「スクオラ・ディ・コムニタに休まず行っている？」だとわかっていたので、前もってテキストを読み始めました。いつも「いいえ」と答えなためです。その時のテキストは、なぜ教会なのかでした。そこでジュッサーニは“歴史における教会の役割は[……]母親のように物事の現実へ、つまり、人間が神へ依存していることへと呼び戻すことである[……]根源的な依存の意識を持って生きているならば[……]すべての問題はより解決されやすい状態に置かれる。[……]実際、個々の問題より大きな「何か」にまなざしを向けることは、すべてに良い道の見通しを与えることができる”²⁵⁶と書いていました。ホッとしました！わたしは、とりわけ夫と友人に囲まれていました。ある日、友人から電話

²⁵⁵ San Bernardo, «Sermone I,1», in Id., *Sermoni sul salmo 90*, a cura dei Monaci Benedettini di Praglia, Edizioni Scritti Monastici, Bressio di Teolo (PD) 1998, pp. 7-8. 逐語訳

²⁵⁶ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, op. cit., pp. 199, 201, 203. 逐語訳

があって、自分のことについて話しながら、“妊娠して、幸せを感じるけれど、その後それでさえ十分ではないことに気付くのだよ。問題は、わたしたちが何を人生の拠り所に行っているかよ”と言いました。なぜだか説明はできませんが、すぐに、その日から泣くのをやめました。わたしは変わりました。安定しているので、泣かずにこのすべてのことを伝えることができます。わたしは定義によってではなく、何人かの顔と事実を通して変わったのです。わたしは、消えていない自分の悩みに対して新たなまなざしで歩んでいます。わたしが自分のうちに見出しているのは、自分から生まれるのではない喜びです。その喜びによって、わたしは、「他者」の計画に完全に自分を委ねることができ、最終的に感謝の気持ちに満たされています。悩みはそのままありますが、それを穏やかに見つめることができます。聖アウグスティヌスは“わたしの心は、あなたのうちに憩うまで安らぐことはない”と言っていました。わたしが自分の考えから解放されるためには、「他者」がわたしの人生・いのちを満たす必要があります。わたしは自分の中にある望みを取り除くことはできません。けれども、今は答えが、自分が考える通りでなければならないという思い上がりには陥りません。わたしは「他者」が望みに答えてくれるのを待っていて、その答えを受け取る心構えがあります。キリストから再出発すると、困難はわたしを押しつぶすものでなくなります。キリストから離れるとすぐに、不安と恐れが現れ、自分の考えが勝って涙が勝ちます。逆に、主の存在から出発すると、最終的な判断は、わたしの人生・いのちに入り込んだこの奥底にある喜びと平安です。そして、わたしの人生全体を眺めると、キリストはわたしをだまさないことがわかります。わたしがキリストから再出発することに決める時、その「存在」は人生をより真実で、より快いもの、より人間的で、より美しいものにします。これは自分の目にとっても、他の人の目にとっても奇跡です》というものです。

キリストの肉体的な存在との出会いによって変えられた人間性の証言を前に、驚きに満ちて黙さないでいられるでしょうか！このことについて理解を助けるジュッサーニの《キリストは“わたしに従う人は、自分のわがまま、自分の考え、自分の興味が満たされる”と言いに来たのではない。いいえ！そうではなく“わたしに従う人は、基準を変え、評価の基準、価値、価値判断の基準を変え始めなさい”と言ったのだ。そのようにする人は、自分が失うかのように思えたものまで100倍与えられる。“わたしに従う人は永遠の命とこの世で100倍を得る”のだ。わたしたちを経験において挑発するので、これよりも明確ではっきりした勧めはこの世にはない。“わたしに従う人は、100倍多く、より多く見つけるだろう”。だが、“わたしに従う者”は、だけどね！》²⁵⁷という言葉があります。

1987年の司教シノドスでジュッサーニが述べたように、キリストに従うこと、御子において子になることを受け入れる者は、新たな主体、《世界という舞台での新しい主人公》²⁵⁸になります。

この新しさが世界におけるわたしたちの使命です。《この世におけるわたしたちの個人

²⁵⁷ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

²⁵⁸ L. Giussani, *L'avvenimento cristiano*, Bur, Milano 2003, pp. 23-25. 逐語訳

的および集団的な存在の意味、わたしたちの人に出会う力、この出会う力は、新しさにのみ、今日の経験である人生の新しさにのみ基づいている。今日、キリストとの関係と「彼」の存在によるわたしたちの間での新しい関係の経験の程度によって、今日、この経験をする場合にのみ、わたしたちは自分の周りにより人間らしさを、そして周りの人々の間でより平和をつくり出すことができる》²⁵⁹とジュッサーニは言っています。

5. 《世の中にとって、愛だけが信じられ得る》

わたしたち一人一人を待ち受けている日常の支えとして、心の中に保つように、1975年9月にジュッサーニの話を聞くためにミラノにいた人々に彼が向けた挨拶で締めくくりたいと思います。それは、《わたしたちは常にモラル的および肉体的な、個人的および社会的な困難にどっぷり浸かっているだろう。けれども、聖パウロがコリントの信徒への第二の手紙、4章で言うように、わたしたちは決して滅びない。“わたしたちは、このような宝（わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光）を土の器に納めている。[すなわち、神はこのようにされました] この並外れて偉大な力が神のもの[わたしたちの能力ではありません。わたしたちは土なので無力です]であって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、イエスの命がこの体に現れるためにいつもイエスの死を体にまもっている。”つまり、この世で》²⁶⁰というものです。

わたしたちがドン・ジュッサーニのカリスマを通して与えられた恵みに忠実であり、そのカリスマに惹きつけられ、従いたいと望むなら、そして今存在する「出来事」への個人的な回心として《キリストと福音を中心》に運動を生きるなら、教皇に協力しつつ、世の中における「教会」の未来、遠い昔1969年のクリスマスにラツィンガー枢機卿に予見された未来のために、《“出向いて行く”「教会」の腕、手、足、頭、心》²⁶¹となれるでしょう。

その予見とは《教会の未来は、今日もなお、深い根を持ち、自分の信仰の真の充満によって生きる人々からのみ来ることができるし、そうなるでしょう。教会の未来はただ処方を作る人々からは来ないでしょう。教会の未来はその時その時の刹那にうまく順応する人々からは来ないでしょう。[...]教会の未来は現代も、いつもの時代と同じように、聖人たちによって新たに形造られる、といえましょう。[...]今日の危機からこのたびも、多くを失った教会が明日生じるでしょう。明日の教会は小さくなり、まったく始めからやり直

²⁵⁹ FCL, *Documentazione audiovisiva*, Giornata d'inizio anno di CL, Milano, 14 settembre 1975. 逐語訳

²⁶⁰ 同所. 逐語訳

²⁶¹ 教皇フランシスコ, *コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ運動への話*, 聖ペトロ広場, 2015年3月7日 逐語訳

さなければならぬでしょう。未来の教会はかつての景気の良い時に造られた建築物の多くを人々で満たすことはもうできないでしょう。教会は減少する信奉者の数とあいまって社会におけるその特権の多くを失うでしょう。教会は従来とはいじりしく対照的に、個人の決意によってだけ入れる自由意思に基づく共同体として姿を現わすでしょう。教会は小さな共同体として今までよりもはるかにその個々の構成員のイニシアティブを必要とするでありましょう。[...]教会は信仰と祈りのうちに再びその神の核心を認め、秘跡を典礼上の形式の問題としてではなく、再び礼拝として経験するでしょう。[...]このすべてのことが時間を要することは予想できます。この過程は長くて骨の折れるものでありましょう。[...]しかし今述べた分離の試練をへてのちに内面化され単純化された教会から大きな力がほとぼり出るでしょう。というのは、徹底的に計画づくめの世界の人々はたとえようもなく孤独になるだろうからです。彼らは、神をまったく見失ってしまったなら、自分たちのあますところのない、恐ろしいみじめさを経験するでありましょう。そうして彼らはその時、信仰を持つ人々の小さな共同体を、何かまったく新しいものとして見出すことでしょう。自分にかかわりある希望として、彼らが人知れず常に問い求めていた回答として。教会の前途には実に多難な時代が控えていることはたしかであると私は思います。[...]しかし教会はあらためてさかんになり、人々に生命と、死を超える希望を与える故郷のように見られるようになることでしょう》²⁶²というものです。

この“預言”を響かせながら、わたしたちのこの時に開かれる新しい展望に、ジュッサーニは15年も経たないうちに《今は世界中で12人だけであつたらよかつたと思える時である》²⁶³と言いました。彼は排他主義や思い上がってそう言ったのではなく、わたしたちが最初に戻った、すべての始まりに戻ったという自覚をもって言ったのです。そして、最初のように、わたしたちを無から引き離すことができる唯一のものは、今日の人生の新しさの経験です。

今日信じることができるのはこの新しさだけです。《キリスト教の小麦の粒が真にかたちをつくり出し得るのは、自らを不毛にする世の中の他のかたちの傍らで、自分自身を幻想的な特別なかたちに閉じこめない場合のみである。実際、イエスの模範に従って、自分自身を与え尽くし、特別なかたちで自分の特色を犠牲にし、自分の力によって達成しなければならないという不安に動揺せずに世に飛び込み、あるいは投げ込まれる場合なのだ。なぜなら、世にとっては愛だけが信憑性のあるものだからである》²⁶⁴とバルタザールは言っています。

²⁶² J. ラッチンガー、*信仰と未来*、現代神学双書 II、田淵文男訳 あかし書房 東京 1971、pp. 93-97.

²⁶³ L. Giussani, *Certi di alcune grandi cose (1979-1981)*, Bur, Milano 2007, p. 396. 逐語訳

²⁶⁴ H.U. von Balthasar, «Solo l'amore è credibile», in Id., *La percezione dell'amore*, Jaca Book, Milano 2010, p. 144. 逐語訳

目次

導入	3
1 章	
実在的な状態としてのニヒリズム	4
1. 現実の実質と人生の肯定性に対する疑念	4
2. 人生・いのちに見合った意味の喪失	7
3. 一つの選択肢を前にする自由	8
4. 根絶不可能な望み	11
5. 答えを含む叫び	13
6. 叫びを受け止める《あなた》	15
2 章	
《どのようにして埋めるのか、この人生・いのちの大きな隔たりを？》	18
1. 不十分な試み	18
2. わたしたちの人間性	22
3. 《人を丸ごと“感じる”技》	25
3 章	
《CARO CARDIO SALUTIS》	28
1. 肉体的な存在	28
2. ユダヤ人ナザレのイエス	32
3. ある出来事	36
4. 真実をキャッチするために必要なのは誠実な注意のみ	41
5. 信仰という認識	42
6. 自由と信頼	43
4 章	
生涯続く道のり	46
1. 道の必要性	46
2. 自己主張（肯定）の誘惑	49
3. 回心。常に信仰を取り戻すこと	52

5章

父との関係

- | | |
|--------------------------|----|
| | 58 |
| 1. 「他者」に依存するわたしたちの人生・いのち | 58 |
| 2. イエスに従う、つまり、子であること | 63 |
| 3. 悪は忘れること | 68 |

6章

御子において子

- | | |
|-------------------------|----|
| | 70 |
| 1. 信じる者の仲間を通して。カリスマ | 70 |
| 2. 権威、今存在する父性 | 74 |
| 3. 従順 | 77 |
| 4. 《この世で百倍》 | 80 |
| 5. 《世の中にとって、愛だけが信じられ得る》 | 83 |

本書の中で、コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの兄弟会の会長は、無が私たち一人一人の人生に非常に強く迫り、生きることの肯定性や現実の究極の実質に対する疑念をほのめかす時代に、すべてが、私たち自身でさえ、無に終わるように見えるこの目まぐるしい時代に自ら立ち向かいます。しかしながら、現状は意味を持たずに生きることの耐え難さと、必要とされ愛されたいという不滅な願望を浮き彫りにするのはです。実際に起こる現在の出来事と、気を紛らわしたり忘れたりしながら生き延びようとする不十分な試みとを興味深く比較しています。

現在の挑発に見合った答え、つまり、私たちの人間性の叫びを受け止め、私たちのうちに自分自身と自分の人生・いのちへの愛を呼び覚ます《あなた》を探し求めます。そして、共に歩むことを魅力的なものにする生き生きとしたキリスト教共同体との出会い。現在の実経験に入り込み、新たな知識と愛情を生み出す信仰、道のりの途中で出会った真実、美、善良なものすべてを大切にすることのできる信仰の証しです。

JULIÁN CARRÓN は1950年にナバコンセホ（スペイン）で生まれる。1975年に司祭に叙階され、マドリードのサン・ダマソ大学で聖書学の教授を務める。2004年にコムニオーネ・エ・リベラツィオーネ運動の指導を共に担うようドン・ジュッサーニに呼ばれ、ミラノに移る。2005年3月19日より、コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの兄弟会会長を務める。2004年度、ミラノのカトリック聖心大学で神学部の教鞭を執る。2015年には『La bellezza disarmata（無防備な美しさ）』、2017年には『Dov'è Dio?（神はどこにいるのか）』、2020年には『Il risveglio dell'umano（人間の目覚め）』を執筆。